

353
924



始



3.3
904

開校生先帝池部
著 瑞島川和
教科教學叢書近
編

1911

特236
483

長崎醫科大學講師 菊池清先生校閱

九州鍼灸學校校長 宇和川義瑞 著

九州鍼灸學校講師 竹原保雄 校補



灸學教科書 第四卷

發行所 九州鍼灸學校出版部



病理學編目次

緒論	一	第二章 內因或八素因	一九
病理學歷史	三	第四章 病變論	三三
液體病理說	三	第一 退化性病變	三三
固體病理說	三	第一 萎縮	三三
神經病理說	四	第二 喪性	三四
血液病理說	四	第三 瘰死	三四
細胞病理說	五	第二 進行性病變	三七
病理學總論	七	第一 肥大及增生	三九
第一章 疾病論	七	第二 再生	三〇
第二章 病的現象	四	第五章 局部循環障礙	三一
第三章 病因論	五	(A) 充血	三一
第一 外因或八誘因	七	(B) 貧血	三一
		(C) 出血	三一

第(1)章	血塞	二五
第(2)章	栓塞	二六
第(3)章	水腫	二七
第(4)章	腫瘍	二八
第(5)章	炎症一名癩瘡論	二九
第(6)章	疾病ノ治療	三〇
第(7)章	死因論	三一
第(8)章	傾死	三二
第(9)章	瀕死ノ症候	三三
第(10)章	虚脱	三四
第(11)章	震盪	三五
第(12)章	意識障礙 譫妄、痙攣	三六
第(13)章	疼痛	三七
第(14)章	呼吸困難	三八
第(15)章	脈搏	三九

第(1)章	病理學各論	二二
第(2)章	症狀ノ觀察	二九
第(3)章	一般ノ注意	三〇
第(4)章	病体ニ及ボス精神作用ノ影響	三一
第一章	呼吸器病	三二
第(1)章	急性鼻加答兒	三三
第(2)章	慢性鼻加答兒	三四
第(3)章	血	三五
第(4)章	急性喉頭加答兒	三六
第(5)章	慢性喉頭加答兒	三七
第(6)章	声門水腫	三八
第(7)章	喉頭筋痙攣	三九
第(8)章	声門痙攣	四〇
第(9)章	急性気管枝加答兒	四一

第十	慢性気管枝加答兒	四二
第(1)章	気管枝喘息	四三
第(2)章	肺氣腫	四四
第(3)章	肺膿水腫	四五
第(4)章	加答兒性肺炎 <small>(一名気管枝肺炎)</small> <small>(或ハ小葉性肺炎)</small>	四六
第(5)章	纖維素性肺炎 <small>(名ヲルシクニ慢性肺炎)</small>	四七
第(6)章	肺結核 <small>(肺癆)</small>	四八
第(7)章	肋膜炎	四九
第二章	消化器病	五〇
第(1)章	加答兒性口内炎 <small>(單純性口内炎)</small>	五一
第(2)章	嚥口瘡	五二
第(3)章	生菌困難	五三
第(4)章	急性咽喉炎	五四
第(5)章	慢性咽喉炎	五五
第(6)章	扁桃腺炎	五六

第七	食道加答兒	五七
第(1)章	食道狹窄	五八
第(2)章	食道弛張	五九
第(3)章	食道憩室	六〇
第(4)章	食道癌腫	六一
第(5)章	急性胃加答兒 <small>(單純性急性胃加答兒)</small>	六二
第(6)章	慢性胃加答兒	六三
第(7)章	胃アトニー症 <small>(胃筋弛緩症)</small>	六四
第(8)章	胃痙攣	六五
第(9)章	胃潰瘍	六六
第(10)章	胃瘻 <small>(胃神經痛)</small>	六七
第(11)章	胃瘻	六八
第(12)章	急性胃消化不良	六九
第(13)章	慢性胃消化不良	七〇
第(14)章	急性胃消化不良	七一
第(15)章	慢性胃消化不良	七二

第三	急性腸加答兒	三〇
第三	慢性腸加答兒	三〇
第三	蟲樣突起炎(蟲樣室炎)	三〇
第三	腸管狹窄及閉塞症	三〇
第三	腸管便秘	三〇
第三	腸結核	三〇
第三	痔核	三〇
第三	神經性腸疝痛及腸神經痛	三〇
第三	腸寄生蟲	三〇
甲	膿蟲	三〇
乙	蛔蟲	三〇
丙	蟯蟲	三〇
丁	十二指腸蟲	三〇
第三	腹膜炎	三〇
甲	急性腹膜炎	三〇

(A)	急性腹膜炎	三〇
(B)	慢性腹膜炎	三〇
乙	慢性腹膜炎	三〇
附	結核性腹膜炎	三〇
第三	腹水	三〇
第三	黃疸	三〇
甲	腎帶性黃疸	三〇
乙	加答兒性黃疸	三〇
第三	腎血肝	三〇
第三	肝臟充血	三〇
第三	肝臟硬變	三〇
第三	肥大性肝臟硬變	三〇
第三	膽石症	三〇
第三章	泌尿生殖器病	三〇
第一	蛋白尿	三〇

第二	尿毒症	三〇
第三	腎血腎	三〇
第四	急性腎臟炎	三〇
第五	慢性腎臟炎	三〇
第六	化膿性腎臟炎	三〇
第七	萎縮腎	三〇
第八	腎盂炎	三〇
第九	腎臟水腫	三〇
第十	腎臟結石	三〇
第十一	膀胱炎	三〇
第十二	膀胱結石	三〇
第十三	膀胱癌	三〇
第十四	膀胱腺癌	三〇
第十五	膀胱癌腫	三〇
第十六	遺尿症	三〇

第十七	淋疾	三〇
第十八	軟性下疳	三〇
第十九	單孔及副單孔炎	三〇
第二十	遺精症	三〇
第二	陰萎症	三〇
第四章	循環器病	三〇
第一	急性心內膜炎	三〇
第二	心筋炎	三〇
第三	後天性瓣膜疾患	三〇
(一)	僧帽弁閉鎖不全	三〇
(二)	僧帽弁孔狹窄	三〇
(三)	大動脈弁閉鎖不全	三〇
(四)	大動脈弁孔狹窄	三〇
(五)	三尖弁閉鎖不全	三〇
(六)	三尖弁孔狹窄	三〇

(7) 混合心臟糸膜病

第四	神經性心悸亢進	三三〇
第五	心胸絞窄痛(狭心症)	三三〇
第六	動脈硬化症	三三六
第七	血圧亢進症	三三三
附	心臟転位	三三三
第五章	全身病	三三五
第一	貧血	三三五
第二	環血病	三三七
第三	糖尿病	三三九
第四	痛風(尿酸性關節炎)	三四〇
第五	眼病	三四〇
第六章	内分泌腺疾患	三四一
第一	ハセドール氏病	三四一
第二	「ラタニール」	三四四

第七章 運動器病

第一	急性關節樞廣質斯	三四〇
第二	慢性關節樞廣質斯	三四一
第三	筋肉樞廣質斯	三四三
甲	急性筋肉樞廣質斯	三四三
乙	慢性筋肉樞廣質斯	三四四
第八章	神經系病	三四五
〇	知覚神経疾患	三四五
神經痛總論		三四五
神經痛各論		三四六
第一	三叉神経痛	三四六
第二	後頭神経痛	三四二
第三	膊神経叢痛	三四三
第四	肋間神経痛	三四五
附	乳腺神経痛	三四七

第五	腰腹神経痛	三四七
第六	坐骨神経痛	三四九
第七	股神経痛	三五一
第八	外股皮下神経痛	三五一
第九	閉鎖神経痛	三五一
第十	精系神経痛	三四四
神経痛附録		三四四
第一	關節神経痛	三四四
第二	肢端知覚異常症	三四六
〇	運動神経疾患	三四六
運動神経ノ痺		三四八
運動ノ痺各論		三四〇
第一	三叉神経ノ痺	三四〇
第二	顔面神経ノ痺	三四一
第三	眼筋ノ痺	三四五

第四	副神経ノ痺	三四七
第五	舌下神経ノ痺	三四六
第六	横膈膜神経ノ痺	三四〇
第七	聯合性上肢神経ノ痺或ハ神經叢ノ痺	三四一
第八	橈骨神経ノ痺	三四四
第九	正中神経ノ痺	三四六
第十	尺骨神経ノ痺	三四八
第十一	肩胛筋部ノ痺	三四九
第十二	背筋及腹筋ノ痺	四二
第十三	下肢神経末梢性ノ痺	四三
甲	股神経ノ痺	四三
乙	臀部神経ノ痺	四四
丙	閉鎖神経ノ痺	四五
丁	坐骨神経ノ痺	四六
運動神経癱瘓		四八(7)

神經症各論

第一 顏面神經症 四三〇

第二 咀嚼筋痙攣(運動性三叉神經症) 四三二

第三 舌下神經症或舌前症 四三三

第四 頸筋及背筋症 四三四

第五 橫膈膜症 四三五

第六 肺腸筋症 四三六

附 脚氣 四三八

○ 脊髓疾患

第一 急性脊髓膜炎(急性脊髓膜炎) 四四〇

第二 慢性脊髓膜炎 四四一

第三 肥人性頸髓膜炎 四四二

第四 脊髓炎 四四三

第五 压迫性脊髓炎 四四四

第六 脊髓前角炎 四四五

甲 急性脊髓性大入痺(急性大入脊髄炎) 四四五

乙 慢性及慢性脊髓性痺(慢性慢性大入脊髄炎) 四四六

第七 痙攣性脊髓大痺 四四八

第八 脊髓癆 四四九

第九 筋萎縮性側索硬化症(シムシトク病) 四五〇

第十 脊髓性進行性筋萎縮 四五〇

第十一 進行性筋病性前角萎縮 四五〇

第十二 遺傳性運動失調(フリトライヒ病) 四五二

第十三 急性上行性大痺(ランドリー大痺) 四五四

第十四 脊髓半側損傷(ランソワール大痺) 四五五

第十五 脊髓空洞症(脊管脊髄及水腫脊髄) 四五八

附 進行性延髓死大痺(高橋大痺) 四五〇

○ 腦髓疾患

第一 腦貧血 四五二

第二 腦充血 四五三

第三 腦溢血(又ハ卒中或ハ中風) 四五七

第四 腦動脈栓塞及血塞(腦軟化症) 四五八

第五 腦微毒 四五九

第六 腦膿瘍 五六一

第七 大痺狂(大痺性痴呆進行性大痺) 五六一

○ 腦膜疾患

第一 結核性腦膜炎(石脂衣腦膜炎) 四六〇

第二 化膿性腦膜炎(或骨髄部腦膜炎) 四六九

○ 官能的神經疾患

第一 癲病 五〇一

第二 小舞踏病(シランナム氏舞踏病) 五〇六

第三 震顫(パーキンソン氏病) 五〇八

第四 多発性対側筋肉症 五二二

第五 書癡 五三三

第六 偏頭痛 五三五

第七 ヒステリー 五二八

第八 神經衰弱 五三〇

第九章 傳染病

A 法定十種傳染病

第一 腸チフス 五三三

第二 パラチフス 五三三

第三 赤痢 五三八

附 疫痢(一名けやく) 五三九

第四 虎列刺(名重綱至虎列刺) 五四〇

第五 チフテリ 五四三

第六 流行性腦脊髄膜炎 五四六

第七 猩紅熱 五四八

第八 痘瘡 五五〇

第九 癩疹チフス 五五三(9)

第十 ペスト	五三	○ 体質異常	五三
B 其他ノ傳染病	五三	甲 淋巴腺腺体質	五三
第一 流行性感冒(インフルエンザ)	五三	乙 滲出性体質	五四
第二 嗜眠性腦炎(流行性腦炎)	五三	丙 神經關節炎性体質	五五
第三 百日咳	五三	丁 無力性体質	五五
第四 麻疹	五四	第一 小兒急痲或子痲(又ハ痲腸症)	五六
第五 マラリア	五五	第二 夜驚症或ハ恐怖(又ハ夜怯症)	五六
第六 円毒	五九	第三 急性腦性小兒广痺	五九
第七 破傷風	五三	第四 腦水腫	五九
第八 ワイル氏病(出血性黃疸)	五三	甲 先天性腦水腫	五九
第九 癩病	五五	乙 後天性腦水腫	五九
第十 微毒	五七	第五 小兒急性脊髓前角炎(脊髄炎)	五九
甲 先天性微毒	五七	第六 慢性氣管炎加答兒	五九
乙 後天性微毒	五九	第七 小兒結核	五七
第十 小兒病	五三	第八 小兒消化困難症	五八

第九 乳兒脚気	六〇	第十 卵巢炎	六三
第十 小兒慢性腸加答兒(皇太子病)	六二	第十一 畏咀	六三
第十一 小兒腎臟炎	六四	第十二 雜病	六七
第十二 婦人科病	六五	第一 淋菌性結膜炎	六七
第一 月経困難症(疼痛性月経)	六五	附 初生兒膿漏眼	六八
第二 無月経及月経過少症	六七	第二 眼瞼緣炎	六九
第三 月経過多症	六九	第三 加答兒性結膜炎	六九
第四 外陰部炎	六九	第四 濾胞性結膜炎	七〇
第五 子宮内膜炎	六九	第五 角膜炎(角膜前層炎)	七〇
第六 子宮頸管加答兒	六五	第六 「トラホーム」	七〇
第七 子宮症	六六	第七 夜盲症	七〇
第八 子宮癌腫	六七	第八 中耳炎	七〇
第九 喇叭管炎	六九		

病理學編 目次 終

近世鍼灸學教科書 第四卷

長崎醫科大學講師
醫學博士

菊池清先生校閱

九州鍼灸學校長

宇和川義瑞 著

九州鍼灸學校講師

竹原保雄校補

病理學編

結論

夫レ健康ナル人体ニ就テ、其生活現象ヲ攷究スルモノハ則チ生理學ニシテ、是ニ對シテ疾病ノ本態ヲ明カニシ、其原因ヲ探リ是ガ為ニ起ルベキ身体組織及臟器ノ形態學的変化及官能障礙即症狀ノ性質及其由テ来ル所以ヲ明カニスルモノ

ウイルスの時代
一八二一年
一八五八年
細胞病理説
ヲ立テ一九〇一
年ヌス

マ、所謂病理學ト云ビ、病理學總論ハ其一般ニ通ズル原則ヲ敘フルノ學科ナリ、
而シテ生理學ノ解剖學ト相持テ健康生活ノ真相ヲ明ニスルガ如ク、病理學ハ一
般病理解剖學ト相續テ疾病ノ本質現象ヲ審ニスルモノナリ、故ニ其關係タル恰
モ唇齒補車ノ如ク、未ダ其一ヲ離レテ疾病ノ本質原理ヲ闡明スル事能ワザルナ
リ。
而シテ最近病理學ノ発達ハ偉人ウイルヒヨウ氏ノ研究ニヨリ、細胞病理説ヲ唱
導セシ結果ナリ、即身体ハ細胞ヨリ成リ細胞ハ唯細胞ヨリ生ズト云フ真理ヲ基
礎トシテ、疾病ナルモノハ変化セル細胞及細胞集族ナリトノ實驗的事實ヲ擧ゲ、
以テ病理學ヲ確立スルニ至レリ。

病理學ノ歴史

ヒポクラテス氏
紀元前四五九年
シテ後ハヨリ
等シク學識
シテ凡ソ
四百六十年
至四百五十年
ニス島(今ノ
スタンコ)ニ
生レタリト云
フ

液[◎] 病理[◎] 説 (紀元前四五九年—三七七年)
希臘醫學ノ發時日達醫學ノ開祖醫學ヒポクラテス氏ニヨリ唱ヘラレタルモノニ
シテ、彼ノエムペドクレスノ萬物四元論 (火、水、土、氣)ノ四元
ル事無ク増減スル事ナキモノニシテ、愛ノ力ニヨリテ結合セラレ、無差別ノ紀元
四乾輝然タル球体ト成リ居リシガ茲ニ増シミノ能キヲ種々ニ集散離合シテ遂ニ萬
物ヲ形成シ、以テ萬物ノ流轉ヲニ基キ説ヲナシテ曰ク「人体ハ四種ノ基礎液即
血液、粘液、黃膽液、黑膽液ヨリ成リ、其増加減乏停息ハ諸液ノ下滲、灼熱、
傾敗ヲ示シ回テ以テ疾病ノ原因ヲナス、而シテ最悪ノ疾病ハ冷粘液ト熱膽汁ト
ノ混合ニ因ラテ生スレト、スレハ疾病ハ生活ナル理現象ノ稍傷セラレタルモノ
ニシテ、医ノ目的ハ此美ヲ恢復スルニアリトナシ、尙數多ノ實驗ニ徴シテ、免
性諸病ノ多數ハ、医治ヲ下ス事無ク自然ノ療能ニヨリテ抑制セラル、事ヲ知レ
リ。
固[◎] 體[◎] 病[◎] 理[◎] 説 (紀元前一二八—一五六年)
ヒポクラテス氏ノ液體病理説ト相對シテ、是ト頭角相当リ全ク其所見ヲ異ニシ

アスケレピアデス氏
紀元前百三十四年
ルサニエル
年尚此ニシテ
学識ト不能ト
ヲ以テ有識
巨匠ヲ譽ス
ニ代ヘル人ナリ

タルハ、アスケレピアデス氏ノ固體病理説ナリ、氏ノ學説ハ生活ト疾病トノ關係
着矣ヲ自體ノ固體成分ニ究メタルモノニシテ、「エピクラス」液ノ物質原子組
成論ヨリ根據シタルモノナリ、其説ニ曰ク「人身ハ無數ノ元子ト其個ニアリテ
知覺ヲ備ヘタル管腔トヨリ形成セラレタルモノニシテ、健康トハ元子ノ正規ア
ル狀況ト、氣孔ノ正規ナル廣徑トヲ呈シタルノ場合ニシテ、疾病ノ原因ハ此原
子ノ性質変化ト此管腔ノ廣徑異常トニアリテ、液状及氣状元子ノ失調ト、是ニ
依テ生スル停息トハ其加害ナルモノナリ」ト。

一八世紀ノ半葉西ノ舊都エゲンブルグニ教授タリシウィリアム・クルレン氏ノ
唱道シクル処ニシテ、其説ク知「人身ノ生活ハ唯一ノ實質即神経ノ力ニ基クモ
ノニシテ、疾病ノ發生スルハ其変化ニ因スルモノナリ」ト云フニアリ、是即チ
アスケレピアデス氏ガ創唱シタリシ處ノ元子説ヲ折衷シ、其元子ヲ改メテ神経
ニ歸シ、是ヲ以テ生活ト疾病トノ關係ニ究極シタルモノトス。

血液病理説（一八〇四年一八七二年）
維納大學病理解剖學教授ロキタンスキーク氏ノ唱ヘタルモノニシテ、血液ノ失調

ニヨリ疾病ヲ惹起スルモノトシ、局所的ノ疾病ヲモ又是ニヨリ説明シ、一時全
歐洲ヲ风靡セリ。

細胞病理説（一八一一年一八九〇年）

獨逸病理學ノ泰斗ルドルフ・ウィルヒョウ氏ハ、古來行ハレタル液体病理、固體
病理、神經病理及血液病理ヲ排斥シ、細胞ヲ以テ生活現象ノ最後ノ形態要素ト
ナシ、生活ノ作素ハ總テ是ヲ根本トスル事ヲ唱導シ、モルガニーク氏ガ疾病ノ占
居ヲ器官トナシ、ビシマーク氏ハ是ヲ組織トセルニ反シテ、細胞ノ変化ヲ以テ疾病
ノ表現ナリト論ジタリ。

其説ニ曰ク「人体ハ其結構粉雜限リ無シト雖モ、總テ其大原ヲ討尋スレバ唯細
胞ト細胞間質トヨリ成リ、生活ハ靈妙極リナシト雖モ進ンテ其根本ヲ追及スレ
バ、唯細胞組織ヨリ成ル此一小区相集ツテ各組織ヲ形成シ、相倚テ各臟器ヲ作
為シ、終ニ人体ヲ完成ス、故ニ吾人ノ身體中至ル処細胞アラザルハ無ク、骨質
ト雖モ、血液ト雖モ、終ニ是細胞組織タル事ヲ免レズ、實ニ細胞ハ人体實質成
分ノ究極之ニシテ、各個共ニ独立ノ生機ヲ存シ、三個ノ本能ヲ有ス、曰ク働作
業、曰ク栄養、曰ク繁殖是ナリ、即細胞機能ノ本態ニシテ、此各機能相
(5)

合シテ生活機ヲ全成ス、而シテ細胞ハ細胞ヲ生ズ、細胞外細胞ヲ生スルモノニ
非ス、實ニ細胞機軸ハ人体生活機ノ究竟之ニシテ、彼無ケレバ以テ是ヲ発スル
事能ハス、而シテ疾病ナルモノハ健康生活ノ変態現象ニシテ、敢テ外来ノ異物
ニ非ス、又健康ノ反対ニ非ス、唯其亢進或退化性シタルモノノミ、畢竟スレバ
凡テ病理的機軸ハ異時性、或ハ異處性ニシテ、唯其時期ト局知トニ由テ生理的
機軸ト異ルノミ、然レドモ其細胞ノ形態的性質正規ナルモノニシテ初メテ正規
的健康生活ヲ営ムスル至リ得、彼無クンバ以テ是ヲ発スル事能ワズ、故ニ若シ
其細胞ノ遺精ニシテ少及センカ、其機軸ノ合作現象タル生活機ニ変化無キ能ワ
ス、即病態生活ハ細胞ノ形質変化ヲ意味ス、而シテ其所謂病変ナルモノハ、内
外ノ病因ニ対スル細胞ノ反応機軸ノ結果ニシテ、症候ノ基因ハ一ニ此ニアリ、
彼所謂病理的機軸ナルモノハ實ニ此細胞ノ反応的機軸ニ外ナラズ、此ヲ以テ我
醫學ノ本問題タル生活機ノ研究ハ、其健康タルト病態タルトニ論無く、唯其本
原タル細胞ニツイテ取ルヘキノミ、故ニ疾病ノ研究モ、治療ノ方針モ、凡テ医
ノ目的ハ唯此一点ニ帰着スベキノミト。

病理學總論

第一章 疾病論

非生理的ノ刺激ハ内ヨリ作用シテ内因トナリ、外ヨリ作用シテ外因トナルモノ
ニシテ、疾病トハ一定ノ内的或ハ外界ノ刺激ニ因テ、身体ヲ構成セル各種細胞
ノ生活現象ニ異態ノ襲来シ以テ異常ノ生活現象ヲ現ハスモノヲ云フ、而シテ一
定ノ症状ヲ有スルト共ニ、或器官ニ解剖的変化ヲ伴ヘルモノヲ機質的疾患ト云
ヒ、是ニ反シテ單ニ生理的官能ニ異常ヲ来スモ、機質的ニハ何等変化ヲ認ムル
事能ハザルモノヲ官能的疾患ト稱ス、「ヒステリー」神經衰弱、神経痛又ハ原發
性癲癇ノ如キモノ是ナリ、但シ是等ハ人智ノ発達、醫學ノ進歩ト共ニ將来病理
的ニ記載シ得ラルベキ時アランモ、此差違アル点ニ就テハ大イニ鍼灸医家諸氏
ノ一考研鑽ヲ要スベキ知ナリ。
又疾病發現ノ前後ニ由テ原發性^①及繼發性^②ニ區別ス、前者ハ最初ニ發現セシ疾病
ヲ指シ、是ニ因聯シテ發生スル第二ノ疾病ヲ続發症ト云フ、但シ原發性ニ關係

無クシテ、同時ニ二個以上他ノ疾病ヲ併発スル時ハ、是ヲ併發症ト名ク、又舊病カ一定部ニ局在スルカ、或ハ全身ニ蔓延スルカニヨリテ局處病及全身病ノ別アリ、然レドモ諸疾病多クハ先ヅ一定局知ニ疾病ノ始マリ、此疾患カ時ニ其部ニ限局スルカ、或ハ附近又ハ數次全身ニ伝ガルモノアリ、只ターツ血液性中毒症、傳染病、遺傳病ノ如キハ始ノヨリ全身病ト見做ス事ヲ偶ルモ、仔細ニ觀察スル時ハ、局知性ノ病竈アリテ後迅速ニ全身傳播ヲ起スニ外ナラザルモノナリ。症候トハ異常ナル生活現象ノ謂ヒナリ、夫レ物質ト等カトハ密接ノ關係ヲ有スルモノナルヲ以テ、物質ノ変化スレバ勢カモ又変化セザル能ハズ、吾人ノ身体ハ物質ニシテ、生活ハ其努力の発現ナル以上ハ、身体ヲ構成スル組織臓器ニ解剖的变化ヲ生ズル時ハ、必ズマ之ニ伴フテ其生活現象モ変化スベシ、是即症候ナルモノニシテ、實際診斷上ニ於テハ果シテ官能上生理的ノ範圍ヲ脱シテ、病的ニ入りタルマ否ヤヲ判定スル事頗ル困難ナル事アリ、是疾病ノ症候ハ生理的官能トハ唯數量調子ニ於テ異ルノミナルト、一方男女、年齢、土地、人種、風俗、習慣ノ別アルト、又個人ニ涉ツテ其生理的官能ニ差異ヲ生ズルニ由ルナリ、而シテ疾病ノ症候ニシテ病竈ノ固着セル臓器ニ発スル時ハ是ヲ直達症候ト云ヒ、

例之肺病ノ呼吸困難、腎臟病ノ尿量減少ノ如シ。

是ニ反シ病竈ヨリ遠ク距リタル部位ニ現ル、時ハ、是ヲ介達症候、或ハ遠達症候ト云フ、例之腎臟病ニ於ケル浮腫、肺病ニ於ケル全身解血ノ如シ、其他自覺的症候及他覺的症候ナルモノアリ、即前看ハ患者自身ノ感覺告知スル知ノ異状の生活現象ナリ、例之不快、呼吸窘迫、全身倦怠、眩暈等ニシテ、診斷學上價値甚ダ僅微ナリトス、後看ハ醫師ノ認知判定スル異常ノ生活現象ニシテ、病者自己ハ是ヲ自覺スル事ナキモノヲ云フ、例之脈搏ノ変化、滲出物ノ発生、尿中ニ於ケル蛋白質或ハ糖分ノ発現等是ナリ、又一ノ疾病ニ固有ニシテ是ニヨリ容易ニ其疾病ノ何タルカヲ判定シ得ベキ症候アリ、是ヲ指定症候ト稱ス、例之肺炎ニ於ケル鑷色ノ喀痰、各傳染病ニ於ケル病原ム微体、腎臟炎ニ於ケル蛋白尿、尿管柱、アゲソン氏病ニ於ケル皮膚ノ色素沉着增多等ノ如シ。斯クシテ発現セル症候ヲ總括シテ、其性質ヲ究メ以テ適當ノ治療、或ハ処置ヲ加フルノ手段ヲ確定セシムルノ方法ヲ診斷ト云ヒ、是ヲ症候的診斷ト病理解剖的診斷トニ分ツ。

患者ニ就テ其症狀ヲ他覺的ニ探知スル方法、即診斷法ニハ種々アリ、即問診、(9)

測診、觸診、叩診、聽診ハ概義ニ於テノ理學的検査法ニシテ、是ニ依テ認知セラル、如ノ症候ヲ稱シテ、理學的症候ト云フ、レンヂエ光線ヲ作シテ発見セラル、如ノ異常モ又然リ、其他喉頭鏡、耳鏡、検眼鏡等ヲ以テスル検査法モ理學的検査法ニ属スル事論ヲ俟タズ。

糞尿便及其他ノ排泄物、分泌物は於テ其中ニ含有スル、異常成分ヲ化學的ニ証明スル方法ハ、即化學的検査法ナリトス。

傳染病患者ヨリ其病原タル細菌及其毒素ヲ取り、是ヲ検査シテ疾病ノ性質ヲ明カニシ、或ハ其血清ノ凝集及溶菌反應ヲ檢シテ、疾病ヲ診シ、或ハ結核患者ニ「ツベルクリン」ヲ注射シテ、発熱反應ヲ檢シ、或ハ皮下ニ「ツベルクリン」ヲ接種シテ、充血炎症反應（所謂「ブルケ氏反應」）ヲ檢スルガ如キモノハ、所謂細菌學的検査法ナリ、而シテ茲ニ診斷確定ニシテ、是ニ依リテ種々疾病及動ノ機ヲ察シ以テ爾後ノ経過及轉帰ヲ定ムルヲ「予後」ト稱シ、是ニ良予後、不良予後、及疑予後ノ三期ニ分テ、予後ノ如何ニヨリテ疾病ノ性質ヲ良、悪性又輕症重症ニ分テリ。

総テ疾病ニハ発病ヨリ終局ヲ告グルニ至ル迄ニ一定ノ時日ヲ尋スベシ、此ノ時

日的経過ヲ疾病ノ経過ト稱セリ、而シテ此経過ハ疾病ニ依リ長短緩急種々ニシテ、即電劇性、急性、亜急性、慢性等ニ區別シ、発病ト同時ニ死スルモノヲ電劇性、経過一週以内ノモノヲ急性、経過一ヶ月以内ノモノヲ亜急性、一ヶ月乃至數年ニ亘ルモノヲ慢性ト名ク、而シテ経過中ニハ疾病ニ度ジテ各異ナル時期ヲ発現スルヲ見ル、傳染病ノ如キ細菌ガ体内ニ侵入シテ発病ニ至ル迄一定ノ時日ヲ尋ス、是ヲ潜伏期ト稱ス、而シテ此時期ノ長短ハ其病原體ノ種類ニヨリテ著シキ差違アリ、例之化膿性疾患ノ如キハ數時間ニ過ギザルモ、狂犬病ノ如キ殆ド數週乃至數月間ノ長キニ亘ルガ如シ、愈々発病ニ當ツテハ初期ノ症状甚ク不確実ナリ、是ヲ前驅症ト云ヒ、其時期ヲ前驅期ト云フ、既ニ成疾患ノ轉帰ヲ現ハシ徐々ニ、若クハ急劇ニ進行シ、極期ニ達スル迄ノ間ハ、是ヲ浸襲期ト稱ス、極期ハ症候及病変ノ程度最モ激烈ナル間ヲ指スモノニシテ、疾病ノ種類ニヨリ著シキ長短アリ、又疾病ニヨリテハ持続性ナルモノアリ、或ハ一定ノ間隔ヲ置イテ以テ反覆發來スル場合アリ、而シテ一定ノ経過ヲ経、病勢漸次衰へ来ル時期ヲ消退期ト稱シ、固有ノ病変若クハ、症候ノ進行全ク止ミ、漸次恢復ニ向フ時期ヲ恢復期ト云フ、但シ恢復期ニ於テ病勢尚ヒ増悪シ、定量的ノ病変、或ハ

已生命ニ危険ヲ承ス事ナシ。

是ニ反シテ吾人ノ生命ニ缺クベカラザル臓器、所謂生活臓器ナルモノハ、心臓、呼吸器及神経中樞（就中延髓）ニシテ、是等臓器ノ官能停止スル時ハ、直ニ死亡ニ陥ラザルヲ得ズ、故ニ生活臓器ヨリ発スル症状ハ生命ノ危険ナル事ヲ示スモノニシテ、臨牀上特別ノ注意觀察ヲ怠ルベカラズ、生活ニ直接ノ危険ヲ及ボス如キ腎臓、胃及肝臓等ノ疾患ヨリ、死ヲ致ス事アルハ畢竟生活臓器ノ官能ニ影響ヲ及ボシ、是ヲ障礙スル結果ナリトス。

第二章 病的現象

夫レ吾人ハ平素其維持スル平衡ニ對シテ、克ク是ニ適應調節スルノ妙機ヲ有ス、多量ノ水ヲ攝取シテ血液液分ノ増加スレバ、腎臓及汗腺ヨリ過剰ノ水分ヲ体外ニ排出シ、身体ヲ労働スル時ハ、是ニ応ジテ心臓ノ運動亢進シテ血行ヲ促進シ、又呼吸運動盛ントナリテ、吸酸降炭ニ勉メ、外氣ノ温度高クナル時ハ、皮膚血管拡張シ、発汗増加シテ体温ノ放散ヲ多クシ、是ニ反シテ氣温低下スレバ、皮膚ノ血管收縮シテ、体温ノ放散ヲ少クシ、以テ外界ノ温度ニ調節スルガ如キ。

死ニ人ノ熟知スル処ナリ。

此ノ如キ自然ノ妙機アルヲ以テ、吾人ハ外界ノ変動多キニ拘ラス、健康生活ヲ維持スルヲ得ベシ、然レドモ若シ外界ノ刺激ニシテ、甚ダシク強キニ矢シ、若クハ異常ナル場合ニアリテハ、是ニ對シテ適應調節スル事能ハザルガ爲メ、健康ノ破ラレ、ニ至ル、即或一個ノ原因ガ、人体ヲ構成スル組織細胞ニ動作シ、其結果細胞ニ一ツノ変化ヲ発起ス。

然ル時ハ人体ヲ活動セシムル細胞ハ、此官能ニ抵抗シテ修理的ニ反應現象ヲ現スモ、兎ニ角ニ変化ヲ受ケタルヲ以テ、生理的官能ニ変調ヲ来ス、此細胞的形態及官能上変調ヲ、病的現象或ハ疾病ト稱スルモノナリ。

第三章 病因論

病因トハ生体ノ一部、若クハ全体ニ對シテ病的変化、即疾病ヲ惹起スベキ作用ヲ云フモノニシテ、是ヲ考究スルノ學科ヲ病因學ト云フ。

而シテ茲ニ病因論ト云フハ、病因總論ノ義ニシテ、疾病ノ原因ヲ總括的ニ論ズル、病理學中ノ一部門ナリ。

抑、疾病ノ發生スル如ハ身体ニシテ、個人身体ヲ離レテ疾病ハナキナリ、故ニ
病因ハ身体自個ニ關係スル如甚ダ多シ、從ツラ病因學ニ於テハ身体自己ノ存ス
ル如ク、原因の條件ヲ闡明スルノ要大イニアリ。

是ハ病因ノ内的方面ナリ、又個体ハ絶エズ外界ニ接觸シテ、其生活ヲ営ムガ故
ニ、此環境ニ由來スル原因の條件ヲ識得セザルベカラズ。

是ハ病因ノ外的方面ナリ、即吾人ノ病因研究ハ決シテ、外的方面ニノミ偏スベ
カラス、内的方面ノ研究ハ又實ニ大切ナリ、内外相俟テテ始メテ病因作用ノ實
現スル事ヲ忘ルベカラズ、此内的方面ノ病因ハ、身体内ノ重要ナル生活機能ト
密接ノ結託ヲ爲スモノナレバ、病因論ノ研究ニハ身体内ノ生活機能ニ就キ、深
厚ノ知識アルヲ必要トス。

此内外ノ両方面ヲ病因學ニテハ、内因(即素因)外因(即誘因)ト云フ。

病因ト病変トノ關係ハ甚ダ複雑ニシテ、同一又ハ類似ノ病変ガ原因ヲ異ニシ、
又一原因ニシテ全ク異レル病変ヲ起ス事無キニ非ズ。
疾病ノ發生ニ對シ、重要ニシテ缺クベカラザル特殊ノ原因事件ハ、是ヲ主因(即
結核症ニ於ケル結核菌侵襲ノ如キモノ)ト稱シ、主因ノ作用ヲ容易ナラシメ、

或ハ是ヲ補助シ誘導スルモノヲ副因ト云フ、但シ主副ノ何レマヲ確言シ難キモ
ノ、若クハ逆ヒテ是ヲ區別シ能ハザル場合モ無キニアラズ、又吾人が説ベテノ
原因事件ヲ認識シ能ハザル事モ又因ヨリアリ、要スルニ病因論ハ其内容頗ル複
雜ニシテ、病因ノ判断ニハ常ニ細心ノ注意ヲ要ス。

第一 外因或ハ誘因

夫レ疾病ハ變化セル生活ナリ、而シテ生活ハ官能ニ於テ發現ス。

官能トハ生活セル組織器官ノ判斷ニ對スル反応ノ謂ヒナリ、判斷無クシテ官能
ノ發現スル事アラザルハ多数ノ事實ヲ證ス、筋内ハ機械的、化學的、電氣的
及神經的判斷ヲ待テ、始メテ收縮シ、胃粘膜ハ食物直接ノ判斷、又ハ神經中樞
ノ判斷ニ由テ胃液ノ分泌スル事ハ、人ノ熟知スル如ナリ、是ヲ要スルニ生活ス
ルニハ、内部ノ生理的動作ト共ニ、外部ヨリハ常ニ一定正調ノ判斷力、一般入
体ニ作用シ、人体組織ハ是ニ反應シテ活動セルモノナリ、若シ此外來判斷ニシ
テ過大トナルカ、又ハ微弱ナル時ハ大ニニ体内ノ生活現象ニ阻礙ヲ承スベシ、
然ルカ故ニ吾人ノ周圍ニ存在スル、外界ノ事物ハ皆外因トシテ作用スル事アル

エノニシテ、從テ空氣、日光、飲食物等ハ吾人ノ日常生活上缺クベカラザルモノナリト雖モ、其性質若クハ分量ニ變化アル時ハ病因トシテ作用スベシ。其他理學的ニハ毒病的(外傷ノ如キ)、温熱的(中暑病、日射病、火傷、感冒、凍傷ノ如キ)、光線(紫外線、X光線、ラヂウム線ノ如キ)、氣圧(潜水病ノ如キ)等ノ關係ヨリ、又化學的ニハ諸種ノ藥品、並ニ体内形成毒ニ至ル迄、皆病因トラサルハ無シ。殊ニ動植物性微生物、並ニ諸種寄生蟲ノ如キ其最も主タルモノニシテ、斯ノ如ク凡テ外界ノ事物ニシテ、疾病ノ原因ヲ為スガ故ニ、又是ヲ誘因トモ稱ス。

然リト雖モ、通常ノ判然ト病理的判然トノ間ニハ、必ズシモ判然タル限界アルモノニ非ズ。肉類、澱粉等ハ大人ニ取リテハ消化シ易キ通常ノ食物ナレドモ、哺乳兒ニ是ヲ與フレバ重症ナル消化障礙ヲ惹起スベク、又寒氣ニ馴レザル嬰兒ハ比較的輕良ノ寒冷ニ逢フモ呼吸器病ニ罹レルモ、平素氣温ノ変動ニ馴レタル大人ニハ、何等ノ障礙ヲモ発スル事無シ、サレバ発病的判然ナル一種判然ト判然ハ、元來實在スルモノニアラズ、然リト雖モ、外來ノ判然ニシテ一定ノ限界ヲ超ユル時ハ、是ニ適應調節スル事不能ナルガ爲ニ、始メテ疾病ヲ生ズルニ

至ル、但シ其疾病ヲ発スル限界ニ至リテハ、決シテ一定不變ナルモノニ非ズシテ、個人身体ノ判然ニ對スル、調節機能ノ如何ニ依テ種々ナリ。然シテ判然ノ程度大ナル場合ニアリテモ、尚臟器ノ官能的反應ヲ惹起スベキ限界ヲ超エザル時ハ、單ニ官能ノ亢進ヲ示スノミニシテ、其判然ノ持續スル時間ノ長短ニ從テ、或ハ一時性、或ハ持久性ノ官能亢進ヲ示ス。而シテ一時性ノ官能亢進ハ未ダ是ヲ病理的機轉ノ範圍内ニ算入スベキモノニ非ズシテ、生理的現象ニ屬セシムベキモノナリ。例之労働後ニ於ケル血行及呼吸ノ増加、体温ノ昇騰ノ如キ、多量ノ飲水内用後ニ於ケル利尿亢進ノ如キ是ナリ、是ニ反シテ持久性ノ官能亢進ハ病理的現象ニシテ、彼ノ「バセドウ」代病ニ於ケル、七情亢進、四肢ノ震顫、座率性脊髓広痺ニ於ケル、反射運動ノ亢進等ノ如キ是ニ屬ス。

第二 内因或ハ素因

内因トハ蓋メ身体自己ニ存スル処ノ、性質(形態及機能)ニシテ、疾病ノ發生ニ與ツテカアル要件ヲ總括スル名稱ナリ、吾人々身ノ疾病ニ罹ルト謂ヘルハ、其多クハ外因タル外來判然ノ働キニ因ルモノナリト雖モ、是ニ應ズルト否トハ、

内因契ツテカアルモノニシテ、是ニ対スル身体ニ於ケル諸種有機体組織ノ反應ハ、複雑ヲ極ムルヲ以テ外因ニシテ、其作用強シト雖モ、内因無クンハ疾病ヲ発セス、外因微弱ナルモ、内因多キ時ハ又容易ニ疾病ニ犯サルベシ、故ニ又是ヲ素因ト稱ス。

今甲乙二人アリテ、同一原因ノ結果トシテ、甲ハ病的現象ヲ発現シ、乙ハ毫モ変化無キ場合、甲ハ該病ニ対シ素因ヲ有スト云ヒ、乙ハ素因ヲ有セス、又免疫性ヲ有ストモ云フ。

斯クノ如ク病因ニ対シテハ、各人多少ノ差異アルモ、全然抵抗シ得ルモノニ非ズシテ、其強烈ナルニ当リテハ、遂ニ耐ユル能ハザルモ、或種ノ傳染病原体侵襲ニ対シテハ、人ニヨリテハ全ク是ヲ免ル、者アリ。

又動物ニ対シテハ劇烈ナル病毒ト雖モ、毫モ人体ニ害ヲ與ハザルモノアリ、此ノ如キハ是ヲ先天免疫ト稱ス、又生後一定ノ事由ニ因テ初メテ此性ヲ得ル事アリ、名ケテ後天免疫ト云フ、其最も著シキヲ、一傳染病經過後、再び該病ニ侵サレザルノ性質ヲ得ルノ状トナス、而シテ傳染病ノ治療後成立セル、免疫性ノ持続ハ症ニ依テ同ジカラズ、或ハ殆ド終身存立スルモノアリ、天然痘、麻疹、猩紅

熱ノ如シ、是等ノ諸症ニアリテハ、一生中一回ノ罹病ヲ却ユル事無キヲ常トス、或ハ短キアリ、虎列刺、実扶的里、肺炎ノ如シ、其經過數ヶ月ハ此性質存スト雖モ、又直ニ消失スルニ至ル、然リ而シテ是等諸病ノ場合ニ於テ、其何故ニ免疫性ノ発現スルカハ、實ニ古今ノ難問題ナリトス。

是ニ反シ普通人ニハ殆ド毒性ヲ呈セザル化學的物質ニ対シテ、特ニ過敏ニシテ中毒ヲ惹起スルモノアリ、是ヲ特異質ト稱ス、例之果物、蔬菜、鰵、蟹、雞蛋、染料等ニヨリ皮膚ノ紅斑、又ハ蕁麻疹ヲ生ジ、嘔吐、腹痛等ヲ起ス者アルガ如キ是ナリ。

其他先天性ニ病的素因ヲ有シ、一定ノ外因若クハ、何等認ムベキ原因無クシテ、身体ニ病的変化ヲ現スモノアリ、巨大及過小發育ノ如キ体質病ヲ始メトシ、癆瘵質、卒中質ノ如キ体質ヲ有シ、又小兒ノ滲出質ノ如キ極メテ僅微ノ刺激ニ対シテ、皮膚湿疹等ノ如キ滲出性皮膚ヲ呈スルモノアリ、又胸腺、淋巴体質ノ如キハ年齢ニ比シテ、循環器及生殖器官ノ發育不完全ニシテ、且多クハ全身淋巴装置増生及胸腺ノ永存ヲ伴ヒ、疾病ニ対スル抵抗力メテ弱キヲ常トス、其他肥肝病、痛風、血反病、色盲ノ如キハ一種ノ体質病ナリ。

畸形^①モ又是^②ニ屬シ、一定ノ畸形ハ遺傳ニヨル事多キモ、又母体ノ疾患外傷並ニ子宮、卵膜、胎帯ノ異常ニ由リテ起ルモノアリ、其種類甚ダ多ク是ヲ單体畸形^③及複体畸形^④ニ大別ス、甲ハ一体児ノ一部、或ハ大部ノ发育異常ヲ云ヒ、乙ハ雙胎形成ニ際シ、兩者ガ一定ノ部分ヲ種々ノ状態ニ於テ、養育シタルモノヲ云フ。

第四章 病変論

生活細胞ハ栄養、形及ビ官能ノ三作用ヲ官爲スルモノナルモ、此細胞ニ一定ノ害因ニヨリテ障碍ヲ来ス時、其構造上ノ変性容積ニ於テ偏少消耗ヲ来シ、機能ニ於テ減退ヲ来ス場合アリ、此種ノ变化ヲ名ヅケテ退行性病變ト云フ、又是ニ反シ发育形成ノ過剩及機能亢進ヲ来ス場合アリ、然ル時ハ是ヲ進行性病變ト云フ。

斯ノ如キ兩様ノ变化アルモ、一定度迄ハ生理的ノ異動ニシテ、其一定ノ境界ヲ越ニル時、始メテ病的ト看做ス事ヲ得ベシ、故ニ此病理的及生理的トノ境界ハ、一線ヲ以テ區劃シ得ベキモノニ非ズシテ、一定ノ範圍ヲ有スルモノナリ、此一定ノ範圍アル境界ヲ名ヅケテ生理的境界ト稱ス。

第一 退引性病變

新陳代謝障礙ノ爲メ、細胞機能減退シ、正常以下ノ生活機轉ヲ示スカ、或ハ其発症ヲ起シ、組織細胞ノ生活力衰弱、又ハ停止シ、其結果組織細胞ニ種々ノ形態的变化ヲ和来ス、是ヲ退行性病變ト名フ。

而シテ是ヲ左ノ三種ニ大別ス。

(一)萎縮 或程度ニ发育シタル組織細胞ガ、各自ノ容積、若クハ數量ノ減退ヲ来シ、是ガ爲ニ官能ノ減退ヲ来ス如ク变化ラ云フ、而シテ單ニ容積ノ減少セルヲ單純萎縮ト云ヒ、組織ノ変性ヲ兼ヌルモノヲ变性萎縮ト云フ、實質細胞ハ萎縮スルモ、孩ノ増大ヲ来スモノヲ増進性萎縮ト稱シ、實質萎縮シテ、同質組織ノ増進ヲ来ス時ハ、是ヲ減性肥大ト云フ。

萎縮ハ栄養ノ減退ニ依ツテ起ルモノニシテ、是ガ全身ニ来ルモノヲ全身萎縮ト云ヒ、局部ニ起ルモノハ、是ヲ局部萎縮ト稱シ、次ノ五種ニ區別セラル、曰ク生理的萎縮、曰ク圧迫性萎縮、曰ク應用性萎縮、曰ク貧血性萎縮、曰ク神経性萎縮是ナリ。

(二) 变性 廣義ニ於ケル变性トハ、細胞ノ同化作用ノ減退ニ由テ起ル、退行性病
変ヲ指スモノニシテ、細胞ノ作用障礙セラレテ、生理的ニ細胞体内ニ来リ茲ニ
同化スベキ物質ガ、細胞体内ニ於テ処理セララル、事不充分ナルガ為ニ、蓄積ヲ
来セルモノ及尋常ノ新陳代謝物質トハ異リタル成分ガ細胞ノ体内、若クハ細胞
間質ニ来テ、沈着スルヲ云フ、故ニ從来慣用セル細胞構成成分ノ变化ニ依ル、
異常物質ノ發現ト見做サレタル、狹義ノ变性ナル語ヲ廢シ、寧ろ浸潤^①、又ハ沈
着^②ナル名稱ヲ以テ、從テ是ニ代ユルヲ当ナリト論スル者アリ、而シテ此变性ニ
左ノ類種アリ。

(1) 瀉濁腫脹或ハ顆粒变性 是ハ腎臟上皮、肝細胞、心筋ノ如キ實質細胞ニ發現
スルモノニシテ、該細胞内ニ多数ノ蛋白性顆粒ヲ生ジテ瀉濁シ、臟器ノ腫大
ヲ起シ、傳染病又ハ中毒ニ由ル病変ニ現ル、剖面ハ白色瀉濁ヲ呈ス。

(2) 水腫变性或ハ空胞变性 細胞原形質ガ漿液ヲ攝取シ、膨大スルヲ云フモノニ
シテ、初期ニハ原形質内ニ、大小不同ノ空胞ヲ形成シ、漸次進行スルニ從ツ
テ胞体核モ、又膨大シ来リ、其結果遂ニハ全ク其形ヲ失フニ至ル、此種ノ变
化ハ腦實質ノ水腫ニ見、又粘膜腺腫瘍等ノ、上皮細胞其他結締織細胞筋纖維

等ニ起リ、多ク醫血、交症ノ場合ニ見ル。

(3) 粘液様变性 細胞体或ハ結締組織ノ、粘液ニ变化スルモノヲ云フモノニシテ、
又生理的ニモ粘液上皮及關係ノ結締組織ニ行ハル、モノナリ。

(4) 膠様变性 粘液様变性ト同一ニシテ、唯其質膠様タルノ差アルノミナリ。

(5) 澱粉様变性 組織細胞内ニ澱粉様物質ガ沈着スルモノヲ云フモノニシテ、主
ニ慢性ノ消耗性疾患、例之結核、梅毒、慢性化膿性疾患又ハ稀ニ腫瘍性、美
液質ニ伴ツテ来ル、内眼的ニハ組織ハ腫脹シ硬固トナル。

(6) 硝子様变性 纖維結締組織ニ、同質構造ノ透明硝子様物質ノ沈着スルヲ云フ。

(7) 角質变性 表皮ノ單純ナル器械的刺戟ニヨリテ起ルモノニシテ、例之労働者
ノ手掌、坐業者ノ足背ニ於ケル肝胎ノ如キ、又鵝眼其他鱗屑癬、魚鱗癬ノ皮
膚ニ特ニ強ク現ル。

(8) 脂肪变性 或原因ニヨリテ障礙ヲ受ケタル細胞ガ、攝取セル脂肪ヲ同化スル
事能ハス、從ツテ茲ニ沈着シテ生ズルモノニシテ、臟器組織ノ黄色瀉濁、細
胞体内ノ微細脂肪粒ノ沈着等ノ状態ヲ来スヲ云フ、コハ血行並ニ栄養障礙ヲ
来スベキ、各種ノ疾患ヲ伴フテ来リ、又生理的ニモ来ルモノニシテ、主トシ

テ脂肪ノ輸入過剰、若クハ脂肪酸化作用ノ減退ニ基因スルモノナリ。

(9) 「グリコーゲン」変性 諸種ノ中毒及循環障礙ニ由テ、細胞ノ新陳代謝ニ異常ヲ来シテ、原形質内ニ硝子兼小体ヲ沈着スルヲ云フ。

(10) 石灰変性 組織ノ溶解性塩類ガ不溶解性トナリテ沈着スルヲ云フ。是ハ大半生理的ニ来ル事アルモ、病的ニハ死滅セル組織、又ハ死滅ニ近ヅキツ、組織ニ来ルモノナリ。例之結核組織ノ石灰変性ノ如シ、膽石腎石ノ結石モ又是ニ屬ス。

(11) 色素形成及沈着 色素形成ハ生理的ニ存在スル色素ノ増量スルモノト、血色素ノ変化ニ因ルモノト、膽汁色素ガ膽道以外ノ組織ニ沈着スルモノトアリ、生理的ニ存在スル色素ハ「メラニン」ト名ケ、日光ニ逢ヘル時、又妊娠セル時等ニ生ジ、血管外ニ出テタル血液ハ「ヘモグロビン」ノ溶解ノ為ニ周圍組織ニ著色シ、膽汁色素ハ血中ニ入り組織ニ沈着シテ、所謂黄疸ヲ発ス、又色素ノ外部ヨリ来レルモノアリ、例之文身、又ハ銀病ノ如キ是ナリ、前者ハ体内ニ於テ形成スルモノナルガ故ニ、体内形成色素ト稱シ、後者ハ輸入性、若クハ体外形成色素ト謂フ。

是ニ反シ色素ガ先天性ニ缺乏スルモノヲ先天性白斑症ト云ヒ、全身若クハ身体ノ大半ニ亘レルヲ白癩ト云フ、後天性ニ脱出スル時ハ、白皮病ト稱シ、腸窒疾斯、猩紅熱等ニ潰瘍シ、又特別ノ原因無クシテ起ル事アリ。

(三) 壊死 トハ全身ノ死ニ対シ、細胞或ハ組織ガ局部的ニ死スルヲ言ヒ現ス言葉ナリ、即組織或ハ細胞体ノ永久的ニ生活現象ヲ嘗マザルヲ謂フ、然レドモ壊死ニニ様アリテ、若シ細胞或ハ組織ニ毒物、又ハ壊死ノ原因トモスベキ、或作用ヲ以テスル時ハ、細胞ハ急劇ナル変化ヲ見ズシテ徐々に形態ヲ変ジツ、即壊死ノ経路ニアリツ、生活スル時ハ、之ヲ爛壊死ト名ク。

壊死ノ原因タルマニ率ニ断スベカラザルモ、血行障礙、温熱的作用、光線並ニ藥品ノ腐蝕等主ナルモノトス。

而シテ今壊死ノ種類ヲ分別スルニ、
(1) 凝固壊死 「ワイゲルト」氏提唱セル名稱ナリ、壊死ノ中ニテ最も廣ク見ラル、種類ニシテ、梗塞結核及誤嚥腫(乾酪変化)、腸チフス(痂皮)、赤痢(膿批状被覆)、悪性腫瘍等其他頗ル多シ、「ワイゲルト」氏ハ死滅セル細胞ノ凝固説ヲ唱ヘタリ、凝固セル細胞ハ鞏固ナル程度ヲ呈シ、或ハ細胞集簇ガ凝固

醱酵素ヲ生ジ、組織液ニ持シ纖維素ヲ形成スルモノナリト、而シテ該凝固壞死ニ屬スルモノハ、乾酪様変化、蠟様変化ヲ算入ス、蠟様変化トハ「ナフス」態者ニアル筋肉ノ変性ニシテ、乾酪變化トハ壞死組織ノ黄色、或ハ灰白色ニシテ、硬軟等ノ乾酪様ニ変化スルヲ云フ。

(2) 融解性壞死 壞死部ハ一種ノ蛋白分解酵素ニヨリ、自家融解ニ陥リ軟化シ液状トナル、腦髓ニ多ク見ラル乾酪化電ノ液化膿瘍形成等モ是ニ屬ス。

(3) 脱疽又ハ壞疽 トハ壞死ニ陥リタル部分ガ血色素ニ基因スル着色ノ為ニ焦ケ色ニ変色スル場合ヲ云フ、是ヲ乾性濕性ニ區別ス。

(A) 乾性脱疽 壞死部ハ水分ヲ失ヒ乾燥シ縮小硬固黒褐色トナル、專ラ体表面ニ生ズ指趾ニ多ク、動脈硬化症ニ於ケル老人性脱疽、凍傷、麥角中毒、糖尿病生理的ニハ胎前胎後等ノ際ニ見ラル。

(B) 湿性脱疽 乾性脱疽ノ時ノ如ク、組織ガ硬固スル事無く、反ツテ湿リ居リ、且常ニ腐敗ヲ伴フモノトス、腐敗ハ種々ナル腐敗菌ノ作用ニヨルモノニシテ、患部ハ柔軟浮腫性トナリ、次テ崩壊サル、其除潰瘍及空洞ヲ作ル事多ク、其辺縁乃至壁ハ組織断片ヲ以テ覆ル、モノナリ、局部ニ於ケル血色素ハ腐敗ニ

由リテ溶解シ、綠色或ハ赤色ヲ帯ビ、共ニ泥褐色ナリ、而シテ臭臭ヲ放ツ、肺壞疽、腸壞疽、腎臟壞疽等アリ、又産褥子宮等モ此一例トス。

第二 進行性病変

組織細胞ノ新陳代謝多クハ亢進シ、其結果種々ナル形態的変化ヲ招来スルモノヲ總稱ス、是等ハ一般ニ傷害作用ニ対スル防禦修理ノ意味ニ行ハル、モノ、多ク生物体ノ自取調節乃至反應ノ発現ニ外ナラズ。

是ヲ進行性病変ト云フ、而シテ此内ニ次ノ如キ種類アリ。

(一) 肥大及増生 肥大トハ細胞組織器官ガ、其性質ニ変化無く、異常ノ發育ヲ遂ゲ、容積増加スルヲ云フ、其際特ニ細胞ノ数増加シテ起ルヲ増生ト云フ、肥大ヲ又左ノ如ク分類ス。

- (1) 機能性肥大 機能亢進ノ為ニ起ル。
- (A) 生理的肥大 妊娠時乳房、妊娠子宮、運動家ノ筋肉。
- (B) 病的肥大 (1) 労働性肥大、肺癆病心臓、狹窄前部肥大。(2) 代償性肥大、腎臟萎丸造血器等。(3) 内分泌機能障礙性肥大、肢端肥大症、松葉腺機能脱出

、時生殖器早熟等。

- (2) 補空性肥大 萎縮部ノ脂肪組織肥大(胸腺萎縮腎等)、筋萎縮(假性肥大)等。
- (3) 再生ラ洋フ肥大 贅骨 蟹足腫 切斷端神經纖維腫等。
- (4) 理化學的作用ニ依ル肥大 肝臓、肝吸蟲寄生ノ膽管上皮病、肺膿瘍埃吸入症等、慢性炎症ト密接ナル關係アリ。
- (5) 許免性肥大

(A) 先天性肥大 魚鱗癬 皮角 贅毛症等。

(B) 後天性肥大 乳腺 甲状腺等ノ肥大。

(二) 再生 組織臓器、又ハ身体ノ一部ガ生理的、又ハ病的破壊ニヨリ破壊セサレ、物質缺损ヲ承シタル場合、該組織又ハ臓器ガ新生シテ其缺陷ヲ補充スルヲ再生ト云フ、体内ニハ生理的ニモ皮膚上皮、毛爪又ハ血液、生殖腺細胞等ハ常に消費シラレ、消失シソレヲ補綴スル為ニ、常ニ生理的再生ノ現象起リツツアリ、斯クノ如ク生理的再生ハ旧組織ト全然同一ノ組織再生スル故ニ、其再生ハ完全ナリ、是ニ反シ多クノ病的缺损ニテハ、其範圍廣汎ニ過グルカ、又ハ破壊サレタル組織ガ再生力乏シキ場合(腺實質前肉等)ニハ再生ハ不完

全ニテ、缺損部、結締組織ヲ以テ補綴サル(不全再生)。

又再生セル組織ガ旧組織ト構造上多大ノ相違ヲ示ス場合ニハ、非定型的再生ト稱シ、又組織ノ再生ニ當リ必要以上ニ過剩ニ生スル時ハ、是ヲ贅生的再生ト云フ。

第五章 局所循環障害

身体組織ニ於ケル血量ハ、動脈血ノ輸入ト排流セラレ、静脈血ノ分量ノ調和ニ由テ常ニ一定度ニ調節セラル、モノナリ、若シ今或原因ニ由テ血液ノ出入其度ヲ失フニ至レバ、局部ノ血量ニ増加、若クハ減少ヲ承ス、甲ノ場合ヲ充血ト稱シ、乙ノ場合ヲ貧血ト名ケラル。

一局部ニ於ケル血液量ハ固ヨリ、血管腔ノ大小ニ比例スルモノナリ、故ニ充血時ニハ血管腔ニ擴張ノ状ヲ取リ、貧血時ニハ収縮ノ状態ニアリ、血液循環系ハ皆交ク連絡アルヲ以テ、心臟ノ異常機能、血管壁緊張ノ度全身血液ノ多少、血液性状ノ異常ニ因ル、全身血行障碍ハ同時ニ各部ニ影響ヲ及ボシ、局所ノ障碍ハ又延テ全身血管系統ニ影響スベシ。

(A) 充血 トハ血液ノ灌注過度ナルカ、若クハ血流排流ノ減少ニ由テ起ルモノアリ、前者ヲ**実性**、又ハ**動脈性充血**ヲ謂ヒ、後者ヲ**虚性**、又ハ**靜脈性充血**、或ハ**鬱血**ト言フ。

(一) 実性充血又動脈性充血 トハ動脈血灌流ノ過度ニ由ル充血ニシテ、種々ノ利戟血管運動神経ノ障礙、並ニ局處的抵抗減少機械的及化學的利戟、並ニ代償的ノ場合ニ起リ、局部ハ潮紅シ軽度ノ温度上昇、腫脹機能異常等ヲ示ス外、**靜脈**モ鮮紅色ヲ呈ス。

炎症ニヨルモノ以外ハ、多クハ一時性ノモノニシテ著明ノ障礙ヲ残サズ、機能障礙ハ胃サレタル部位ニヨリ差アリ、**腺**ニテハ分泌亢進ヲナシ、**腦**ニテハ眩暈ノ外時トシテ気絶ヲナス事アリ、又シク持續スル時ハ組織ノ損傷ヲ起シ、時トシテ浮腫出血、組織増殖等ヲ示ク。

(二) 虚性充血又靜脈性充血或ハ**鬱血** トハ局處的血液排流ガ障礙セララル、ニヨリ起ルモノニシテ、**靜脈管**ノ閉塞、**心臟瓣膜**障礙、**心臟衰弱**、**血流補助**機關ノ障礙等ノ場合ニ起リ、**局部暗青色**即チ**チアノーゼ**ヲ呈シ、**血流緩徐**トナリテ温ヲ失フ、故ニ其部ノ温度ハ稍々低下シ、**腫脹**、**靜脈搏動**、**機能障礙**

等アリ、毛細管ハ縱テ充塞スルガ故ニ、容積ヲ増シ硬度ハ固々ナリ、又血液ノ液体成分ハ血管外ニ浸透シテ、所謂**水腫**ヲ起ス、尚**靜血強度**ニシテ持續スル時ハ、組織ハ栄養障礙ノ為ニ**萎縮硬化**等ヲ示シ、甚ダシキ時ハ**壞死**ヲ示ス事アリ。

(B) 貧血 トハ局處循環血液ノ減少、若クハ血液供給ノ**癱絶**(無血)ヲ云フモ、又疾病並ニ**損傷**等ニ由テ全身ニ発スル事アリ、例之**白血病**、**恶性貧血**等是ナリ、而シテ其原因ハ動脈、若クハ毛細管ノ**圧迫**、**閉塞**、或ハ**狭窄**、**寒冷**、**精神感動**等、其他代償的ニ来リ、局處ハ血色ヲ失ヒテ**淡色**ヲ呈シ、容積ヲ減ジテ**軟弱**トナリテ弛緩シ温度稍々下降ス、**貧血**又シキニ至レバ**酸素**ト**栄養**トノ供給不足ノ為ニ、諸種ノ**退行性病**変ヲ示キ甚ダシキ時ハ**壞死**ニ陥ルナリ。

(C) 出血 トハ血行系以外ニ血液ノ漏出スル現象ヲ云フ、而シテ是ニ二種アリ、曰ク**滲漏性出血**、曰ク**破裂性出血**是ナリ、**甲**ハ循環障礙ノ為メニ血液成分ノ滲漏スルヲ云ヒ、**乙**ハ外傷ノ為ニ血管破裂スルカ、或ハ**血圧亢進**、又ハ**血管壁**ノ異常ノ為ニ血管ノ破裂スルヲ云フ、又先天性ニ出血シ易キ性質ヲ有スルモノアリ、**血友病**ノ如キ即是ナリ、**後天性**ニハ**ウエルホー**フ氏**血斑病**、**メルレルバル**

ロ) 疾病傳染病中毒、或ハ貧血性疾患ニ於テ未ル、而シテ血液ガ体外ニ放出セラル、モノヲ外出血ト云ヒ、体内、又ハ組織ニ出テタルモノヲ内出血ト稱シ、是ニ吐血、咯血、衄血等ヲ區別ス、又出血ノ結果ハ貧血ヲ起シ、甚ダシキハ死ニ至ル、局外出血デハ、範圍廣汎ナル時ハ組織ノ壊死ヲ起スベシ。

(D) 血塞 生体ニ於テ血液ガ纖維素ヲ析出シテ凝固スル事アリ、此凝固ヲ血塞ト云ヒ、其凝固シタル物質ヲ名ツケテ血栓ト稱ス、而シテ其原因ハ血流ノ夜調、血管内皮ノ変化、若クハ凍傷、火傷ノ如キ血液自体ノ変質ノ場合等ニ、起ルモノニシテ、其結果ハ溶解シテ栓子トナリ、又ハ乾固シ、或ハ組織化シ、若クハ化膿ス。

(E) 栓塞 血管内ニ生シタルモノ、或ハ外部ヨリ入り来レル異物ノ血流ト共ニ流レテ或部ニテ血管ニ引攪リ、管腔ヲ狭小ナラシメ、或ハ全ク閉塞スル事アリ、斯ル凝固ヲ栓塞ト稱シ、是ヲ起ス異物ヲ栓子ト云フ。

栓子トナルベキモノハ主トシテ血栓ナルモノ、又組織ノ断片骨片ノ碎ニ於ケル骨髓細胞、脂肪細胞、寄生蟲卵、又ハ空氣等ナリ、而シテ其結果ハ栓子ノ大小數、並ニ其性質ト發生セル部位關係ニ由ラ異ナリ、殊ニ栓子大ニシテ、且側枝血行

ヲ有セザル部位ナル時ハ、梗塞部ヨリ末梢配下ノ組織ハ全ク血液ノ供給ヲ断ギ、壊死ヲ招来スベシ。

(F) 水腫 組織液ハ常ニ一定ノ平均ヲ維持スルモノニシテ、若シ其平衡ノ關係ヲ失シテ組織間隙、又ハ体腔中ニ異常ニ集積スル時ハ、是ヲ水腫ト云ヒ、原因ニヨリ全身性ノ事ト、一處器、又ハ組織ニ限局シテ現ル、場合トアリ、全身性或ハ主トシテ皮膚ニ来ル水腫ヲ特ニ浮腫ト云ヒ、体腔内ニ滲漏スルヲ腔水腫ト名ク、胸腔、腹腔、心囊、腦室、脊髓管、関節腔及陰囊ノ腔水腫ヲソレク、水胸、腹水症、水心囊、水頭、水脊髄、水関節ト名ク、此際增量蓄積セル液体ヲ滲液、或ハ浸濾液、又ハ病的滲出液ト稱ス。

水腫ノ原因ハ種々アレドモ、充血、瘀血、淋巴障、血液及組織ノ化學的集成変化、毛細管及靜脈管壁ノ変化、又神經障、血管周圍圧ノ低下等ニシテ、比較的移行ノ困難ナル部ニ於テ特ニ強度ナリ、而シテ其部ハ腫脹シテ容積ヲ増シ、組織ハ柔軟トナリテ韌カヲ失ヒ、其部ヲ圧迫スレバ陥没シテ圧痕ヲ残シ、其局部ハ蒼白色ヲ呈ス。

水腫ノ人体ニ及ボス影響モ、其持續廣狭臟器ノ種類ニ由リテ異ル神經組織及肺 (35)

臟等ハ被害甚大ナルヲ常トス、水腫長時間持続スレバ、臟器組織ハ圧迫ニ因ル
器的作用及栄養障礙ニ依リ、實質組織ノ萎縮又ハ退行性変化ヲ生ジテ、機能
障礙ヲ惹起ス、其他腔水腫ノ高度ノモノハ腦、肺、心臓等ヲ圧迫シテ、肺ニ於
テハ圧迫性肺炎、腦ニ於テハ試探菲薄ノ腦液遺物ヲ生ズル事アリ。

第六章 腫瘍

腫瘍トハ組織細胞ノ限局性ニ増殖シテ発生セル、一個ノ新生物ニシテ、個体ト
有機的関係無ク、唯栄養ヲ個体ニ仰ギ、且其組織ト多少相似タル造構ヲ示スノ
ミニシテ、自発的増殖ヲ管ミ、何等一定ノ發育限度ヲ有セザル新生物ナリ、換
言スレバ自働的性質ヲ帯ベル發育過剰ナリ、即自律作用アル事、正常組織ト異
レル造構ヲ示セル事等特徵ト見做サル。

腫瘍増息スルマ、其周圍ニ向テ漸次容積ヲ擴大スルアリ、或ハ周圍ノ組織裂腔
ニ向テ浸潤性ニ直入スルアリ、或ハ腫瘍細胞若クハ細胞群、淋巴管、或ハ血管
中ニ侵入シテ母組織ヨリ離レ、而シテ後血流若クハ淋巴流ト共ニ遠隔ノ部ニ輸
送セラル、ニ由ルモノニシテ、甲ハ腫瘍ノ境界健康組織ト正シク分割セラレ、

乙ハ其境界正シカラスシテ健康組織ト大ニ相隣シ、所謂浸潤性増息ノ状ヲ為ス、
丙ハ即轉移腫形成ノ起原タリ。

而シテ腫瘍ハ是ヲ荷成スル組織ノ状態ニ由リテ三種ニ大別ス。

(A) 類組織性腫瘍 多クノ學者ハ是ヲ單ニ結締組織性腫瘍ト云フ、茲ニハ主トシテ
胎生學上、一胚葉ヨリ生スル組織ヨリ成ルモノヲ含ミ、更ニ次ノ數種ヲ區別ス。

(一) 結締組織ノ定型ヲ有スル腫瘍。

(i) 纖維腫 纖維線維結締組織ヨリ成ルモノ。

(ii) 脂肪腫 脂肪組織ヨリ成ルモノ。

(iii) 粘液腫 粘液組織ヨリ成ルモノ。

(iv) 軟骨腫 軟骨組織ヨリ成ルモノ。

(v) 骨腫 骨組織ヨリ成ルモノ。

(二) 血管及淋巴管組織ノ定型ヲ有スル腫瘍。

(i) 血管腫 血管ノ新生ニヨルモノ。

(ii) 淋巴管腫 淋巴管ノ新生ニヨルモノ。

(三) 内皮細胞腫 内皮細胞ノ増生ニヨルモノ。

(三) 筋肉ノ定型ヲ有スル腫瘍。

(1) 横紋筋腫 横紋筋纖維ヨリ成ルモノ。

(2) 滑平筋腫 滑平筋纖維ヨリ成ルモノ。

四) 神経組織ノ定型ヲ有スル腫瘍。

(1) 神経腫 神経纖維ヨリ成ルモノ。

(2) 神経節腫 神経節ノ結構ヲ有スルモノ。

(3) 神経膠腫 神経膠質ヨリ成ルモノ。

(五) 胎生組織ノ定型ヲ有スルモノ。

(1) 肉腫 即チ是ナリ。

(B) 類癌性腫瘍 所謂上皮性腫瘍ト稱スルモノニシテ、前者ト異リ稍々複雑ニシテ、上皮性臓器ニ類希スル性状ヲ有スルモノヲ含ム。

(1) 乳癌腫 結締織性乳頭及是ヲ包皮スル上皮ノ増殖ニヨルモノ。

(2) 腺腫 腺組織ヨリ成ルモノ。

(3) 癌腫 悪性上皮性腫瘍ヲ總稱ス。

(C) 類癌形性腫瘍 最も複雑ナル先天性腫瘍ニシテ、單ニ不定型性組織ノミナラ

ズ、又一定ノ臓器成分ヲ含ムモノヲ云フ、即チ皮膚囊腫之ニ属シ、胎生時ノ外胚葉ノ一部ガ迷入シテ発スルモノト見做サル。

腫瘍ハ身体ニ及ボス影響ノ善悪ニヨリテ、是ヲ善性腫瘍及悪性腫瘍トニ分ツ、所謂善性腫瘍トハ其發育緩慢ニシテ、且ツ平等ニ隨テ周圍トノ境界正シク、且

轉移腫ヲ生ラサルモノヲ云ヒ、悪性腫瘍トハ發育速ニ、且周圍ニ向ツテ浸潤性

増大ヲ呈シ、破壊シ易ク、且轉移腫ヲ発生スルモノヲ云フ、癌腫及肉腫是ニ属

ス、然レドモ腫瘍ニ因ル危険ハ素ヨリ、唯上述ノ悪性ノミニ因ルニ非スシテ、

又其發生部位ニ因ル事多シ、例之腦及腦膜ニ発生シタル善性腫瘍ノ機能能ヲ障

碍シ、子宮ニ発生シタル善性腫瘍ノ腹部諸臓器ヲ圧迫スルガ如シ。

若シ腫瘍ノ生存タシキニ亘ル時ハ、全身ノ栄養障礙ヲ起シ、隨テ瘦削ヲ促ス、

所謂腫瘍悪液是ナリ、是レ主トシテ癌腫及肉腫ノ発生ニ伴フ如ク、腫瘍ノ急速

ナル發育ニ因スル、栄養物ノ吸收及腫瘍発生ニ因スル、栄養障礙(例之食道癌、

胃癌、腸癌ノ如キ)腫瘍組織ノ破壊ニ因スル蛋白質損及潰瘍面ニ発生セル腐敗

物質ノ吸收等其主ナル原因ニシテ、又腫瘍細胞ニ因スル毒物ノ分泌作用モ或ハ

其因タルベシ。

第七章 炎症一名焮衝論

(40)

炎症ノ本義ニ関シテハ古来種々ナル説アレドモ、要スルニ一定ノ有害作用ニ対
マル、動物体ノ局部的生活反應ニシテ、要カクニ其局部ニ起レル細胞組織ノ病
変ヲ云フ、而シテ此病変ハ種々チ複雑ナルモノニシテ、上承述ベキタレル諸原
障、或ハ逆行性及進行性病変ヲ兼発スルアリ、或ハ其何レカ主トスルモノアリ
テ、其変性ノ程度同ジカラス。

元来炎ナル名稱ハ本症ニ於ケル主徴ノ一ナル熱ガ、臨床上最も知覺セラレ易キ
ニ傾ツキ、茲ニ一ノ至大ニ發生シタリトノ誤見ニ基クモノニシテ、其名ハ古
クハニ知ラレタリシモ、他ノ主徴タル紅腫痛ハ名醫ツルツスニ依テ熱ニ追加セ
ラレ、是ヨリ炎症ノ四原症ノ名汎ク世ニ知ラレリシガ、近來更ニ機能障
一徴候ヲ加ヘラレタリ、斯ノ如ク炎ノ本性ハ、古来單ニ臨床的意義ヲ具フルニ
過ギザリシガ、病理解剖學ノ稍々進ハニ從ヒ、滲出ノ一現象ヲ以テ其主徴トナ
スニ至レリ、從ツテ死後其跡ヲ認メ難キ熱痛紅ハ、殆ト度外ニ放置セラレタル
事アリ、要スルニ種々ノ幟例ト経験トノ結果、炎症ノ存在ハ何ハモ疑ハサル如

ナレドモ、病変部位ニヨリテ、世スシモ前記ノ五徴候ヲ完備スルモノニアラザ
ルナリ、炎症ノ原因ハ種々ノ理學的作用、即器械的、温熱的、電氣的ノ刺激ト、
化學的毒物作用、並ニ動植物性寄生体ノ刺戟等ニ因テ発起スルモノナリ、左ニ
炎症ニ際シテ現ル、病変ノ概要ヲ記サン。

(A) 血管系統ニ現ル、現象、血管ニ於テハ炎症ヲ起マヤ、先ヅ血管ハ擴張シテ動
脈性充血ヲ起シ、即一定部ニ於テ血管運動神經ノ固有調節作用ヲ失ヒ、小動脈
及毛細管ハ擴大シ、粘膜、皮膚面ニアツテハ著明ノ微候ヲ呈スルヲ見ル、而シ
テ血流ハ緩慢トナリ、白血球ハ血管壁ニ附シ、次デ固有ノ運動ニ依リテ、内皮
間隙ヲ通シテ管外ニ出テ、圓形細胞浸潤ヲ呈ス、病変尚進行スル時ハ、白血球
及流動成分モ亦血管外ニ滲出シ、所謂炎症性浮腫ヲ呈ス。

(B) 組織自己ニ現ル、変化、炎症ニ際シテ組織自己ニ現ル、変化ハ逆行性及進行
性病変ノ二様アリ、即逆行性病変トシテハ諸細胞ガ瀰濁、腫脹又ハ脂肪及性ヲ
起シ、又壞死ヲモ来シ、化膿性病變ニヤリテハ組織ノ溶解スルヲ見ル、又進行
性病變トシテハ輕度ノ炎症ニ於テハ、滲出物及白血球等吸收セラレテ、痕跡ヲ
止メズ治癒スル事アレドモ、稍々進行セルモノハ自己ノ貪食作用ニ依テ、局部

(41)

ノ細菌及癩菌ヲ運搬シ吸収スルト同時ニ、一方ヨリ結締織細胞ノ増殖ヲ示シ、遂ニ間質結締織纖維ヲ形成シ、所謂癩痕様ノ結締トナリテ治癒ス。

- (A) 変性炎 膿器實質ノ変性ヲ主徵候トナスモノニシテ、又是ヲ實質性炎ト稱ス。
- (B) 滲出性炎 是ハ主トシテ、血液ノ液体成分及細胞成分ノ滲出作用ヲ現スヲ以テ特徵トスルモノニシテ、其滲出物ノ種類ニ依テ、更ニ次ノ如クニ分ツ、即漿液性炎、纖維素性炎、化膿性炎、加答兒性炎、出血性炎、壊死性炎(実扶的里性炎)、腐敗性炎是ナリ。
- (C) 増殖性炎或ハ成形成性炎 結締組織ノ増生ヲ主トスル病変ニシテ、是ガ實質性又ハ滲出性炎症ニ際シテ起レル、補綴作用トシテ起リ、又最初ヨリ專ラ間質ノ増殖ヲ以テ原發的トナス如ク炎症ノ二種類ヲ含ム。
- 組織内ニ異物若クハ疳釘等ヲ弄セル場合ニ當リ、結締組織細胞是ヲ包被シテ結節狀ヲナス時ハ、是ヲ異物結節ト云ヒ、其炎症ヲ異物性炎症ト稱ス。
- (D) 肉芽性炎 是ハ一種特別ノ傳染性原因ニ因テ発起スルヲ以テ主徵候トスルモノニシテ、肉芽組織ハ長ク結締組織ニ移行スルノ傾向ナク、却ツテ壊死ニ陥ル

傾向ヲ有スレラ云フ、然レドモ又滲出性炎症、或ハ増殖性炎ヲ伴ツテ来ル場合數ナカラズ、即結核、癩毒、癩病、馬鼻毒等ノ結節皆是ニ屬ス。

終リニ一言追加スベキモノアリ、即炎症ナルモノハ、一種ノ疾病ニ相違ナシト雖モ、其病的機轉ニ至リテハ、反ツテ吾人主体ノ保護機關タル事多シ、例之吾人若シ指頭ニ異物ノ侵入ヲ被ル時ハ、其周圍ニ化膿性炎ヲ起シ、以テ其異物ヲ膿汁ト共ニ退去セシメ、又組織ノ一部壊死ニ陥ル時ハ、其健康部トノ境界部ニ於テ、所謂分解性炎ヲ起シ、以テ壊死片ノ脱落ヲ催シ、又外傷ヲ被ル時ハ、其部ニ癩痕組織新生ヲ催起シ、組織ノ一部ニ癩痕ノ病毒侵入スル時ハ、滲出物ヲ生ジテ是ヲ稀薄シ、若クハ化膿膿毒等ヲ起シテ、害毒ノ世ニ及ブラ免ガレシム、其他病毒ノ殘傷ニ關ラズ体中ニ局在スル時ハ、其周圍ニ組織ノ新生ヲ起シ、是ヲ健康部ト隔ラシム、所謂反癩炎是ナリ、其他類例少ナカラズト雖モ、今一々是ヲ挙ゲズ。

第八章 疾病ノ治癒

夫レ疾病ハ先ヅ有害刺戟ノ作用ニ因テ、組織臟器ノ変化スルヨリ起リ、是ニ次

自然能
能ト云フ。
ハ二十餘百時、
古ニ於テ自然
ハ最良ノ巨
ナリト云ヘリ

テ其解剖的变化及官能障礙ニ対スル調節現象ノ現ハレ、其目的ヲ達スルニ至リ
テ治療ヲ告グルモノナリ。此ノ如ク有害ノ刺激ヨリ生ジタル器官ノ变化ニ対シ
テ、是ヲ調節矯正シ以テ健康状態ニ恢復セシムル、自然ノ作用ヲ稱シテ自然能[◎]
能ト云フ。
凡テ生物ハ自己ノ健康生活ヲ維持スル本能ヲ有ス、多クノ肉食獸ノ腐肉ヲ食ス
ル事ナク、或ハ四肢ヲ折傷スレバ体位ヲ安靜ニシ、或ハ日无浴、砂浴ヲナシテ
身体ヲ清潔ナラシムルガ如キ是ナリ、人間ニ於テ已飲食後ハ自然ニ食餌ヲ取ヒ
植物食ノミヲ取ル食ハ食塩ヲ欲シ、北極地ニ住ム者ノ脂肪食ヲ好ミ、尙痺病ニ
罹レル者ノ石灰ヲ嗜ムガ如キ又是ニ属ス、而シテ身体ヲ構成スル各器関ニ就テ、
一々是ヲ檢スレバ、健康生活ヲ維持スルノ要ニ於テ實ニ巧妙ヲ極ムルモノナリ。
皮膚ハ全身ノ保護装置ニシテ、其表皮ノ健全ナル限りハ、外界ヨリ細菌ノ侵入
スルヲ防ギ、又是ニ疵傷ヲ生ズレバ直ニ出血シテ、其傷面ヲ洗ヒ、以テ外部ヨリ
是ニ侵入スル細菌ヲ流シ去リ、又創傷部ノ血管内ニハ血液自然ニ凝固シテ、破
綻セル血管ヲ閉塞ス、眼ハ外界ニ暴露シテ、空氣、塵埃ノ刺激ヲ受ケ易キヲ以
テ、是ニ対スル自然ノ保護アリ、即反射性眼瞼閉鎖、淚液分泌等是ナリ、呼吸

道ニ於テモ外界ヨリ偶然進入スル種々ノ異物ヲ防ガンガ為ニ噴嚏、咳嗽、声帯
ノ反射性閉鎖、氣道粘膜ノ粘液分泌、頸毛上皮運動等アリ、唾液腺ハ口腔ヲ清
潔ニシ、食物ノ嚥下ヲ助クル唾液ヲ分泌スルノミナラズ、一種ノ除毒器関ナリ、
沃度加里、水銀中毒等ニ於テハ、此等ノ化學的物質ハ速ニ唾液腺ヨリ排出セラレ、
又胃腸ニ異常ノ酸酵作用起ル場合ニハ、自ら唾液ノ分泌増加シテ、血中ニ吸收
セラレタル有害性酸酵産物ヲ排出ス、胃モ又一種ノ保護器関ナリ、不良ノ食物
ヲ攝取スレバ嘔吐ヲ起シテ是ヲ体外ニ驅出シ、又腎臟病患者、排泄等ニ嘔吐ヲ
来スモ、血中ニ存スル有害性物質ヲ排出センガ為ニ起ルモノナリ、胃液ノ殺菌
力ヲ有シ、虎列剌菌、チフス菌ノ傳染ニ対シテ、一定度防禦ノ性アル事周知ノ
事實ナリ、腸モ又不良ノ食物、或ハ異常ノ腐敗、酸酵産物ヲ下痢ニ由テ体外ニ
排出シ、又該ニ大ニ鉍中毒ヲ起サシムレバ盛ニ下痢ヲナシテ、治療ヲ告グト
ス。

血液ノ抗毒性及抗菌性ヲ有スル事ハ夙ニ人ノ知ル如クニシテ、即白血球ノ細菌ヲ
自体内ニ攝取シテ是ヲ消化滅盡シ、又其血液中ニ游離スル特殊ノ化學的物質、
所謂「アレキシン」ノ細菌ヲ溶解殺滅スル性アル事ハ顯著ノ事實ナリ、炎症性

疾患ニ於テビール氏ノ腎血療法ノ効ヲ奏スルハ、蓋シ此抗菌性作用ヲ有スル、血液分ノ滲出ノ増加スルニ基ツキ、又冷電法ノ炎症ニ効アルハ、寒冷刺激ニ因スル反應性充血及白血球増加ノ起ル結果ナリ、代鍼灸匠術ガ白血球ヲ増加セシメテ、種々ナル炎症性疾患ノ治療ヲ促スヲ得ル所以ノモトハ、聖境抗菌性作用ヲ有スル、石刀物質ノ多量ニ游離セラル、ニ因ル是ト同シク、急性熱性傳染病ニ冷水浴ノ効果ヲ奏スルモ、体温下降ノ為メノミニアラズシテ、白血球増加ノ起ル事其主要ノ原因ナリ。

臟器ノ代償機能モ又自然療能ノ發現ニシテ、實ニ重要ナル一種ノ生活反應ナリ、一側ノ腎臟、睾丸、苓脂腺極スレバ、他側ノ同臟器見ガ官能ヲ代償シテ肥大シ、又心臓瓣膜病ニ於テ血液循環障礙ヲ生スレバ、是ニ應ジテ心動亢進シ、能フダケ血行ヲ調節シテ、適ニ節質肥大シ、脾臟ヲ除去スレバ肝臓及骨髓ノ是ニ代リテ、其機能ヲ分擔スル事ハ、既ニ固知ノ事實タリ、身体一部ノ動脈閉塞シテ、血行杜絶スルマ、是ニ吻合スル近隣ノ動脈枝ハ擴張シテ、所謂側枝血行ヲ營シ、以テ血行ヲ平均セシメ、毛細管ノ如キハ、ノートナールゲルノ見タリシ如ク、適ニ動脈ニ化シテ血行ヲ代償スルガ如キ、實ニ自然ノ妙機ノ巧妙ナルニ驚カザルヲ

得ス。

又身体一局部ノ瘵死ニ陥ルマ、其周圍ニ反應性炎症ヲ生ジテ、結締組織ヲ新生シ以テ瘵死部ヲ包埋シテ、健康部ト區別スルガ如キモ、又着明ナル治療現象ノ一ナリ。

以上述ベタルガ如ク、吾人ハ健康ヲ維持スル本能ヲ有シ、且自然ノ療能ヲ有ス、是實ニ疾病ニ罹ルモ再ビ元ノ健康状態ニ恢復スル所以ニシテ、ヒホクヲラスノ「自然ハ医ナリ」ト言ヒシハ、實ニ千古不應ノ格言ナリト謂ハザルベカラス。抑々生活体ハ多数ノ器官相合シテ、一箇独立セル全体ヲナスモノニシテ、各器官ノ生活活動ハ、實ニ全体ノ生活及機能ニ用ヲナシ、又各器官ノ生存及機能ハ全体ノ活動ニヨル、即全体ノ部分タル器官ハ、全体ノ生存ニ用ヲナシ、又全体ハ其部分タル器官ノ機能ヲ支配ス、此ノ如ク部分ト全体トノ二者ノ關係ヲ稱シテ、是ヲ合目的性トハ云フナリ、例之家屋ニツキテ言ハシニ、夫レ夫レ一定ノ用ヲ為ス、即壁ハ外氣ノ侵襲ヲ防ギ、屋根ハ雨露ノ漏ル、ヲ防ギ、窓ハ光線ヲ通過セシメテ、家屋ヲ照ラサシム。

吾人生活体ハ一ノ合体ニシテ、是ヲ形成セル各器官ノ全生活体ノ生存活動ニ對

シテ、一定ノ働キヲ為ス事、家屋ニ於ケルガ如シ、サレバ一部ノ臓器ニシテ障
碍セラル、時ハ、直ニ全体ノ活動ヲ害シ、又全体ノ損傷セラレ、時ハ、各部分
ノ機能モ又從テ障礙セラレザルヲ得ス。

然レドモ有機生活体ハ、無生物タル家屋ノ如キモノトハ異ナリ、其生存ヲ維持
保続セントスル本能アルヲ以テ、若シ其一部又ハ數部分ニ變化ヲ生ジ、全体ノ
生存ニ影響ヲ及ボスニ至ル時ハ、是ヲ調節矯正セントスル機轉ノ自然ニ生起セ
サルヲ得ズ、此現象ヲ稱シテ合目的性現象ト云フ、蓋シ疾病ナルモノハ有害利
害ニ對スル適應調節作用ノ不完全、又ハ缺乏ナルヨリ起ルモノナリト雖モ、身
体ノ器官ニ解剖的變化ヲ生ジ、機能障礙ヲ来スヤ、是ヲ調節矯正シテ再び以前
ノ正規状態ニ恢復セシメントスル、合目的性ノ機轉、即調節機轉ノ発現スルニ
至ルモノナリ。

故ニ吾人ノ疾病現象ヲ分析シテ、個体ノ生活ニ有害ナルモノト、有利ナルモノ
トノ二種ヲ區別シ、其有害ナルモノハ、是ヲ除去シ、是ニ反シテ有利ナルモノ
ハ、是ヲ補助促進セザルベカラズ、豫言スレバ有害刺激ニ由テ生ジタル疾病状
態ハ、是ヲ除去シ、而シテ是ヲ調節矯正シテ、正規状態ニ復セシメントスル合

目的性機轉、即調節機轉ハ、或ルベク是ヲ促進補成スルノ要アリ、然ルニ疾病状
態ニ調節機轉モ共ニ有害ナル病的現象トシテ、是ヲ除去セントスルガ如キ事ア
ラバ、是實ニ自然ノ機能ヲ無視セル誤謬ノ措地ト云フベシ、炎症ニ對シテハ直
ニ消炎法ヲ行ヒ、或ハ尿酸ガ根リニ叩開テ消スガ如キ、或ハ熱発アレバ直ニ
解熱劑ヲ濫用スルガ如キ是ナリ、吾人ハ疾病ヲ処置スルニ當リテハ先ヅオ一ニ
自然ノ機能タル、合目的性ノ生活反應、即調節機轉ヲ利用シ、其治療作用ヲ促
進助成スルヲ以テ機宜ニ適セルモノトナス、即疾病ヲ療スルニハ寧ロ生物學的
見地ノ上ニ立ち、生活体自然ノ調節機轉ヲ活用シ、是ヲ補佐スルヲ以テ、其方
針トナスベキナリ。

第九章 死因論

往昔希臘ノ大哲學者ヘラクリット氏ハ人ノ生命ト火焰トハ、同一ノ關係ヲ有スル
事ヲ説ケリ、蓋シ此比喻タルマ軍ニ兩者同ノ一般關係ヲ表ハセルノミナラズ、
實ニ人間及火焰ニ最モ必要缺クベカラザル外界ノ要約、即チ酸素ノ存在ヲ要ス
ルノ点ニアリトス、若シ空气中ノ酸素ニシテ缺乏センカ炎々タル火焰ハ直ニ消

滅スベシ、人体ノ各組織ニシテ酸素ノ缺乏ヲ告ゲンカ、其命脈ハ忽チ絶セシ、
但シ各組織ノ酸素需要量ハ種々ニシテ一定セルモノニアラザルカ故ニ、各組織
ハ決シテ時ヲ同フシ態ヲ等シクシテ死スル事無シト雖モ、各組織各臓器ヨリ
或立スル一因独立ノ生治体トシテハ、其生命ノ所行上セズマ一定量ノ酸素ヲ要
スルモノニシテ、其關係自ラ一定スルヲ以テ、若シ此需要ノ平均ヲ持続シ得ザ
ル時ハ、死亡ノ運命ニ遭遇セザルベカラザルナリ、故ニ死亡ハ全身ノ燃焼及生
碎等ノ如キ破格ノ場合ヲ除ク外ハ、常ニ酸素ノ缺乏ニ惹起ヒラル、モノナリ
トス、實ニ酸素ノ缺乏ハ一般生物ノ死因タリ、然レドモ酸素缺乏ヨリ起ル死
障ハ、決シテ一定不変ノモノニ非ズシテ、各組織各臓器ノ酸素缺乏ヨリ、種
々ノ障病ヲ生治体ニ及不シ、以テ死ニ陥ラシムルモノナル事ヲ忘ルベカラズ、
今酸素缺乏ヲ未スルノ諸障病ヲ列挙スレバ左ノ如シ。

- (A) 血液中ノ酸素保持者、即赤血球ノ減少缺乏ニ因スル障病。
- (B) 循環障病ニ基因スル赤血球分而ノ不同、或ハ分而異常ニ因スル障病。
- (C) 呼吸障病ノ結果体内ニ消費シタル酸素ノ、肺臓内ニ於ケル補給不能ニ因スル障病。

(D) 心臓及肺臓ノ作用ヲ支配シ、是ヲシテ好ク其機能ヲ営為セシムル神経中樞ノ
機能障病ニ因スル障病。

以上ノ四箇ハ實ニ生治体ヲ死地ニ導ク門ヲニシテ、古人ノ所謂死門、或ハ死ノ使
ト稱セシモノ是ナリ。

血液ノ変化ニヨリ起ル死ノ死ヲ稱シテ、貧血死ト云フ者アリ、然レドモ是決シ
テ適當ノ語ニ非ズ、又血液ノ変化ニヨリ惹起セラレタル死ノ原因ヲ發括
スベキ名稱ニモアラザルナリ、適切ナル一例ヲ茲ニ引置スレバ、酸化炭素ハ酸
素ノ保持者及介配者タル、赤血球ノ化學的変化ヲ惹起シ、以テ死ヲ致スモノナ
レドモ、赤血球自己ハ其數ニ於テ毫モ減少スル事ナク、唯其化學的変化ニヨリ
テ死ヲ起スモノナルヲ見テモ知ルベシ、貧血ナル語ハ尚能力アル赤血球ノ減少
セル場合ニ於テノミ使用スベキ名稱ナリ、而シテ赤血球即酸素保持者ノ減少ス
ルト雖モ、死ハ是ノミニテ決シテ起ルモノニアラズシテ、血管ノ内容タル血液
減少シ、血圧下降スルノ結果、其影響延イテ心臓ニ及ビ、以テ循環障病ヲ來シ
テ死スルモノナリ、急性貧血ノ際心臓、又ハ血管内ニ生理的食塩水ヲ注入スレ
バ、血圧血行再ビ旧ニ復シ、生命ヲ保持シ得ルヲ見テ是ヲ救スベシ、神経系統

ノナ運ハ、酸素分而上直接ノ関係ヲ有スルモノニ非ズシテ、唯間接ニ心臓及肺
臓ノ機能ヲ障礙シ、酸素ノ輸入ヲ妨ゲテ死ヲ来スモノナリ、心臓ノ機能障礙ヨ
リ起ル死ヲ心死ト云ヒ、肺臓ノ機能障礙ニ基ク死亡ヲ肺室息死ト云フ。

是ヲ要スルニ死ノ原因トナルモノハ、酸素ノ缺乏ニシテ、是ヲ来ス障礙ハ頗ル
多岐ナリト雖モ、其帰スル処。心、肺及腦(殊ニ延髓)ノ機能障礙ニ因リテ直
接或ハ間接ニ酸素ノ缺乏ヲ来シ、死ニ陥ルモノナリトス。

然リト雖モ死門ニ対スル思見ハ、時代思潮ノ変遷ニヨリ多大ノ影響ヲ受ケタリ、
有名ナル病理學者コーン・ハイム氏ハ、其著病理學論ニ於テ次ノ如ク記載セリ、
曰ク「若シ諸君ニシテ解剖書録ヲ見レバ、腎臟炎、心臓病、癌腫、骨髄病及其
他ノ慢性病ニテ死亡セシメノ直接死因トシテ、肺水腫ノ特ニ多キヲ知ラルベシ
ト、實ニ曩昔ノ医家ハ肺水腫即肺室息ニテ死亡スルモノト思惟シタリシナリ、
然レドモ如斯考案ハコーン・ハイム氏ノ研究ニヨリテ打破セラレ、其誤謬ナル事
ヲ明ニセラレタリ。

即戸ク人ハ肺水腫ニテ死スルニ非ズ、料ニ死セントスルニ当リテ、肺水腫ヲ生
ズルモノナリト、蓋シ人ノ死ニ頻スルマ、心臓左室ノ運動ハ既ニ発絶スルモ、

右室ハ尚運動ヲ継続シ、肺動脈ニ向テ血液ヲ驅出スルヲ以テ、小循環系ノ血液
ハ左室ノ欠乏セル結果還流スルニ由テク、遂ニ肺ニ鬱血水腫ヲ生ズルニ至ルモ
ノニシテ、即肺水腫ハ頻死時ニ発スル一現象ニ他ナラス。

臨床上直接ノ死因ヲ説明スルニ当テハ、先ヅ死ト共ニ関係シテ起ル如ク緩ベテ
ヲ知ルノ要アリ、然レドモ是ニ就テハ未ダ充分説明シ得ルノ域ニ達セザルヲ如
何セン、何トナレバ此等緩テヲ説明スルニハ、何故ニ人ハ死シ、如何ニシテ人
ハ死スルカヲ、先ヅ知ラザルベカラザレバナリ、又死亡ノ間接ノ原因、即遠因
ニ至リテモ、必ズシニ確實ニ證明セラルベキモノニアラズ、是ヲ明カニスルニ
ハ何ニ依テ、死門ノ開カレタルカヲ、明カニセザルベカラザレバナリ。

唯死ヲ以テ終ル疾病、或ハ死ノ媒介者ハ、是ヲ間接ノ死因トシテ見ルモ敢テ不
可ナル事ナシ、即是疑ヒモ黒ク死病ナリ、然レドモ各疾病ハ、各其原因ヲ有シ、
又多クノ病ハ局所的病変ヲ伴フ、而シテ此病変ハ死門ニ接近セルモノニシテ、
遂ニ是等相集合シテ死因ノ連鎖ヲ形成スルモノナリ、即此連鎖ノ一端ハ死病ノ
原因ニシテ、他端ハ死門ナリ、而シテ此連鎖ノ各節モ又死因タルヲ得ルモノナ
リ、讀者ノ理解ヲ容易ナラシメンガ爲、此知ニ一例ヲ挙グレバ、或人不幸ノ災

禍 = 達ヒテ胃部 = 打撲ヲ蒙リ、其部胃癌ヲ発生シテ潰瘍トナリ、遂ニ腹腔内
ニ穿孔シテ、重症ノ穿孔性腹膜炎ヲ発シ、七臓ノ衰弱ヲ痺症状ノ下ニ死亡シタ
リトセヨ。此場合ニ於テ何故ニ腹膜炎ニヨリ死亡セシカト問ハバ、七臓ノ痺ニ
因スルモノト認ムルノ外ナシ、又如何ニシテ胃癌ガ死ヲ喚起セシカト問ハバ、
其死因トシテ、穿孔性腹膜炎ヲ認メザルベカラサルナリ。
然ラバ不爭ノ災難ニ因スル胃部ノ打撲ハ、死因ト如何ナル關係ヲ有スルヤト問
ハバ、此場合ニハ不爭ノ災難ガ胃癌發生ノ原因トナラザリシマ、否マラ究メザ
ルベカラズ、若シ不爭ノ災難ニ逢ヒタル後、胃癌ヲ生ジタリトセバ、或ハ胃部
ノ打撲ハ胃癌發生ノ誘因トナリタルマモ測リ知ルベカラズ、何トナレバ外傷ハ
腫瘍發生ノ原因ノ一ナレバナリ。

此ノ如ク死ノ由リテ起ル原因ニハ、遠因、近因、共同原因ノ連鎖ヲナシ、其一端
ハ死ノ遠因ヲナシ、他ノ一端ハ死門ヲ為シ、其間ニ位スル各節ハ死門ヲ開クノ
原因トナルモノナリ、故ニ原因連鎖中ヨリ單ニ其一個ノ原因ヲ抽出シ、直ニ是
ヲ死ノ原因トナスガ如キハ早計ニシテ、誤謬無キヲ保セス、然ルニ從來医家ノ
記載セル死亡診断書ナルモノヲ見ルニ、其死因ヲ七臓衰弱、或ハ不瘳ト記載セ

ルモノニ目ニ於テモ、尙ホ少ナカラサルガ如シ、是レ果シテ其当ヲ得ノルモノ
ト云フヲ得ベキカ、因ヨリノトナレザル代ノ説キシガ如ク、人ハ若ト常ニ七
臓ヨリ死スルモノナリト雖モ、然モ其七臓ヨリ死スル原因ニ至リテハ實ニ種々
ニシテ、直接或ハ間接ニ七臓ノ解剖的变化、若クハ官能の障礙ヲ生ジテ、致死
セシムルノ原因俾指スルニ暇アラズ、サレバ医家タル自必スモ、先ヅ七臓障害
ノ由リ来リタル原因發見ヲ究メザルベカラズ、此ノ如クニシテ始メテ、眞ノ死
因ヲ明カニシタリト云フヲ得ベシ、唯漫然七臓ノ痺ヲ以テ直ニ死因ニ歸シユル
ガ如キハ、學問上何再ノ價値無ク、医学ノ素養無キ俗人ト雖モ是ヲ能クスベシ。
七臓ノ尚鼓動ヲ止メズ、血液ノ循環スル限リハ、何ゾ死アラシマ、若シ夫レ一
歩ヲ進メテ論スレバ、七臓ノ痺其存ハセズシモ死因ト稱スベキモノニ非ズシテ、
却テ死センガ爲ニ起ル処ノ現象ナリト謂ヒ得ベシ。
前既ニ一言シタルガ如クコリン・ハイム氏ノ説ニヨレバ、人ノ所ニ死セントスル
マ、七臓ノ痺シ、石室ハ尚若干時間其運動ヲ継続スルガ故ニ、肺循環區域ニ
鬱血ヲ来シ、次テ肺水腫ヲ発スルニ至ル、サレバ七臓ノ痺ハ人ノ所ニ死亡セン
トスル際ノ状態ト云フベク、是ヲ以テ直ニ死因トナスガ如キハ早計ニ非ズ、須

ク其根元ニ曲リ、心臓腫脹ヲ致シタル病的変化ニ注意セザルベカラザルナリ。

第十章 頓死

頓死トハ極メテ短時間中ニ死スルヲ云フ、是ハ原因タル病理解剖學的機轉ハ頗ル多岐ナリ、例之故ノ肺結核症ニ於テ、肺動脈枝ノ破壊スルマ、血管ヨリ流出シタル多量ノ血液ハ、気道内ニ入りテ、急ニ是ヲ填充シ為ニ、瓦斯交換作用ヲ妨害シ、僅カ數分間ニシテ死ニ陥ラシム、故ニ這般ノ場合ニ於テハ、失血ニ因スルヨリモ、寧ロ呼吸癱瘓ニ由來スル、窒息ニ基クモノナリト稱スルヲ妥當トス、又胃円形潰瘍ニ於テ、其附近ヲ去ル脾動脈壁ノ浸蝕破壊セラル、ヤ、大量ノ血液一時ニ胃中ニ溢流吐出セレ為ニ、患者ハ急性貧血ニ陥リ、急速ニ死ニ帰スルモノナリ、又彼ノ栓塞モ同ジク、頓死ノ原因トナリ得ルモノニシテ、例之衰弱セル患者ノ久シク病牀ニ横臥スル時ハ、肢靜脈内ニ血栓ヲ生ジ、是ガ患者ノ運動ニ當リ、其一片破壊シ、血流ト共ニ下大靜脈ヲ経テ右心ニ入り、次ニ肺動脈枝ニ達シテ、是ヲ栓塞シ、突然呼吸困難ヲ惹キ、苦悶状態ノ下ニ、心臓大厚ニ陥リテ斃ル、又急性心内膜炎ノ際、病変セル瓣膜ノ破片脱落シ、血流ニ阻

ツテ七冠狀動脈ニ入り、是ヲ栓塞スレバ、卒然七運動ノ停止ヲ招キ、死ニ轉帰ス。

斯ノ如ク偶発スル栓塞機轉ハ、無症候ノ下ニ全ク急死スルモノニシテ、吾人ヲシテ晴天霹靂ノ感ヲ起サシムル事多シ。

生理學上明ナルガ如ク、延髓部ハ呼吸中樞、七動中樞、血管運動神経中樞等ノ如キ生活ニ、最も必要ナル中樞ノ所在地ナルヲ以テ、若シ此部ニ出血ヲ生ジ、或ハ損傷ヲ受ス時ハ、忽チ死亡ニ陥ルヲ論ラ候タズ。

窒息モ又頓死ノ因トナル事稀ナラズ、通常喉頭入口ノ突然閉塞スルニ因リ起リ、最も多クハ巨大ナル食塊ノ填塞、或ハ急死スル声門水腫ニ因スルモノニシテ、此等ノ場合ニ於テハ全ク特異ナル前驅症狀ノ排除スルヲ常トス。

外傷モ又屢々頓死ノ原因トナルモノニシテ、即貴等感傷ノ損傷、或ハ大血管破裂ニ因スル出血ニヨリ、急卒ナル死ニ至ルモノナリ。

甚ク急性ニ発起スル水腫、例之声門肺及腦水腫等ノ如キ、生活ニ必要ナル臓器ノ機能ヲ阻害シテ、急速ノ死ヲ来ス事アリ、然レドモ前記ノ場合ノ多クハ、水腫ヲ発起シ得ベキ一定ノ疾患即、腎臓炎、心臓病等ノ前驅スルヲ通例トス。

痙攣及尸痙モ又頓死ヲ招来シ得ルモノニシテ、故ノ癲癇病者ノ痙攣発作時ニ、頓死ヲ惹起スル事ハ世人ノ熟知スル如ナリ、是墨境呼吸筋ノ痙攣ニ因リテ、呼吸ヲ管為スル事能ハズシテ窒息死ニ陥ルモノナリ。

又声門痙攣ハ声門ヲ著シク狹隘ナラシメ、窒息ノ下ニ生命ヲ奪フモノナリ。嘔吐防護麻酔ノ際、比較的小量ノ嘔吐防護吸入ニ由テモ、俄然死亡スルガ如キ有往々是アリ、此ノ如キ者ノ多クハ、所謂淋巴腺体質ノモノ、全身淋巴腺、扁桃腺、淋巴腺等ノ一散ニ属ス、蓋シ此体質ノモノハ、心臓ノ衰弱尸痙ヲ来シ易キ素質アルニ因ルナラン。

扶心症ハ又心臓左室ノ、一時性ノ痙攣、或ハ一種ノ尸痙状態ニシテ、頓死ノ原因トナル事屢々是アリ、然リト雖モ該疾患タルマ、心左室ノ既ニ罹患セル者ニ於テ認めル事多ク、從ツテ多少ノ前驅症状ヲ呈スルヲ常トス、諸種ノ毒物モ又有カナル頓死ノ原因タル事ヲ得ルモノニシテ、例之青酸ハ呼吸中樞ヲナ痺シテ、臨時生命ヲ奪ヒ、「ストリキニー子」ハ強キ全身痙攣ヲ発シ、呼吸筋ヲ強直セシメテ、窒息死ニ至ラシムル作用ヲ有ス、而シテ斯ノ如キ中毒作用ハ、痙攣ナル人ニ来リ、然モ其症候ノ経過頗ル短時ニシテ、尚人ヲ倒シ得ルモノナリ。

高度ノ火傷モ又速ニ死ニ陥ラシム、其原因不明ナルモノアルモ、蓋シ火傷組織内ニ形成セラレタル、異質ノ毒性物質ノ作用ニ因ルモノナラン、頓死ノ解剖的如見ハ頗ル多散ニシテ、彼ノ出血性塞等ヨリ死セルモノニアリテハ、解剖的変化ヲ認識シ得ルモノナリト雖モ、又多数ノ場合ニ於テ全ク是ヲ排除スル事アリ、例之前記ノ中毒症ニ於ケルガ如シ。

劇烈ナル精神感動、殊ニ憤怒、驚愕、恐怖等ノ為ニ突然頓死スル事アリ、是或ハ直接ニ心動ノ尸痙スルニヨリ、或ハ一時性ニ亢進スル血圧ノ為ニ、予メ既ニ病理的变化ニ罹レル、脳血管等ノ俄然破壊スルニ由ルナリ。抑々症候ナルモノハ、諸般臓器ノ官能的变化ニ外ナラザルガ故ニ、頓死ノ原因ヲ究ムルニ当リテモ、單一ナル解剖學上ノ所見ノミニ滿セズ、須ラク頓死時ニ於ケル病変臓器ノ官能ヲ精檢シ、以テ頓死ノ因テ起ル所以ヲ闡明セザルベカラズ。

第十一章 瀕死ノ症候

吾人が屢々遭遇スル死ハ、通常鎮除ニ進行スルモノニシテ、是ニ瀕スル状態ヲ

稱シテ、死戰ト云フ、然レドモ是次シテ生命ト、死ト相爭鬪スルニ非ズシテ、却テ生命ノ將ニ消滅セントスル現象ニ外ナラス。

死戰ニ於ケル患者ノ自覺的症候ハ、頗ル多様ニシテ、該患者ガ神昏中程ノ状態ノ如何ニヨリ、或ハ呼吸困難、或ハ胸部窒迫ヲ感ジ、悶々タル苦惱ノ声ヲ放ツ事アリ、或ハ又極メテ爽快ナル感ヲ抱キ、懐然トシテ死スル事アリ、而シテ死戰期ニ於ケル他覺的症候ハ、諸臟器官能ノ衰絶セントスルニ因テ惹起スルモノニシテ、就中最も著明ナルハ、筋肉及血液ノ循環障礙ナリトス、即身体ハ筋力衰絶ノ結果緊張ヲ失ヒ、只重力ニ因テ其位置ヲ保チ、氣道ノ反射運動消失シ爲ニ、氣道内ニ存スル分泌液ハ、咳嗽ヲ呼ビテ咯出セラル、ニ足ラズ、氣道ヲ出入スル空氣内ニ含シテ、大小種々ナル水泡音、所謂喘鳴ヲ發シ、遂ニ最後ノ呼吸ト共ニ死ニ陥ル。

又心臓ノ衰弱其極ニ達シ、血液循環將ニ停止セントスルニ到レバ、諸組織ノ水分著シク減少シ、當時一定ノ緊張ヲ保チ居タリシ組織ハ、萎縮陥没シ、從テ骨隆起ハ明顯ニ現出スルニ至ル、是時ニ顔面ニ於テ著明ニ誤×得ル如ニシテ、患者ノ眼窩ハ陥没シテ、鼻梁聳エ、觀骨突隆シ、患者ノ外貌憔悴シテ、蒼白青色

ヲ呈シ、角膜ハ其光澤ヲ失ヒ、瞳孔又散大シテ、光線ニ反應セズ、患者斯ノ如キ容貌ヲ呈スルニ至レバ、最も重要ニ陥レル證ニシテ、夙ニヒホクヲテス氏ノ記載セシ所ノモノナル故ニ、是ヲヒホクヲテス氏ノ顯鏡ト云フ。

瀕死ノ患者ニ於ケル意識ノ状態ハ、頗ル多様ニシテ、或ハ終焉ニ至ル迄毫モ其障礙無キ事アリ、或ハ全ク消失ニ歸スル事アリテ、一定シ難シト雖モ、概シテ感覺ハ世ノ感覺ニ比シ、永ク保存セラレ、ヲ常トス、又体温ハ下降シ、又不隨意ニ糞尿ノ漏出ヲ見ル、是等境界ニ相夾セル、反射運動ノ消失ニ因ルモノナリ。上記ノ症状ヲ發現スルニ至レバ、該患者ノ生命ハ將ニ消滅セントスルノ歎ニシテ、死ノ既ニ寸尺ノ前ニ迫レル事ヲ確認スルヲ得ベキナリ。

第十二章 虚脱

今心臓作用、卒然停止セントスル時ハ、患者ハ死ニ陥リ、或ハ假死ノ状ヲ呈スル事アリ、即突然タル心臓衰弱ノ結果、大脳ニ流入スル血液俄ニ減少シ爲ニ、急性腦貧血ニ陥リ、意識ハ消失シ、四肢腕カラ寒シ、一時全ク死者ト誤バザルニ至ル、斯ノ如ク死、或ハ假死ノ、將ニ未衰セントスルニ際シ、該患者ハ一種 (61)

名状スヘカラザル衰弱ノ状ヲ呈スルヲ見ル。

吾人が虚脱ト稱スルハ、此時ノ状態ニ外ナラス、故ニ虚脱ハ特異ナル独立状態ニ非スシテ、却テ種々ナル疾病ノ経過中ニ発起スル身体ノ病的状態ニシテ、予後ノ極メテ不良ナルヲ指示スルモノナリ。

虚脱ハ主トシテ、温経済ノ病的機轉ニシテ、從テ是ニ最モ大ナル關係ヲ有スルモノハ、心臓ノ状態ナリ、蓋シ生理的ニ吾人ノ体温ハ、二種ノ方法ニ依テ調節セラル、即傳導及血液循環是ナリ、即血液ハ身体周圍ノ冷却セル部分ト、身体内部ノ温暖ナル部分トヲ平均スルノ媒介トナルモノナルカ故ニ、若シ心臓衰弱ノ発起シテ、血行衰弱不十分トナレバ、身体末梢部ノ放温ヲ十分ニ補給スルニ由ナク、遂ニ若シク冷却ヲ来スモノナリ。

身体熱障ニシテ、心臓作用強盛ナルモノニアリテハ、温放散ノ為メ、末梢部ノ冷却スル事アルモ、新鮮且温暖ナル血液ノ循環ニヨリ、直ニ平均セラレ、殊モ無ク常温ニ復スルモノナリト雖モ、心臓ノ病的状態ニアルモノハ、是ヲ為スヲ得ズ、故ニ循環系ノ疾病ハ、最大ナル体温調節障ノ原因トナルモノナリ、虚脱ノ主要ナル原因ハ、即心臓衰弱ニシテ、身体末梢部ノ冷却ヲ来シ、其最モ

強ク冷却スルハ、四肢、耳重、鼻翼並ニ顔面ニシテ、全身ノ体温下降シ、患者ノ外貌着シク変化シ、顔面ハ蒼白尖銳トナリ、眼窩陥没、頰部瘦削シ、全身視力ニ陥ル、蓋シ心臓衰弱ノ結果、血管ノ内容僅微トナリ、組織ノ緊素減弱スルカ為ナリ、又各種臓器ハ、著明ノ症候ヲ呈シ、殊ニ脂血液減少スル結果、脂質血ヲ凝起セシ場合ニハ、所謂虚脱性譫妄ニ陥ル。

數多ノ疾病ハ虚脱ヲ発起シ能フモノニシテ、最モ屢々大手術後、殊ニ腹部手術後ニ来ル、此ノ如キハ患者ガ既行ノ疾病ノ為メ、心臓衰弱ヲ有スル場合、是ヲ見ル。

熱性病ハ屢々虚脱ヲ併発スルモノニシテ、兩者ノ間ニハ、左記ノ下ニ一定ノ關係ヲ有ス。

(A) 熱発ハ虚脱ト同ジク、一種ノ体温調節障ナリ。

(B) 熱発ハ屢々心臓衰弱ヲ発起ス。

虚脱ニハ、或ハ輕キアリ、或ハ重キアリ、輕度ノ虚脱ハ多クハ恢復スト雖モ、重症虚脱ハ容易ニ死ニ歸ス。

患者ノ心臓、既ニ衰弱セル時ハ、別ニ較著ナラザル作用ノ加ハルモ、容易ニ虚

腕 = 陥ル、例之矢血、労働、下痢等ノ如シ。

咽頭実核的里 = 於ラハ、屢々ニ様ノ虚脱ヲ惹起ス。

(A) 疾病ノ経過中 = 発ス。此虚脱ハ、熱性病ノ経過中 = 承ルモノト、同一ノモノトナリ。

(B) 疾病ノ経過後、殆ドニ乃至三週ニシテ、発現スルモノニシテ、実核的里ニ時異ナルモノナリ。蓋シ世部ノ実核的里性広痺 = 於ケルガ如ク、該病毒素ノ心感ニ作用シ、其広痺ヲ換起スルニ依ルモノナリトス。

既ニ前述セルガ如ク、虚脱ハ危篤ノ症状ニシテ、是ヲ放置スル時ハ、為ニ生命ヲ奪ハル、ガ故ニ、須ク病的発生基上及症候學上、綿密ナル觀察ヲナシテ、是ニ對スル処置ノ過誤ナキヲ期セザルベカラズ。

此際最モ顧慮スベキハ、心臓ノ衰弱及体温下降ノ処置ナリトス。

虚脱ハ症候頗ル顯著ニシテ、傍人ハ決シテ是ヲ看過スル事ナシ、然レドモ既ニ死体ニ於テハ、生前ニ於ケル虚脱ニ對シテ、確實ニ断定スベキ時異ノ点アルヲ見ス、吾人ハ唯心臓ノ状態ヲ見テ、其虚脱ヲ惹起シ得ベキ可能性ヲ知り得ベキノミ。

第十三章 震 盪

震盪トハ衝突外傷ノ意ニシテ、病理解剖的機轉ヨリモ、寧ろ原因的要素ニ屬シ、重劇ナル外傷及手術ヨリ、直ニ呼吸及心臓運動ノ広痺ヲ来シテ、短時間中ニ死スルモノ是ヲ震盪ト稱ス。此際時ニ出血等ヲ認ムル事無ク、手術又ハ外傷ノ各機轉的刺戟ニヨリテ、反射性ニ心動及呼吸ノ広痺スルモノナリ、故ニ震盪ヨリニ反射性広痺ト云フ。

震盪ハ屢々腹部手術ノ際発起スルモノニシテ、此際腹膜ハ炎症ヲ発起スルヲ容セズ、而シテ患者ノ是ガ為ニ死ニ陥ルハ、既ニ其心臓ノ健康ナラザル結果、容易ニ反射性広痺ヲ来スニ因ル事多シ。

震盪ハ手術、或ハ外傷後直ニ発起スルモノニシテ、既ニ時日ヲ経過セルモノアリテハ、震盪ヲ発スルノ憂無シ。

震盪タル事ヲ診定スルニハ、須ク左記ノ要件ニ注意セザルベカラズ。

(A) 重症ノ外傷ニシテ、毫モ直接ニ神経系ニ作用スル事ナク、且著明ナル出血無キ時。

(B) 外傷部以外ノ諸臓器ハ、全ク常態ニシテ、且ツ生活ニ須要ナル臓器ノ病理解剖的変化ヲ呈セス、忽然呼吸及心臓ノ痺ノ症状ヲ究スル時。

上記ノ如ク震盪ハ全ク、反射性ニ生ズル官能的障礙ナルカ故ニ、死後ノ解剖的所見ハ陰性ナリ、然レドモ生体ニ於テハ、其症状顯著ニシテ、其原因及症状ニ注意スレバ、是ヲ診定スルハ決シテ困難ニ非ザルナリ。

震盪ハ重篤ナル病理解剖的機轉ニ併発スル事アリ、化膿性腹膜炎ニ於ケルガ如キ其好例ナリ、抑々細菌ヨリ生ズル炎症性疾患ニ任テハ、其細菌毒ノ血液ニ混ジテ、心臓ニ作用シ、以テ是ヲ広痺トシムルモノナレドモ、決シテ急劇ノ経過ヲ取ル事無シ、彼ノ化膿性心囊炎、肋膜炎ノ如キ數週間ニ亘リテ、心臓運動ノ広痺ヲ招致スル事無キモ、同一ノ漿液膜疾患タル化膿性腹膜炎ニアリテハ、甚ダ急速ニ心臓ノ廣痺ヲ換起スルヲ見ル、蓋シ此ノ腹部分手筋ヨリ急ニ心臓ノ廣痺ヲ発スルノ事實ヲ顧レバ、腹膜炎於ケル炎症性変化ノ利戟ハ、反射性ニ心臓及呼吸ノ廣痺ヲ承シ以テ急速ニ、死ヲ惹起スル事疑ヒヨ容レザルナリ。

第十四章 意識障礙、譫妄、痙攣

數多ノ疾病ハ意識障礙ヲ承スモノニシテ、或ハ病理解剖的変化ニ因テ、発スルモノアリ、或ハ化學的毒物作用ニ因スルモノアリ、又全ク純然タル官能障礙トシテ発起スル事アリ、故ノ數多ノ精神病者ニ認ムル意識障礙ハ、後者ニ屬スルモノナリ。

抑々意識ハ大腦皮質ニ占居シ、知覚神経及五官神経ノ媒介ニ依テ、萬象ヲ感覺シ、是ヲ認知スルモノナリ、故ニ若シ腦皮質ニシテ病変ノ存シテハ、意識ハ明瞭ヲ失キ、從テ精神障礙ニ陥ラザル能ハズ、而シテ其障礙ノ程度ニ至ツテハ、輕重程度ニシテ一定セズ。

(A) 意識ノ瀕濁、或ハ昏睡 トハ輕度ナル意識障礙ノ謂ヒニシテ、患者ハ他ヨリ容易ニ醒覺セラル、モ、稍々重症ニ於テハ、忽チ患者ハ再び睡眠ニ陥リ、周圍ノ状態ニ關係セズシテ、永ク熟眠ノ状ヲ採流スルモノナリ。

(B) 意識消失、或ハ昏睡 是レ重篤ナル精神中樞ノ、病的状態ノ下ニ発起スルモノニシテ、患者ノ意識ハ全ク消失シテ、醒覺スル事ナク、毫モ外界ノ利戟ニ感應セズ、反射機能全ク消失ス。

昏睡ハ時ニ腦出血ノ場合ニ、容易ニ證明スルヲ得ベシ、即然然腦動脈ノ破裂ニ (67)

由リ、溢出シタル血液ハ、附近ノ脳組織ヲ破壊侵蝕シ、突然意識消失ヲ惹起ス、
又腦動脈ノ栓塞ニ於テモ、出血ト同ジク着明ナル精神障礙ヲ発起ス、蓋シ心臓
瓣膜病ヨリ栓子ガ動脈血行ニ、乘ゼラレテ腦ニ達シ、突然該動脈ノ内腔ヲ栓塞
スル結果、栄養阻害セラレ、從テ着明ナル意識障礙ヲ発起スルモノナリ、其他
腦膜炎、殊ニ大脳皮質ニ密着セル、蜘蛛膜ノ炎症ヲ発起シ場合ニハ、精神障礙
ノ現ル、事着明ナリ。

又頭蓋腔ニ液体ノ蓄積セシ際、時ニ腦水腫ニ於テ精神障礙ヲ発ス。
其他全ク腦以外ノ疾病ヨリモ、著シキ精神障礙ヲ起発スル事アリ、茲ノ腎臟病
ニ於テ、身体ノ有害物質ノ排泄下充分トナリ、該物質ガ血液中ニ蓄積シ、腦皮
質ニ作用シテ、発スル精神障礙、痙攣及糖尿病ニ於ケル重篤ナル自腫、又黃疸
ノ際、膽汁酸塩ガ血液ニ混ズルヨリ発スル、意識障礙、皆是ニ屬ス、又慢性鉛
中毒及諸般ノ化学的物質ニ精神障礙ヲ発起シ得ルモノナリ。
癲癇(原發性癲癇)ハ痙攣ヲ伴ヘル、固有ナル失神発作ナリト雖モ、其因ヲ未
ル病理解剖的、並ニ化学的物質ハ未ダ明ナラズ、蓋シ腦皮質ノ官能障礙ニ因入
ルモノナラン。

上記ノ如ク精神障礙ハ、諸般ノ疾病ニ発スルモノニシテ、必ズシモ常ニ特異ナ
ル腦疾患ニ非ザルアリ。
譫妄トハ意識濁濁ノ一種特別ナル形成ニシテ、此際患者ハ錯乱及騒乱状態ヲ呈
シ、常ニ喃喃タル不明ノ嚙語ヲ発スル事アリ(譫語性精神錯乱)或ハ運動不穩
トナリ、突然牀上ニ跳起シ、甚ダシキハ室内ヲ乱躍スル事アリ(癡狂性精神錯
乱)。
譫妄ノ原因ハ精神障礙ノ場合ト同ジク、腦皮質ノ病理解剖学的変化、或ハ化学
的物質ノ作用ニヨリ、又純然タル官能障礙ニ因テ惹起ス、而シテ、是ガ種発ス
ルモノハ左ノ如シ。
(1) 精神病、(2) 頭蓋腔内ノ疾病、(3) 発熱時、即熱発間及解熱期、(4) 貧血、虚脱、
飢餓、衰弱、腦ニ於ケル下充分ナル血行(貧血性譫妄)、(5) 傳染病(肺炎、コナフ
ス、丹毒)、(6) 中毒(慢性鉛中毒、慢性「アルコール」中毒)。
譫妄ハ通常急性ニ発シ、且多クハ一時的ノモノニシテ、其干後必ズシモ不良ナ
ルモノニ非ズト雖モ、譫妄性精神錯乱症ハ、頗ル重篤ニシテ、從テ干後ノ善良
ナラザル事多シ。

痙攣トハ自己ノ意識関係ヒスシテ、発スル筋肉ノ収縮状態ヲ云フ、而シテ其痙攣ノ収縮ニヨリ、左ノ如ク區別ス。

(A) 間代性痙攣 是一定ノ間歇ヲ隔テ交代性ニ発スル、迅速不規則ナル筋肉ノ収縮ヲ云フ。

(B) 強直痙攣 筋収縮ノ一定時間持続スルモノニシテ、此状態ニアル筋肉ニ觸ルレバ頗ル硬固トナリ、例ニ頸部前肉強直ニ於ケルガ如シ。

痙攣ノ原因ハ種々ニシテ、或ハ中枢ノ疾患ニ由テ発スル事アリ。或ハ反射性ニ惹起スル事アリ、又ハ毒素ノ作用ニヨリ是ヲ来ス事アリ（尿毒症、脂血症）、痙攣ハ直後致死ノ原因トナリ得ルモノニシテ、死ノ来ルマ通例左ノ如キ原因ニ基ク。

(1) 窒息 呼吸筋痙攣ニ陥ルマ、該前肉ハ最早全ク動作ヲナス能ハズ、從テ呼吸運動衰絶シテ、窒息死ニ陥ラザルヲ得ザルナリ。

時ニ種々誤ムルハ声門痙攣ニシテ、此際声門部ヲ支配スル喉頭前肉ハ、強度ナル痙攣ニ陥リ、声門ハ突然閉塞シテ、空気ノ流通ヲ許サズ以テ窒息ヲ招来スルモノナリ。

(6) 循環障礙 若シ強キ全身痙攣ガ短時間歇時ヲ置キ、流時反覆スル時ハ、心臓衰弱ヲ来シ終ニ死ニ陥ル。

(C) 中枢神経系ノ麻痺 既ニ述ベタルガ如ク、重症ナル全身痙攣発作ハ意識ノ消失ヲ併発スルモノニシテ（癲癇、子痲、尿毒症）、此際痙攣ノ屢々反覆スル時ハ、其発作間歇時ト雖モ、意識ハ再恢復セズ、遂ニ死ニ終ル事アリ、時トシテハ痙攣ノ二三ノ筋群、或ハ單一筋ノミニ限局スル事アリ、例ニ虎列刺ニ於ケル膝筋、如キハ、或ハ直接作用ニヨリ、或ハ反射性ニ惹起スルモノニシテ、此際患者ハ自覺的ニ牽引性ノ疼痛ヲ感スルモノナリ。

第十五章 疼痛

疼痛ハ臨床ニ甚ダ頻ニナル症状ニシテ、殊ニ神経痛ノ如キモノニアリテハ、是ヲ其唯一ノ徴候トナス、而シテ諸般疾病ニ於ケル疼痛ノ度ニ至リテハ、或ハ僅微ニシテ、殆ト是ニ注意セザル事アリ、或ハ重劇ニシテ堪ニベカラザルモノアリ、又其性質モ種々ニシテ、或ハ鈍ナルアリ、或ハ穿ツガ如キアリ、或ハ裂クガ如キアリ、或ハ刺スガ如キアリ、而シテ身体中殆ト是テノ組織器ハ軟骨ヲ

除クノ後ハ、疼痛ヲ発スルモノニシテ、筋肉ノ痙攣ノ如キモ、是ヲ疼痛トシテ
感スルモノナリ。

神経痛ハ實ニ知覚神経ノ疾患ナリ、然レドモ其解剖的変化ハ、未ダ證明セラレ
ズ、故ニ神経痛ナル語ハ症候的ナリト知ルベシ。

神経痛中特ニ著明ニシテ、且劇シキモノハ三叉神経及坐骨神経ニ於テ是ヲ見ル。
内臓ノ神経痛モ多種々ノ臓器ヨリ発ス、頭痛ハ硬腦膜ニ分布スル知覚神経ノ刺
戟性興奮ヨリ発スルモノニシテ、腦疾患ニ於ケルノミナラズ、又胃腸病、熱性
傳染病等ニ於テ是ヲ未スモノナリ、其原因タルハ實ニ種々ニシテ、腦病ニ於テ
ハ其充血、或ハ貪血等ガ一ノ刺戟トナリ、又ハ腦ニ於ケル腫瘍及炎症性滲出物
等ノ、直接ニ刺戟スルニ因リ、又傳染病、消化器病等ニ於テハ、血液中ニ吸收
セラレタル細菌毒、或ハ異常ノ化學的物質等ノ直接、或ハ間接ニ作用スルヨリ
発スルモノナリ。

疝痛トハ腸ニ生スル、発作性高度ノ疼痛性痙攣及一般ニ重劇ナル疼痛発作
等ノ如シヲ云フ。
急性關節廣質斯ハ病理解剖學上、漿液纖維素性關節炎ト稱セラレ、關節ハ強

ク充實腫脹シ、其周圍部モ炎症ヲ呈シ、高度ノ疼痛ヲ発ス、然レドモ疼痛ノ由
テ来ル理由ニ至リテハ、未ダ明カナラス、何トナレバ同ジク關節ノ炎症ヲ発起
スル也ノ疾患、例之結核性關節炎ニ於テハ疼痛ヲ来ス至殆ド無ケレバナリ、是
ニ因テ之ヲ觀レバ、傳質斯ニ於ケル疼痛ハ、其關節腔ノ炎症ニ強實ノ充實ヲ
来シ、若クハ病原及其代謝性産物ノ作用ニ因テ発起スルモノナラン、ソハ史モ
急性關節廣質斯ニ於テハ、疼痛ハ甚ダ頻繁ナル症状ニシテ、是ニ因テ容易
ニ痙攣セル關節ヲ看出スルヲ得ベシ。

心臓病ニ伴フ如ク心胸部疼痛ナルモノハ、心臓部ニ劇甚ナル疼痛ヲ発シ、延テ
左上肢ニ放散スルモノニシテ、発作性ニ来リ、其際患者ノ顔貌ハ蒼白色トナリ、
苦悶ノ状甚ダ顯著ナリ、而シテ是ヲ未スモノハ、主トシテ丘心室ノ疾患ニシテ、
就中心冠狀動脈及是ニ絶発スル心臓間質炎ナリトス、然レドモ疼痛発作ニ由テ
起ル原因ガ果シテ、丘心室ノ痙攣性、若クハ痙攣性状態ニ行スルヤ、否ヤハ未
ダ確實ナラズ。

第十六章 呼吸困難

呼吸道、例之喉頭、氣管等ニ於テ、痙攣收縮若クハ、腫瘍ノ如キモノヲ発生シ、其管腔狹窄スルニ至レバ、通常呼吸ニ由ラハ、最早完全ニ空氣ヲ吸入シ能ハザルヲ以テ、是ヲ補償センガ爲、呼吸ノ形式変化シテ、一種ノ矯正的狀態ヲ呈スルヲ見ル、斯ノ如ク特異ナル呼吸型ヲ稱シテ、呼吸困難ト名ク、此場合ニ於テハ呼吸補助筋モ興奮努力シ、呼吸大ニシテ、其深サヲ加ヘ、斯クシテ肺臓内ニ産スル、空氣ノ量ヲ増加シ以テ漸ク瓦斯交換作用ヲ營為スルモノナリト雖モ、氣道狹窄漸次増加シ、矯正の呼吸ヲ以テスルモ、尚空氣ノ吸入不充分ナルニ至レバ、遂ニ窒息ノ末ヲザルヲ得ズ、而シテ如上ノ場合ニ於テ肺臓内ニ出入スル空氣ハ、大ナル勢ヲ以テ氣道狹窄部ヲ通過スルガ故ニ、遠隔シテ尚獲取シ得ベキ、所謂狹窄音ヲ発スルモノナリ。

抑々吾人ガ完全ナル常態呼吸ヲ營為スルニハ、左記器官ノ作用、又常態ナラザルベカラズ、即チ
(A) 呼吸氣道 時ニ喉頭、氣管、氣管枝等ハ毫モ障礙無ク、空氣ヲ出入セシメザルベカラズ、又肺臓ハ空氣ヲ受容シ、血管ト瓦斯交換ヲ營マンガ爲、全ク空虚ナラザルベカラズ、若シ上記ノ要件ノ下ニ障礙ヲ承ス時ハ、所謂呼吸困難ヲ惹

起ス、故ニ肺臓ノ滲出液ヲ以テ充實セラレ(肺炎)、或ハ氣管枝加答兒ヲ生ジ、分泌液ヲ以テ其内容ヲ充塞セラル、時ハ、怒責的呼吸ヲ要スルマ、自然ノ理教ナリトス。

(B) 循環器ノ作用整調ナルヲ要ス 心臟右室ハ末梢靜脈ヨリ還流シテ未ル血液ヲ受ケテ、是ヲ肺臓ニ向テ射出シ、而シテ左心房ハ肺臓ヨリ歸流スル血液ヲ受容ス、血液ハ此兩者ノ間、即肺毛細管ヲ通過スルニ際シ、肺臓壁ヲ隔テ、外氣ト接觸シ、以テ瓦斯交換作用ヲ營為スルモノナリ、而シテ此際心臟ヨリ肺内ニ送付スル、血液ノ容積ト肺臓内ニ産スル空氣容積トノ間ニハ、一定不変ナル比例ノ存スルヲ要ス、此兩者ノ比例ハ呼吸數ト脈搏數トノ対照ニ因テ表示セラル、モノナリ。

上述ノ如クナルヲ以テ、呼吸機能ニ毫モ障礙無ク、空氣充分肺臓内ニ産セシ際ト雖モ、若シ心臟ヨリ未ル血液ノ容量充分ナラザル時ハ、從テ瓦斯交換作用完全ナル能ハズ、故ニ心運動ノ障礙アル時ハ、是ヲ矯正センガ爲ニ、呼吸困難、所謂七臓性呼吸困難ヲ惹起スルモノナリ。

肺臓内ニ流入スル血液ハ、愈ニ其量充分ナルヲ要スルノミナラズ、又赤血球ノ

校正等ナラザルベカラズ、赤血球ハ肺毛細管内ニ於テ、酸素ヲ攝取シ、是ヲ組織ニ運搬スルモノナルガ故ニ、赤血球ノ數減少スルカ、或ハ其數ニ於テ変動ヲ見ザルモ、酸素トノ結合力減退消失スルニ至レバ、呼吸器及心臟作用完全ナリト雖モ、呼吸困難ヲ惹起スルニ至ル。

彼ノ出血及血液病、並ニ塩酸如里、酸化炭素中毒等ニ於テ発スル、呼吸困難ハ、蓋シ這般ノ理由ニ基因スルモノナリ。

又肺動脈ニ於テ突然タル栓塞ヲ来ス時ハ、肺臓内ニ血液流入スル事能ハザルヲ以テ、迅速且高度ナル呼吸困難ヲ発ス。

(C)筋力ノ強盛ナルヲ要ス 抑々呼吸運動ハ、筋運動ノ一種ナルヲ以テ、若シ呼吸ヲ営為スルニ須要ナル筋力ニシテ、其運動ヲ遂行シ能ハザルニ至レバ、從テ呼吸機能ヲ未サザルベカラズ、而シテ是ヲ惹起スル原因頗ル多ク、痙攣、全身ノ痙攣等ハ筋力ヲシテ、高度ノ痙攣直ニ陥ラシムルノ結果、其運動ヲ営ムニ由タク、遂ニ呼吸ノ停止ヲ惹起スルモノナリ、其他癲癇発作、或ハ尿毒性発作ノ場合ニ於テモ、同様ノ理由ノ下ニ窒息死ニ陥ルニ至ル事アリ。

進行性筋萎縮症ニ於テ、漸次呼吸筋ニ至ル迄、萎縮蔓延スルニ至レバ、先ツ呼

吸困難ヲ発シ、遂ニ窒息ヲ来スベシ。

(D)神経系 呼吸中枢ハ延髄ニ存在シ、血液中ニ於ケル炭酸瓦斯ノ刺激ニヨリテ、適度ニ興奮シ、以テ呼吸ヲ営為スルモノナリ、而シテ此中枢ノ興奮性ヲ促進シ、或ハ抑制スル反射運動神経アリ、此等ノ神経ハ特ニ迷走神経内ヲ通過スルヲ以テ延髄、或ハ迷走神経幹ニ及テテ、呼吸モ從テ其影響ヲ受ケザル能ハズ、故ニ延髄障害ハ呼吸困難ニ次グ窒息ヲ以テ終リ、亦四腦室ニ寄生セル囊蟲ノ呼吸ヲ障碍シテ、死ヲ惹起スルハ、蓋シ自然ノ結果ナリ。

(E)腹部臓器モ又呼吸ニ向フテ関係ヲ有ス 腹腔内ヲ刺激ナラシムル腫瘍、滲出物等ハ下方ヨリ横膈膜ヲ压迫シテ、其運動ヲ妨ケ、呼吸困難ヲ発シ、又腹部ニ疼痛アル者ハ、是ヲ避ケンカ為メ呼吸ノ抑制ニ努力スルノ傾向アリ。

呼吸状態ハ是ヲ區別シテ、左ノ數種トナス。

(1)安靜呼吸 其名ノ如ク、呼吸機能ニ、毫末ノ異常ヲ認めズ、全ク安静ノ状態アルモノニシテ、通常健康人ニ於テ是ヲ見ル。

(2)無呼吸 呼吸ヲ営ムベキ必要ノ行セザルニ際シ、見ル處ノモノニシテ、例之母体内ニ存スル、胎児ニ於ケルガ如シ。

(一) 呼吸困難 既 = 前章 = 詳述シタリ。

(二) 假死 此状態ニアルモノハ、呼吸ハ全ク廃絶シ、毫モ其作用ヲ管マズ、只僅ニ心臓ノミ運動ヲ保持セルモノナリ、故ニ患者ハ外觀上、恰モ死スルガ如シ、是レ其ノ来ル所以ナリトス。

(三) 呼吸迅速 呼吸数甚ダシク増加スルモノナリト雖モ、器質的ニハ毫モ変化ヲ認メザルモノナリ。

(四) 窒息及喘息 害因漸次加ハリ、諸種ノ矯正的呼吸モ其効無ク、終ニ瓦斯交換不能ノ下ニ至ルヲ窒息ト云ヒ、喘息トハ持ニ発作性ニ気管枝壁ノ痙攣性収縮ヲナシ、分泌又増加シ、其内腔狭窄シテ、空気ノ出入毎ニ一種ノ狭窄性喘鳴ヲ発スル、状態ニアル呼吸困難ヲ云フ。

既ニ述ベタルガ如ク、吾人が種々ノ害因ニ因テ、常態呼吸ヲ営ムニ有利ナラサル時ハ、是ヲ矯正シテ其型式ヲ変化セシメ、以テ出未得ル限り瓦斯交換ノ完璧ヲ期スルモノナリ、即(一)呼吸数ハ増加シ、(二)呼吸ノ深サヲ増シ、数多副呼吸前ノ助力ヲ借りテ、著シク呼吸ヲ深長ナラシメ、(三)呼吸式モ変化シテ、或ハ胸式ヲ主トシ、或ハ腹式ニ偏スルニ至ル。

如斯呼吸運動力臨機應変ノ変化ヲ生スル所以ノモノハ、要スルニ自然ノ妙機ニ外ナラス。

呼吸困難ニ於テ特ニ吸氣ノ障礙セラル、ヲ、吸氣性呼吸困難ト云ヒ、之ニ反シ呼氣ノ障礙ヲ主トスルモノヲ、呼氣性呼吸困難ト云フ、例之声門上部ニ於テ、声帯ニ可動性コホリーブルノ生ゼシ際ハ、毎吸氣時ニ、該コホリーブルハ空氣流入ノ急動カサレテ、声帯内ニ嵌入シ、是ヲ嵌塞ナラシメ、以テ吸氣性呼吸困難ヲ発スルモ、呼氣ノ際ハ該コホリーブルハ、声門外ニ翻轉セラレ、空氣流通ニ対シテ、毫モ障礙ヲ及ボサバカ故ニ、呼氣性呼吸困難ヲ発スル事ナシ、是ニ反シ声門下部ニコホリーブルノ存スル時ハ、主トシテ呼氣性呼吸困難ヲ起スベシ、其他喉頭ノ格魯布ニ於テハ、主トシテ吸氣性呼吸困難ヲ惹起シ、肺氣腫ニアツテハ、吸氣ハ困難ナラスシテ、單ニ呼氣時ニ於テノミ困難ヲ認ム、蓋シ生理的呼吸作用ハ、呼吸筋ノ作用ニ依リテ行ハル、ハ勿論ナリト雖モ、呼氣時ニハ肺臟自己ノ彈力又與テカアルガ故ニ、肺氣腫ニ於テ肺胞壁ノ彈力盡盡ハ消耗シ、從テ肺臟ノ彈力ハ減退乃至消失スレバ、呼氣ヲシテ困難ナラシムルモノナリ。

又氣管枝喘息 = 於テハ、氣管枝前ノ收縮、或ハ血液ノ滲出 = 由テ、中等大及小
氣管枝ノ狭窄ヲ示シ、主トシテ吸気性呼吸困難ヲ惹起ス。

心臓病 = 於テハ吸気時及呼気時共ニ、呼吸困難ヲ発ス、是肺循環區域ニ靜血アリテ、呼吸面積ヲ狹隘ナラシムル結果、吸気呼気ニ關ヒズ、常ニ其障礙ヲ示シ、所謂混合性呼吸困難ヲ発スルモノナリ。

上述ノ如ク吾人ハ、呼吸困難 = 於テ、吸気性、或ハ呼気性呼吸困難ヲ談クト雖モ、必ずシモ絶對的其一方ノミニ偏スベカラズ、蓋シ呼気、或ハ吸気ノ一ガ時、純性高度ノ障礙ヲ発起セシ場合 = ハ、蓋シ他ノ一方 = モ影響ヲ及ボスニ至ルガ故ナリ、然レドモ臨床上呼吸困難ヲ診スルニ當ツテ、呼気或ハ吸気ノ何レガ特ニ困難ナルヤヲ究ムルハ頗ル要用ナリ、是其病因ノ診斷及治療ニ大ナル關係ヲ有スレハナリ。

臨床上吾人ガ患者ノ胸部ヲ診スルニ當リテハ、先ツ視診ヲ行ヒ、呼吸時ニ於ケル患者ノ胸壁ノ運動ニ注意スルヲ要ス、諸般ノ肺疾患 = 在リテハ、胸部ノ全部平等ナル呼吸運動ヲナスモノ = 非スシテ、胸部ノ一局處、即チ或ハ胸部ノ半側、或ハ胸部ノ上部、或ハ下部ニ於テノミ其運動ヲ認ムルノミ、例之一側ノ肺全部

ノ炎症 = 罹ル時ハ、同側ノ胸部ハ呼吸運動ヲ営マズ、又一側ノ肋膜腔内 = 多量ノ滲出液ヲ充ス時モ、又同様ナリ。

左右兩肺ノ上部ヲ胃セル肺結核ニアツテハ、胸部ハ其下部ノミ運動シ、是ニ反シテ腹腔内ノ大ナル腫瘍、或ハ多量ノ滲出液ノ存セル際 = スル時ハ、横隔膜ハ胸腔内ニ圧上セラレ、從テ肺下部ハ其圧迫 = 由テ運動ヲ阻害セラレ、又一側ノ大氣管枝 = 於テ、高度ノ狭窄ノ存スル際 = 於テハ、同側ノ呼吸運動全ク癡絶セラル、ニ至ル、小兒 = 在テハ其呼吸道 = 差度ノ狭窄ノ生ズルヤ 声門水腫或ハ其的 呼吸、殊ニ一様特異ナル現象ヲ呈ス。

抑々吸気時 = ハ氣道狭窄ノ為、空氣ハ速ニ且、充分肺臟内ニ進入スル能ハズ、是ニ胸腔内 = 著明ナル陰圧ヲ生ズルモノナルガ故ニ、小兒 = 於ケルガ如キ柔軟ニシテ、且屈靱性 = 富ム、所謂呼吸性陷没ヲ呈ス、是ヲ名ツケテ轉倒性呼吸ト云フ、シマイネストークス呼吸ハ通常、重症患者ノ既ニ昏睡狀ヲ呈セル際認ムルモノニシテ、即延體 = 於ケル呼吸中枢ハ著シク興奮性ヲ減シ、最早血液中ニ存スル、尋常ノ炭酸量ニテ興奮セザル = 至リ、終ニ一時的呼吸中絶ヲ見ル、茲ニ於テカ血液中ノ炭酸含量増加セザル能ハズ、血液中ノ炭酸ノ量著シク増加スレ

バ、全ク興奮性ノ廢絶セザル呼吸中樞ガ制戦セラレテ、再び呼吸運動ヲ惹起シ、
瓦斯交換ヲ營爲ス、瓦斯交換行ハレ血液中心炭酸含量一定度迄消退スル時、最早
延髄中樞ヲ興奮セシムルニ足ラズ為ニ、再び呼吸ノ中絶ヲ見ル、斯クノ如ク屢
々反覆スルモノニシテ、呼吸漸次浅表トナリ、終ニ全ク中絶シ、半分時或ハヨ
リ以上ハ、全ク無呼吸ノ状態ニ留リ、次テ徐々ニ浅表ナル呼吸ヲ始メ、次第ニ
其深サヲ加ヘ、呼吸速迫ノ状ニ陥リ、暫時ノ後、更ニ浅表ナル形ニ交ジ終ニ停
止スルモノナリ、上記ノ如キ現象ハ患者ノ最も重態ナルヲ示スモノニシテ、死
ノ前驅トモ認ムベキモノナリトス。

熱発ハ呼吸数ヲ増加セシム、蓋シ熱ハ呼吸中樞ヲ直接ニ制戦シテ、其増加ヲ促
スモノニシテ、故ノ肺炎ニ於テ呼吸数ノ著シク増加スルハ、肺臓自己ノ疾患ニ
因スルヨリモ、寧ろ是ニ伴フ高熱ニ因由スルモノナリ、何トナレバ体温ノ介相
直後ニ於テハ、肺組織ハ尚滲出液ヲ充塞セラルニ拘ラズ、呼吸数ノ速ニ減少ス
ルヲ以テ是ヲ知ルベキナリ。

第十七章 脈搏

數多ノ動脈、例之鬚脈、桡骨動脈、股動脈、頸動脈等ヲ觸ル、ニ心臓ノ收
縮時ニ當リテ、著明ナル搏動ヲ感ズ、是レ所謂脈搏ニシテ、疾病殊ニ循環系統
ノ疾患ヲ診スル上ニ於テ、極めて重要ナル意義ヲ有スルモノナリ、抑々動脈壁
ノ弾力性ハ、血液循環ヲ促進スルモノニシテ、脈搏ノ発現スルマ、動脈ハ容易
ニ擴張シ、次テ自己ノ彈力ニ因テ再び收縮シ、以テ血液ヲ不稍ニ向テ驅逐ス、
故ニ若シ動脈壁ノ疾患ニシテ、其彈力性ノ減スル時ハ、血液循環ハ遲滯ニ陥ラ
ザル能ハズ。

然ル時ハ是ヲ平均シテ、通常ノ如ク循環ヲ完成センガ為ニハ、心臓ハ大ナル努
力ヲ要ス、爰ニ於テ七臓ハ遂ニ、代償性肥大ヲ惹起スルニ至ル。
而シテ動脈壁ノ彈力性ヲ減少スル疾病ノ主ナルモノハ、所謂動脈硬化症及「ア
テローム」様及性ニシテ、多クハ四十才以後ニ始ル、而シテ其来ルマ或ハ斑状
状、或ハ竈状ヲ為シ、主トシテ大動脈ヲ侵スモ、又中等大ノ動脈ニ乘ル事稀ナ
ラス。

臨床ニ動脈硬化症ヲ診スルニ當リテハ、須ク其病的変化ノ波及セル廣表ヲ診知
スベキナリ、然リト雖モ生活体ニ於テ身体凡テ、硬化ヲ滿知スルハ、不可能ニ

属スルガ故ニ、吾人ハ二三ノ動脈、或ハ軍ニ腕骨動脈ノ觸診ヲ以テ、満足セザルベカラズ、然リト雖モ茲ニ銘記スヘキハ、軍ニ一局如ク動脈ノ変化ヲ以テ、身体凡テノ動脈ノ変化ヲ推知シ能ハサル事是ナリ、即腕骨動脈ニ硬化ノ存スル際ト雖モ、忒ズシモ同時ニ同世ノ動脈、例ノ大動脈、腦動脈、腎動脈等ニ硬化症ノ存スルモノニ非ズ、又椎骨動脈ニ変化ヲ見サルニ、同世ノ動脈ニ硬化ヲ認ムル事アリ。

通南斯道家ニシテ、檢脈ノ際腕骨動脈ニ着明ナル硬化症ノ存スル時ハ、同世ノ動脈ニモ等シク硬化症ノ存スルモノト速断スル事多シト雖モ、病理解剖學的所見ニ徴スルニ、同世ノ動脈ニ於テ毫モ硬化ノ存セザルハ、屢々発見セラル、如ナルヲ以テ、動脈硬化症ノ断定ヲ下スニ先立ツテ、須ク數多ノ淺任動脈ヲ檢スルト共ニ、心臟部ノ精診ヲモ怠ルベカラズ、而シテ此際決任動脈ノ硬化ヲ觸知シ、且七臟部ニ於テ、左心室ノ肥大及拡張ノ存スル時ハ、大動脈ニ於テモ硬化症ノ存スル事ヲ断定スルヲ得ベシ、脈搏ハ一ノ生理現象ナルガ故ニ、病理解剖學的ニ是ヲ證明スル能ハザルノミナラズ、既ニ死屍ニ於テハ、其動脈ハ死後強直ニ因ツテ縮少シ、其内容ヲ毛細管及靜脈内ニ驅逐シ、全ク空虚トナルヲ以テ、

生前ニ存在セシ動脈ノ充實狀態ハ、最早判断スルヲ得ズ、是ニ反シ動脈壁自己ニ変化ノ存在スル疾患、即動脈硬化症及「アテローム」様變性ノ如キハ、解剖上適確ニ是ヲ認知シ得ルモノナリ。

今茲ニ液体ヲ充實セル單純ナル、彈力管アリト假定センニ、其管壁ノ緊張度及硬度ノ強弱ハ、該管ヲ充實セル液体ノ量ニ正比ス、即其内容少量ナル時ハ、該管壁ノ緊張少ク、是ヲ觸ル、ニ軟ニシテ弛緩ス、是ニ反シ其内容多量ナルニ際シテハ、其管壁ハ強ク緊張シ、是ニ觸ル、ニ硬固ナルモノナリ、然リト雖モ吾人生活體ニ於ケル動脈ハ、彼ノ單純ナル彈力管ニ於ケルト其軌ヲ同ジクセズ、即動脈ニアリテハ自ら収縮力ヲ有スルモノナルガ故ニ、其内容ノ僅微ナル際ト雖モ、尚克ク収縮シ、是ニ觸ル、ニ硬固ノ感アラシム、而シテ其硬固ノ度ハ、緊張セル血管ノ彈力性ヨリモ、寧ろ収縮性ノ如何ニ關スルモノナリ、故ニ生活體ニ於ケル動脈管ハ、其内容ノ充實ト、其硬度トハ忒ズシモ常ニ、並行スルモノニハ非ザルナリ。

古代ヨリ脈搏ハ疾病ノ予後ヲ推定スルニ當ツテ、觸ル重要視セラレタルモノナリ、而シテ次ノ如キ性状ヲ有スル時ハ、病者ノ予後ノ重篤ヲ指示スルモノナリ、

即ち(1)頻数、(2)不正、(3)幽微、是レナリ。

臨床上述三者ヲ併発スレバ、既ニ心臓衰弱ヲ示セル證ニシテ、生命ノ危殆ニ迫レルノ證タルナリ。

抑々脈搏ハ血液ヲ充塞セル動脈管ヨリ起ル現象ナリト雖モ、而モ諸種ノ臟器ヨリ着シク影響ヲ受ケ、其数及性質ニ変化ヲ来スモノナリ、即左ノ如シ。

(A)心臓ハ脈搏ニ重要ナル關係ヲ有ス、即心臓左室ノ運動強弱ナルニ從ツテ、脈搏ハ愈々強ク、是ニ反スル時ハ、從テ脈搏モ微弱ナリ。

(B)血液ノ状態ニ關ス、即血液量減少スレバ、脈搏ノ発生ヲ見ザルカ、或ハ甚ダ微弱ナリ、又血液内ニ毒物ノ存在スル場合ニハ、該毒物ハ心臓前肉、或ハ動脈壁ニ影響ヲ及ボシ、脈搏數ニ変化ヲ来ス、例之彼ノ黃疸ノ場合ニ於テハ、血液内ニ膽汁酸塩ノ混和セラレ、為メ、心動着シク緩徐トナリ、從テ脈數ハ減少スルガ如シ。

(C)血管壁ノ彈力性收縮性及疾患ハ、脈搏ニ對シテ至大ナル影響ヲ有ス。

(D)神経系モ又脈搏ニ對シテ作用ヲ及ボス、而シテ心臓運動ニ對シテ特ニ著明ナル影響ヲ有スルモノハ、迷走神経及交感神経ナリ、迷走神経ハ心臓運動ヲ抑制

スル作用ヲ有シ、交感神経ハ是ニ反ス、故ニ今日シ迷走神経ノ強弱中ニ於テ新生物、或ハ腫大セル腺等ノ為ニ压迫セラレ、产痺ニ陥ル場合ニ於テ、心運動著シク増進シ、從テ脈搏ハ増加ス。

或ハ又迷走神経ノ中樞ガ刺激セラレ興奮スル時ハ、心運動緩徐トナリ脈搏從テ減少スベシ、然レドモ刺激久時永続スル時ハ、遂ニ疲勞シ产痺スルヲ以テ、心運動ノ促進スルメ論ヲ俟タズ、斯ノ如キハ腦膜炎等ニ於テ認ムル如シテ、即腦膜炎ニアリテハ其渗出液ニ因リテ、腦圧ハ亢進シ為ニ、迷走神経中樞ハ興奮シ、心運動ヲ遲緩ナラシムト雖モ、發汗モナク該中樞ハ产痺ニ陥ツテ、心動増加シ、從テ脈搏著シク迅速トナル。

上述ノ如ク脈搏ハ愈ニ、循環系ノ疾患ヲ表示スルノミナラズ、諸多臟器疾病ノ必要ナル表徴タルガ故ニ、實地上脈搏ノ検査ハ精細ナルヲ要ス、故ニ今脈搏ノ性状ニ就キ是ヲ略述セン。

(一)脈搏 健康ナル大人ニ於テハ、平均一分時ノ脈數七十二搏ヲ算スルモノナリト雖モ、種々關係ノ下ニ増減ス、即七筋並ニ、七筋ヲ栄養スル心冠狀動脈ノ状態、神経系統ノ疾患等諸種ノ關係ニ依テ、一様ナラス、又熱ハ脈數ヲ増加スル

性アリ。

(一) 脈搏ノ正整 生理的ニハ高齢者ニ於テ、屢々不正トナルモノナレドモ、病的ニ於テハ年齢ニ関セズ、心筋及神経中樞ノ疾患等ヨリ脈搏ノ不正ヲ示ク。

(二) 脈搏ノ速度 生理的ニハ心収縮シテ、血液ヲ動脈管内ニ射出スルマ、其際動脈壁ハ、其進入シタル血液ノ為、一定衝動所謂脈搏ヲ発起スルモノニシテ、種々原因ハ此衝動ノ状態ニ変化ヲ示スモノナリ、即脈波ノ発現ニ當テ、動脈管壁ノ弛張及収縮ハ徐々ニシテ弱ク、或ハ若シク急速ニシテ、且高キヲ示ス事アリ、而シテ這般脈波ノ経過ノ遲速ハ脈搏ノ數ニ関係スル事少ク、寧ろ動脈管壁ノ性質並ニ中樞ヨリ末梢ニ向ツテ、驅逐セラル、血液ノ量ニ関係ス。

今一例ヲ挙グレバ、彼ノ大動脈口狭窄ニ於テハ、心収縮時ニ血液ノ左室ヨリ動脈管ニ移行スル事頗ル緩徐ニシテ、且少量ナルガ故ニ、脈波ノ経過、即動脈管壁ノ弛張スル事頗ル緩慢ナリ、是ニ反シ大動脈瓣ノ不全閉鎖ニアリテハ、心収縮時ニ於テ、既ニ一旦動脈ニ出テタル血液ハ、再ビ左室内ニ逆流シ、其際左房ヨリ入り来ル血液ト相合スルヲ以テ、多量ノ血液ニ因テ、左室ハ充實セラレテ弛張シ、次ニ肥大ヲ示キ其収縮力若シク弛張トナル、而シテ心左室ノ収縮スル

マ、其力強盛ナルヲ以テ、此多量ノ血液ヲ一挙動脈管内ニ射出スルガ故ニ、動脈管ハ迅速且著明ニ充實セラル、モ、次ニ末ル心弛張時ニ、其血液ノ大部分再ビ左室ニ向ツテ逆流スルヲ以テ、動脈内ノ血量或ニ減少ス、故ニ這般ノ場合ニ於テ脈波ノ発現ノ際、管壁ノ弛張スル度頗ル顯著ナレドモ、其収縮スル事迅速ナリ。

(四) 脈搏ノ大サ(即脈波ノ高サ) 脈ノ速度ト一定ノ関係ヲ有シ、前述セル大動脈瓣閉鎖不全ニアリテハ、脈搏ハ大ニシテ大動脈口狭窄及心衰弱ニ在リテハ少ナリ。

(五) 充實 状態ヲ檢セントセバ、一ノ脈波ノ終リシ刹那ヨリ、次ニ脈波ノ発現ニ至ル迄ノ間歇時(即安靜時ナリ)ニ於テ、是ヲ檢スルヲ要ス。

向トナレバ脈波ノ発現セシ瞬間ニ於テハ、脈波ノ充實シテ硬固トナリ、從テ確實ナル充實状態ヲ窺知シ難ケレバナリ、臨床上大動脈瓣閉鎖不全及大動脈口狭窄ニ於ケル脈搏ハ充實ナラズ、是ニ反シ左心室ノ肥大ヲ伴ヘル萎縮腎ノ場合ニ於テハ、脈搏若シク充實ス、重症患者ニ於テ空虚ナル脈搏ハ、心ノ衰弱ヲ表示スルモノニシテ、予後ノ不良ヲ推知セシム。

内脈ノ固サ 吾人ガ動脈管壁ヲ觸ルニ際シ、其指頭ニ対スル抵抗状態、即其硬
度ハ動脈管内ヲ充塞セル血液ノ量及動脈管壁ノ收縮力及其疾病^{例之}大動脈硬化^{アテローム}ニ
ニ關ス、彼ノ鉅中委ニ於テ脈搏ノ硬固ナルハ、蓋シ該動脈管壁ノ着シク收縮ス
ルガ為ナリ。

以上論ジタル如キ脈搏ノ性質ハ、臨床ニ脈搏ヲ觸診スル際セズ確定セザルベカ
ラス、蓋シ是ニ據リテ症候學上セズナル根據ヲ得ルモノナレバナリ、生理的ニ
於テハ心臓ノ一回收縮スル毎ニ、一ノ脈搏ヲ現出スルモノナリト雖モ、或種ノ
心疾患ニ於テハ、心臓ノ各收縮毎ニ、是ニ灰ズル脈搏ヲ呈セザル事アリ、故ニ
實地上脈搏ヲ檢スルニ當テハ、橈骨動脈ニ於ケル搏動ト、心臓收縮作用トヲ比
較スルハ必要ナリ。

又大動脈瘤ニ於テ、大動脈壁ノ著明ナル拡張ニ因リ、心収縮時ニ血液ノ左右ノ
動脈ニ向ツテ、同一ノ速力ヲ以テ進入セザル結果、兩側ノ橈骨動脈搏動ノ間ニ、
時期的ノ差異ヲ示ス事アリ。

脈搏ノ形態即動脈壁ノ運動形状ハ、脈波計ニヨツテ是ヲ表記スル事ヲ得ベク、
茲ニ畫キ出ダサレタル像ヲ脈波圖ト稱ス。

脈波圖ハ諸多ノ隆起ヨリ形成セラル、モノニシテ、カ一ノ最大隆起ハ心臓ヨリ
動脈管ニ向ツテ射出セラレタル、血液ノ衝動ニヨツテ、生ズル動脈管壁ノ依然
タル拡張ニヨリテ起シ、カニノ小隆起、所謂反衝小波ハ心室拡張スルニ當リ、
再ビ心臓ニ向ツテ回流スル血液ガ閉鎖セル大動脈瓣ニ衝突シテ、反跳セラレ、
更ニ動脈ニ向ツテ進入スル際ニ管壁ヲ衝動シ以テ此波動ヲ発現セシムルニ至
ル、カ三ノ小隆起ハ動脈壁自己ノ彈力性ニ因リテ、生ズル所ノモノナリトス。
生理的ニ於テハ、反衝小波ノ発現ハ、唯脈波圖ニ現ル、ニ過ギスシテ、觸診上
ニ於テハ、カ一ノ波動ト區別スル能ハズ然リト雖モ、病的ニハ屢々反衝小波ノ
カ一脈波ヨリ遲延シテ、発現スル事アリ、然ル時ハ容易ニ是ヲ觸知シ得ルモノ
ニシテ、所謂重複脈ト稱スルモノ即是ナリ。

如斯反衝小波ノ遲延ヲ檢起スルハ、カ一脈波ノ大サ及動脈壁ニ於ケル緊張ノ差
弱ニ關係スルモノナリ。

生理的毛細管内ニ於ケル血液ハ平等ニ流通シテ、毫モ波動ヲ呈スル事無シト雖
モ、病型的例之大動脈閉鎖不全ニ於テハ、毛細管搏動ヲ呈シ、毛細管ニ富有ナ
ル組織ニ於テハ、若明ニ是レヲ見ルヲ得、此際若シ或ハ体部、例之前額部等ヲ

臨時的ニ刺戟スル時(例之瘰癧等ニヨリ)ハ、毛細管ハ一層強ク充實シ、容易ニ脈動ヲ感觸スルヲ得ベシ、蓋シ大動脈閉鎖不全ノ際ニハ、前述ノ如ク左心室ノ強キ収縮ニ因テ頗ル多量ノ血液ヲ動脈及毛細管ニ向ツテ射出シ、依然是レヲ充實スルノミナラス、更ニ進ンテ其一部靜脈ニ返入スルモ、心室拡張スル時ハ、其血液ノ一部ハ閉鎖不全ノ瓣膜ヲ越エテ左心室内ニ逆流スルノ結果、動脈及毛細管内ニ於テハ強キ充實ト空虚トハ、交代性ニ発現シ爲ニ、斯ノ如ク毛細管ニ搏動ヲ呈スルニ至ルモノナリ。

靜脈内ニ於テモ、亦特別ナル状態ノ下ニ脈波ノ発現スル事アリ、是レヲ靜脈波動ト稱ス、例之動脈ニ接近セル靜脈ハ、直接ニ動脈ノ搏動ヲ傳達シ、以テ搏動ヲ呈スルモノニシテ、彼ノ頸靜脈ガ頸動脈ノ搏動ヲ傳達シテ、脈波ヲ呈スルハ、吾人ノ實驗スル処ナリ、又大靜脈内ノ血液七左房内ニ回流スル事平等ナラズシテ、毎四中絶シ、末梢靜脈ニ向テ衝動シ逆行性波動ヲ呈スル事アリ、所謂陰性靜脈搏動是ナリ、頸靜脈ニ於テ是ヲ認ム、又三尖瓣閉鎖不全ニ際シテハ、右心室収縮スル時ハ、室内ノ血液ノ一部右房内ニ逆流シ以テ發射セル、大循環靜脈ニ向ツテ、衝突性波動ヲ生ズ、吾人ハ是ヲ陽性靜脈搏動ト云フ。

第十八章 症狀ノ觀察

夫レ醫學最後ノ目的ハ、疾病ノ治療ニアリ、此目的ヲ全クセントセバ先ヅ診斷ノ正確ヲ期セザルベカラズ、而シテ診斷ノ正確ナルヲ期スルニハ、須ク冷靜虚心以テ精細ニ各症狀ヲ檢直シ、決シテ遺漏アルベカラズ、若シ單ニ二三著明ナル症狀ノミニ重キヲ置キ、或ハ先入主トナレル鬼現ニ支配セラレ、或ハ偏頗ナル感情ニ動カサル、時ハ、豈ニ確實ナル診斷ヲ下スヲ得ンヤ、診斷ノ要ハ唯客觀的ニ病者ノ症狀ヲ觀察スルニアリ、這般ノ疾ニ注意ヲ併ハザレバ現存ノ症狀ヲ看過シ、或ハ實際ニ付セザル症狀ヲ認メ、或ハ反対錯誤ノ觀察ヲナスニ至ル事アリ。

懐ヒ起ス、千八百四十年、バセトー氏ノ一新病ヲ記載スルマ、其主要ナル三徵候トシテ、眼球突出、甲状腺腫及心動迅速ヲ挙ゲタリシモ、尚他ニ必発ノ徵候タル、震盪及運動性眼症狀ニ注意セザリキ、又麻疹ノ如キ古来ヨリ甚ダ多ク實際セラル、モノト雖モ、該患者ノ口腔粘膜ニ生ズル小斑ニ至リテハ、近年米國ノ医士コプリック氏ニ依リテ始メテ発見セラレタリキ、是等ハ從來疾病ノ觀察ニ

精到ナル注意ヲ研ハザリシガ爲メ、空シク症状ヲ看過セシ行例ナリ、若シハ
ト一氏ニシテ其実験ハル多数ノ患者ニ就テ、單ニ主要徵候ノミニ止ラズ、同他
ノ徵候ヲモ仔細ニ檢シタリシナラバ、必ズヤ當時既ニ震盪ノ如キ症状ヲモ認メ
タリシナルベク、又古来多数ノ医家が麻疹患者ノ口腔粘膜炎ノ檢直ヲ等閑ニ附ヒ
ザリシナラバ、コプリ^{コプリ}ヲ待タズシテ、夙ニ小斑ヲ認メタリシナラン。
先入主トナレル思想ハ屢々判断ヲ誤ラシメ、實際ニ行ヒザルモノヲ恰モ存在セ
ルカ如クニ感ゼシメ、或ハ全ク反対ノ結論ヲ下サシムルニ至ル事アリ。

ブイヨールノ麻疹質則ニ進発スル心内膜炎ノ多キ事ヲ考フルマ、此思想深ク彼ノ
腦裡ニ刻セラレ、偉麻質斯者ヲ驗診スルニ際シ、驗診器ノ圧迫ニ由テ胸部皮
膚ニ生ジタル雜音ヲモ心雜音ト認ジ、其結果偉麻質斯者ノハ。%ニ於テ、心
内膜炎ヲ認ムトノ説ヲ發表スルニ至レリ。

ピオリー代ガ規厄涅ノ内用後半時間ニシテ、脾臓ノ縮小スルヲ打診ニヨリテ知
リタリト稱セシガ如キ、或ハシヨット代ガコナウハイム^{コナウハイム}浴ノ應用ニ依リテ、心
濁音界ノ着シク減少セル事ヲ打診シテ知リタリト述ベタリシガ如キ、吾人ノ是
ヲ觀ルニ畢竟予期竟向ノ結果判断ヲ誤リタルモノニシテ、實際上然ラザルモノ

ヲ然リトシテ認メタル一種ノ錯誤ニ過ギズ、並時ジヨナス代ガ温度ノ差違ニ據
テ、含気臈器(肺)ト無気臈器(肝臓)トヲ皮膚面ヨリ言知シ得ル事ヲ報告セ
シガ如キモ、又予斯意向ニ因ヌル錯覺ニ誤ラレタルモノナルベシ。

十八世紀ノ時代ニ當テマルピキ^{ピキ}、レーウエン^{レーウエン}ハーク^{ハーク}氏ノニ大家世ニ現ハレ顕微
鏡ヲ應用シテ、生物學上種々ノ発見ヲナシ、斯學及醫學ノ進歩ニ貢獻セシ所實
ニ尠カラザリシト雖モ、而モ他ノ一面ニ於テハ全然實際ニ行ヒザリシ者ヲ記
載シ、世ヲ誤リタル事アリキ、其中最モ滑稽ナルハ精蟲内ニ小動物ノ既ニ、発
育シ居レルヲ觀タリト言ヘル記載ナリトス、蓋シ當時ノ研究家ハ斯ク認メタリ
シモノナルベキモ、今日ヨリ是ヲ見レバ其錯覺ニ出デシモノナルマ、疑ヒヲ容
レズ。

精神作用、就中感情ノ影響ハ實ニ病者ノ觀察ヲ誤ラシムル事少ナカラズ、熟練
セル大家ト雖モ、其家族知友ノ疾病ヲ診スルニ當リテハ、私情ニ制セラレ輕易
ナル症状ト雖モ、是ヲ過大視シテ診断ヲ誤ル事甚ダ多シ、某洋医ノ受兒急性胃
病ニ罹リ、発熱スルマ医是ヲ診シテ、著シキ項部強直ヲ認メ、腦膜炎ノ疑診ヲ
下シタリキ、然レドモ彼ノ認メタリト言ヘル項部強直ハ、其兒ヲ診スルニ當リ

手ヲ以テ頂部ヲ動かセシニ、是ニ抵抗セシヲ誤リシモノニシテ、畢竟始メヨリ
腦膜炎ナラントノ恐レヲ疑キシ結果、其特異症狀ノ一タル頂部強直ヲ聯想シ、
遂ニ過大ノ錯誤ヲ承ヒシナリ、患者ニ既往症ヲ質シ、又ハ其外貌ヲ一見シテ、
肺結核ナラントノ予想一度ビ腦裡ニ起レル時ハ、所謂先入主トナリテ打診、
ノ正確ヲ缺キ、錯覺ヲ承ス事アルカ爲メ、事實肺結核ニ非ザルモノニ對シテ、
肺炎加答兒、或ハ肺結核ノ診斷ヲ下スニ至ル事アリ、固ヨリ重症ナル疾病ニ在
リテハ、其症狀ヲ誤認スル事一級ニ稀ナリト雖モ、初期又ハ輕症ノ疾病ニアリ
テハ、先入ノ偏見予想ニ支配セラレテ、意外ノ誤診ヲナスノ例實ニ夥シトセズ、
豈ニ戒メザルベケンヤ。

是ヲ要スルニ吾人ガ病者ヲ診シ、症狀ヲ觀察スルニ當ツテ、全ク客觀的ナルベ
ク、決シテ主觀的ナルベカラズ、換言スレバ自然ノ狀態ヲ在リノ儘ニ觀察シ、
毫モ其間ニ私心偏見ヲ挟ムベカラズ、此ノ如クニシテ始メテ正確ナル診斷ヲ下
シ得ベク、治療ノ目的ヲ達シ得ベキナリ。

第十九章 一般ノ注意

(A) 各症狀ハ、身體ノ一組織一臟器ヨリ發ス。天レ各個ノ疾病ハ、各特殊ノ局所性
病変ヲ有ス故ニ、疾病ハ其同タルヲ論ヒズ、元來局所病タルモノニシテ、從ツ
テ其症狀モ局所ニ限重スベキモノナリ、然リト雖モ各臟器ノ間ニハ、相互親密
ノ關係ヲ有スルヲ以テ、一臟器ノ疾患ハセズマ他臟器ニ影響ヲ及ボサルヲ得
ズ、故ニ疾病ハ決シテ永ク一局部ニ限重スルモノニ非ズシテ、或ハ連続性ニ他
ニ蔓延シ、或ハ循環器、或ハ神経ノ媒介ニ依リテ遠隔セル種々ノ臟器ニ広延シ、
以テ全身病トナルニ至ルモノナリ、今左ニ二三ノ適例ヲ示サン。

(一) 彼ノ子宮癌ハ、子宮腔部ヨリ發生スルモノニシテ、即元來ハ局所病ナリ然レ
ドモ、其漸次増大スルマ、遂ニ破壊シテ潰瘍トナリ、体液ノ著シキ消耗ヲ承シ
テ、全身瘦削ヲ招致スルノミナラズ、其癌細胞ハ淋巴管血管ヲ介シテ、他臟器
淋巴腺ニ轉移シ、以テ同様ノ癌腫性結節ヲ多発シ、又一方ニ於テハ其附近ニ位
スル輸尿管ヲ侵蝕閉塞シテ、尿ノ排泄ヲ妨害スルカ爲メ、尿ハ腎盂腔内ニ鬱滯
シテ、所謂腎臟水腫ヲ起シ、更ニ尿成分全身血液中ニ滯積シテ、尿毒症ヲ發
起シ、種々ノ臟器、就中腦髓ニ毒作用ヲ及ボシテ、頭痛、眩暈、昏睡、癲癇様
痙攣ヲ起シ、又血中ニ蓄滯セル尿素ノ一部分ハ腸管ヨリ排泄セラレ、際、尿酸

安田尾重 = 分解シテ、腸粘膜ヲ刺戟シ、以テ高度ノ腸炎ヲ発起シ、下痢ヲ承シ
遂ニ死亡ス。(98)

(二) 肺結核ハ通常先ゾ肺尖ヨリ生ズル局処病ナリト雖モ、喀痰中ニ存在スル結核
菌ハ、屢々嚥下セラレテ腸ニ結核ヲ産生シ、或ハ肺ニ於ケル局処性病菌近傍ノ
静脈管ニ破壊シテ、其病竈内ノ結核菌、血液中ニ混入シ以テ全身諸臓器ニ粟粒
結核ヲ多発スル事アリ。

(三) 膽囊或ハ膽管内ニ結石ノ発生スルマ、其初メハ局処性病ニシテ、其症状ハ
此部ニ限置スト雖モ、膽汁ノ排出ヲ妨グルニ至レバ、膽汁ハ遂ニ血液中ニ移行
シテ黄疸症ヲ発起シ、全身ノ皮膚及再世諸臓器ヲ黄染スルノミナラズ、膽汁酸
塩ノ中毒作用ニ依リテ、全身症状(心臓腎臟等ノ官能障礙)所謂瘧血症ヲ発シ、
又一方ニテハ膽石ニ因スル流産症トシテ膽道ノ化膿性炎症ヲ生ジ、是ガ為メ更
ニ発熱等ノ症状加ハルヲ見ル。

此ノ如ク最初ハ局処病タルモ、遂ニ全身病トナリ、生活ニ須キナル臓器ヲ侵ス
ニ至リテ、死ニ転ズルモノナリ。
同一ノ病変ト雖モ、病竈ノ位置如何ニ由リテ、其症状ヲ異ニスル事アリ、腦膜

炎ノ病変ニ生ジタル場合ト腦脊髄部ニ生ジタル場合トハ、自ラ其症状ノ異ルガ
如キ、是レ畢竟腦ノ各部ニ於ケル官能及是ヨリ出ズル脳神経ノ同一ナラザルヲ
以テナリ、又等シク肺炎ト云フモ、其上葉、或ハ下葉、或ハ内部ニ生ズルト、
否トニ從ツテ、多少其症状ヲ異ニスルヲ見ル。

尚注意スベキ事ハ症状ノ所在ガ似スシモ、当該疾患ノ實際ノ坐所ニ一致セザル
事是ナリ、此事實ハ自覚症状、就中疼痛ノ如キモノニ於テ最モ然リトス、例之
上腹部ニ疼痛ヲ訴フルモ、果シテ胃例之胃ヨリ発シタルモノカ、或ハ膽囊例之
血痛ヨリ発スルモノナルカ、是ヲ確定スル事能ハザル事多シ、又症状ノ或部ニ
著明ニ発スルモ、必ズシモ疾患ノ坐所ヲ示スモノニ非ズ、嘔吐ハ胃ヨリ発スル
モノナリト雖モ、胃ハ健全ニシテ却テ腦病ノ利戟ヨリ是ヲ発スル事アリ(中毒
性嘔吐)、又呼吸困難ハ肺ヨリ発スルモノナリト雖モ、肺ハ通常ニシテ血液病、
腹腔及胸腔筋肉ノ疾病ヨリ是ヲ承ス事アルガ如シ。

内臓ノ疾患ニ於テハ屢々遠隔セル部分ノ皮膚ニ、疼痛ヲ訴フル事アリ、是レ蓋
シ内臓ニ分佈スル知覚神経ノ派出スル脊髄ヨリ、同一ノ高サニ於テ是ト共ニ起
ル処ノ皮膚知覚神経ニ利戟ノ傳達スルニ由ルナリ。

例之肝臟病ニ於テ、右肩胛部ニ、心臓病ニ於テ左上肢ニ疼痛ヲ訴フルガ如シ(ヘ
ツト)代知覺區敏帶是ナリ)。(100)

(B) 症状ノ強弱ハ病竈ノ大小ニ並行スルモノニ非ズ。症状ハ病理解剖的变化ノ大
小ヨリモ、寧ロ同時ニ発現スル毒作用ノ如何ニ關係スル事アリ、例之腸室扶斯
ニ就テ是ヲ見ルニ、全身症状甚ダ重劇ニシテ、死亡シタルモノト雖モ、是ヲ解
剖スレバ、腸ニ於ケル解剖的变化、頗ル幽微ナル事アリ、或ハ是ニ反シテ全身
症状ノ甚ダ輕易ナルモノニシテ、解剖上腸变化ノ極メテ顯著ナルモノアリ、是
レ實ニ解剖的变化ノ大小ヨリモ、寧ロ腸室扶斯細菌ノ毒性ノ強弱ニ關係アル事
ヲ證スルモノナリ。
又腦髓ニ生ズル腫瘍ノ如キハ、其大サニ依ルヨリモ、寧ロ其坐處ノ如何ニ依リ
テ症状ヲ発スルモノナリ、前頭葉ニ大ナル腫瘍ヲ生ズルモ、是ニ由リテ起ル欠
ノ症状ハ甚ダ僅微ナリト雖モ、若シ腦底等ニ腫瘍ノ生ズル時ハ、許多顯著ノ症
状ヲ発スベシ、又破傷風ニ就イテ見ルモ、是ヲ惹起シタル外傷ハ頗ル微小ナリ
ト雖モ、創傷内ニ侵入傳染セル破傷風菌ノ毒素ノ作用ニヨリ、全身ニ顯著アル
強直性痙攣ヲ発起スルヲ見ル。

然レドモ又病理解剖的变化及毒物ノ化学的作用ヲ缺如スル疾病無キニ非ズ、是
所謂機能病疾患ニシテ、即精神病及神経性障碍ノ如キハ、全ク解剖的变化ヲ缺
キ、又毒物ノ作用ヲモ証明スル事能ハサルモノニシテ、單ニ神經ノ機能ノ障碍
ヨリ起ルモノト看做スノ外ナシ、而シテ單ニ機能其モノヨリ起ル免ノ症状ノ好
適例ハ、實ニ橈骨動脈ノ關係ナリ。
抑、彈力性ヲ有スル血管ノ管ハ、其内容ノ充塞セラル、或愈々大ナルニ從ツテ、
緊張ル事又愈々強シ、然レドモ動脈ハ彈力性ヲ有スルノ外、尚自ラ收縮スル
性ヲモ見、アルヲ以テ、其内容ノ減少スル時ハ、自ラ管壁收縮シテ硬固トナル。
故ニ血液ヲ容ル、至少キ動脈ハ、是ニ稱ルニ恰モ緊張シタルガ如キ感アリ、
斯ノ如キ動脈ノ自ラ收縮スル機能ハ、動脈ノ硬度ニ影響ヲ與フル事ヲ知ルベク
臨診上認知セラル、免ノ動脈壁ノ硬固ハ、其收縮機能ニ因スル事アルヲ注意セ
ザルベカラズ。
多クノ疾患ニ於テハ、莫テ上記ノ解剖的变化、化学的作用及機能变化ノ同時ニ
存在スルモノニシテ、是ニヨリテ臨床上認知スベキ症状ヲ発現スルモノナリ。
(C) 相異ナレル病変モ同一ノ症状ヲ惹起スル事アリ。心臓ノ筋質ニ生ズル病変ハ
(101)

実ニ種々ニシテ、即色素性萎縮、病変性、纖維性筋炎等各自同シラズ、然レドモ此等、解剖的変化ハ、皆等シク心臓ノ筋纖維ノ運行変化ヲ呈スルモノナリ故ニ、其發現スル症狀ハ全ク同一ニシテ、即心動衰弱、全身循環障礙ヲ来スモノナリ、又肺臓ニ生ズル病変モ、種々ナリト雖モ、其病理的症狀ノ相異ナレリ
スルモノ少ナリラズ、例之肺炎ト肺ノ出血性梗塞トハ、其性質全ク相異ナレリト雖モ、打診及聽診上ニ於ケル症狀ハ殆ト同一ナルガ如シ、故ニ是ヲ鑑別スルニハ他ノ症狀、即喀痰及熱等ノ状態ニ據ラザルベカラズ、
胃壁ヨリ血液ノ胃内腔ニ出ズルヲ、多クハ吐出（即吐血）ニラレ、又其一部ハ腸ニ流下シテ糞便ヲ着染ス、而シテ此吐出ノ種々ノ疾患ニ生ズルモノニシテ乳中胃内形潰瘍及胃癌ニ因ル至多シ、而シテ胃潰瘍ヨリ起ル出血ハ、動脈壁ヲ侵蝕シテ、是ヲ破壊スルヨリ生ズルモノナルガ故ニ、其動脈ノ愈々大ナルニ從ツテ、出血量モ又愈々多キハ論ヲ俟タズ、是ニ反シテ胃瘻ニ因ル出血ハ、痔腫ノ破壊スル結果、其内部ノ小血管應破ル、ヨリ生ズルモノナレバ、其量ハ一戦ニ少量ニシテ、多量ナルガ如キハ實ニ稀有ニ極ス、ソハ兎モ毎吐血ナル症狀が相異リタル胃病ヨリ發生スル者、此ノ如クナルト同ジク、又肺ノ出血（即喀血）

モ肺ノ種々ナル病変、即肺結核、出血性梗塞、動脈瘤等ヨリ生起スルモノナリ、血脈モ不同様ニシテ、尿ニ混ジテ排泄セラル、血液ハ、或ハ腎臓ヨリ、或ハ膀胱ヨリ出ズ、而シテ其出血部が尿中ニ混ジテ、血尿ト尿中ニ混ジテ、血液ト尿トハ相混合セシムルヲ得ベシ、
又血便モ是ト同ジク、出血部が腸ノ始部ニ近キ處ニラハ、血液ト糞便トハ相混合セシムル、大腸ノ下部ニ近キ處ニ出血スル時ハ、既ニ糞便トナリタル糞塊ニ、血液ノ混入ヲ喜スルニ因キズ、
腦運動中枢ノ刺激ヨリ起ルヒ疹痒搔癢ノ如キモ、其原因ハ甚ダ多岐ニシテ、即チ或ハ炎症性変化、或ハ腫瘍、或ハ毒物作用ノ如キモ、ヨリ起リ、又不明ノ原因ヨリ起ル事アリ、
又腸疾患ニ因ル下痢及嘔吐モ、又種々ナル原因ヨリ起ルモノニシテ、又シテ第一、原因ヨリ起ルモノニ非ズ、頭痛及熱點ノ如キニ至リテハ、實ニ種々ナル疾病ノ症狀トナリテ發現スルモノニシテ、是ヲ起スル疾患ハ實ニ枚舉ニ遺ラザルナリ、
①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺
①同一ノ病理的変化モ異種ノ症狀ヲ起スル者アリ、皮膚ニ生ズレバ特別ノ症

状ヲ惹起セザル良性腫瘍ト雖モ、若シ狭窄ナル脊髄管ニ生ズル時ハ、直接ニ脊
髓ヲ压迫シテ、疼痛、痲痺症状ヲ発シ、加之死ニ至ル事アリ、故ニ同一ノ病変
ト雖モ、其発生場所ニヨリテ症状ヲ異ニスル事ヲ知ルベシ、又同一ノ化膿性炎
症ト雖モ、肋膜炎ト腹膜炎ト生ズルニ從ツテ、其症状經過同ジカラズ、化膿性肋膜炎
炎ハ、通常短時日ノ中ニ死ニ至スルモノアリト雖モ、是ニ反シテ化膿性肋膜炎
ニ在テハ、比較的永ク生命ヲ保ツ事ヲ俾ベシ、同一ノ炎症性疾患ト雖モ、年少
者ニ在テハ高熱ヲ発シ、是ニ反シ高熱者ニ在テハ、屢々僅微ノ体温亢進ヲ末ス
ニ過キザル事アリ、又嘔吐下痢ノ如キハ、唯幼時者ニ危險ナルノミニシテ、老
人ニ在テハ危險ヲ末ス事甚ク少ク、是ガ爲ニ直接ニ死ニ陥ルガ如キ事ナシ、
(1) 病變一定ノ大サニ違フニ非ズンバ、症状ニ發現スル事異シ、上内臓炎ニ於テ、
肺膜炎ニ発生スル症状諸節頗ル小ニシテ、喉針頭大ニ達セザル時ハ、心臓内ノ
血流ニ対シテ、影響ヲ與フルニ至ラザレガ故ニ、臨床上認知スルヲ得ベキ循環
障礙ヲ発スル事無シ、
又初期ノ肺結核ハ、肺炎ニ先ツ項少ノ病變ヲ形成シ、是ヨリ漸次増大シ、一定
ノ大サニ達スルニ及ビ始メテ打診上ニ是ヲ証明シ得ルニ至ル。

而シテ該病變ノ肺表面ニ近キ部位ニアル時ハ、是ヲ容易ニ證明シ得ベキモ、若
シ肺ノ深部ニ位スル場合ニ於テハ、是ヲ證明スル事困難ナリ、
凡テ肺ニ生ジタル結核性病變ノ打診上ニ、認知セラル、ヲ得ルニ至ルハ、其變
實大ニ達シタル時ナリ、然レドモ若シ、數多ノ病變ノ同時ニ存在スル時ハ、例
令各病變ハ小ナリトモ打診上是ヲ認知スルヲ得ルマ、論ヲ俟タズ、心臓ノ纖維
性心筋炎ニ罹ルマ、間質結締織増殖シテ、硬結性病變ヲ形成シ、其部ノ筋纖維
ハ崩壊ニ陥ス、然レドモ該病變ノ尚僅少ニシテ、且ツ小ナル間ハ、未ダ症状ヲ
發現スルニ至ラズ、然レドモ炎症性変化ニ因スル筋纖維ノ崩壊漸次増進シテ、
高度ニ達スル時ハ、此ニ於テカ心臓運動ノ障礙ヲ発起スルニ至ルモノナリ、
動脈瘤ハ、一動脈ノ局部拡張ヨリ成立シ、屢々囊状ヲ呈スルモノニシテ、其初
メハ小ナレドモ、漸次膨大シテ、其甚ダシキモノハ人頭大ニ達スル事アリ、大
動脈例之胸部大動脈ヨリ生ジタル、動脈瘤ノ尙小ナル間ハ未ダ血液循環ヲ障礙
スル事無ク、又周圍組織ニ對シテ压迫作用ヲ加フル事無キガ故ニ、臨床上何等
ノ症状ヲモ發現スル事ナシ、然レドモ動脈瘤ノ漸次増大スルニ至レバ、其内部
ヲ通過スル血液ノ速ク緩慢トナルノミナラズ、其近傍ニ位スル氣管、食道ヲ圧

迫シテ、是ヲ狭窄セシメ、呼吸困難、嚥下障礙等ノ症状ヲ発起シ、又肋骨、胸骨等ヲ内面ヨリ圧迫シテ、遂ニ是ヲ穿行シ、外面ニ向ツテ膨隆スル等、漸次顯著ナル症状ヲ発スルニ至ル、圓形胃潰瘍ハ胃粘膜(殊ニ幽門附近ノ小弯部ノ粘膜)ニ生ズル實質缺損ナルモ、生活体ニ於テハ素ヨリ是ヲ觸知スル事能ハズ、然レドモ其周圍ヨリ結締織新生増殖シ、潰瘍縁ノ肥厚硬結スルニ至レバ、始メテ是ヲ觸知スルヲ得ベク、又胃潰瘍ノ一定度ノ大サニ達スルニ至リテ、始メテ臨床ノ明カニ認めルヲ得ベキ、吐血ヲ示ス事アリ。

乳房内ニ生ズル癌腫ハ、例令小結節ナリト雖モ、外部ヨリ是ヲ觸知スル事甚ダ容易ナリ、是ニ反シテ胃癌ハ一定ノ大サニ達スルニ非ズンバ、腹壁ヨリ是ヲ觸知スル事能ハズ、加之觸診シ得ベキ部位ニ発生セザル時ハ、是ヲ発見スル事頗ル難シ、例之胃小弯部ハ肝臓ノ下面ヨリ掩ル、ヲ以テ、此部ニ癌腫ノ生ズル時ハ、腹壁ヨリ是ヲ觸ル、幸能ハザルガ如シ、而シテ胃癌ノ結果ハ栄養ノ障礙ヲ示シ、以テ全身ノ羸瘦ヲ招致スルヲ常トス、臨床ノ上亦一ニ看取セラル、モノハ、全身羸瘦ナル事甚ダ多ク、却テ胃部ニ生ジタル腫瘍ハ、遙ニ時日ヲ経タル後発見セラル、幸アリ。

(F) 病理解剖的変化ハ、从ズルモ、病起スルモノニ非ズ。夫レ病理解剖學ハ、人体ニ於ケル解剖的変化ヲ攷究スルヲ以テ目的トナス、故ニ若シ二個ノ脾臓ヲ有シ、或ハ單ニ一個ノ腎臓ノミヲ有スルモノトセバ、是即病理的ニシテ異常ニ非ザル事論ナシ、然レドモ其人ハ毫モ此異常変化ノ存在ヲ覺知スル事無ク、且其生活現象モ全ク通常ナリ故ニ、決シテ疾病ト稱スベカラズ、何トナレバ疾病トハ健康障礙ノ謂ヒナレバナリ、健康トハ各臓器ノ構造機能共ニ通常ナルヲ云フ、然レドモ實際上ニ就テ是ヲ見ルニ、健康者ト稱セラル、人々ノ中ニモ、多少ノ異常ヲ有スル者尠カラズ、故ニ吾人ノ健康状態ト見做スベキモノハ、生活ニ必要ナル機能、栄養、運動及精神機能ノ状態ニシテ、且ツ自覺的ニ爽快ノ感覺ヲ有スル者ヲラザルベカラズ、是ニ反シテ疾病ト稱スルモノハ、一或ハ多クノ臓器ノ機能ニ障礙アリテ、且ツ自覺的ニ不快違和ヲ感ズルモノヲ云フ、

(G) 疾病ノ多クハ悪性ナリ。悪性トハ生命ニ危険ナル病性ヲ云ヒ、是ニ対シテ善性トハ生命ニ危険ヲ及ボサル病性ヲ云フ、然レドモ實際上善性病ハ甚ダ少数ニシテ、外観上極善性ノ如ク見ユルモノト雖モ、其実ハ悪性ニシテ、甚ダシキハ致死の経過ヲ取ル者稀ナラズ、而シテ悪性ノ由リテ来ル原因ニ至リテハ實

＝種々ナリ。

今左ニ是ヲ列挙セン

(一) 疾病ノ永ク持続スル時ハ、生命ニ不良ノ作用ヲ及ボスモノニシテ、病褥ニ就ク事久シキニ亘ル時ハ、身体ノ虚弱、心動衰弱、栄養減少、循環障礙ヲ招致シ、又褥瘡ヲ発スルニ至ル、就中永ク持続スル発熱ハ甚ダ危険ニシテ、神経系ノ機能及呼吸運動ノ変化ヲ来スノミナラズ、特ニ心臓ノ作用ニ不良ノ影響ヲ及ボシテ、心衰弱ヲ来シ、遂ニ心麻痺ニ陥リテ、死ニ陥ラシムルニ至ル、故ニ発熱ヲ伴フ如ノ疾病ハ、悪性ナリト稱スベク腸「チブス」潰瘍性心内膜炎、結核、慢性化膿症等ハ是ニ屬ス。

(二) 身体ニ於ケル総テノ臓器ハ生命ニ對シテ、同等ノ價値ヲ有スルモノニ非ズ、故ニ生活ニ最モ須要ナル心臓、肺臓ノ疾病ハ、皮膚病ヨリモ悪性ニシテ、又腦ノ疾病ハ末梢神経病ヨリモ、悪性ナル事論ヲ俟タズ。

(三) 許多ノ疾病ハ其病理解剖的变化ノ種類性状ニ依ツテ、悪性ノ経過ヲ取ルモノナリ、腸潰瘍ヲ惹起スル疾病ノ容易ニ腸壁ノ穿行ヲ発シ、動脈ノ破裂ヨリ成ル如ノ動脈瘤ノ漸次膨大シテ、遂ニ破裂シ、盲腸盲腸炎ノ遂ニ腹膜全部ニ波及シ、

慢性腎臓炎ノ進行性ニ増進スルガ如キ、又結核及梅毒等ノ一時其症状輕快スル事アルモ、其実ハ漸次病勢進行シテ止マザルガ如キ、是皆悪性ノ経過ヲ取ル所以ナリ。

善性、悪性ノ鑑別ハ腫瘍ノ診斷上最モ重要ナリ、悪性腫瘍ハ即肉腫及癌腫ニシテ、其発生スル局所ノ破壊荒蕪シ、迅速ニ発育増進スルノミナラズ、他臓器ニ転移シ、又考ヲ形成シ、栄養ヲ障礙シ、全身悪液ニ陥ラシム、然レドモ此ノ如キ悪性ヲ有セザル腫瘍、即所謂善性腫瘍ト雖モ、其発生スル場所ノ生命ニ須要ナル臓器ナル時ハ、危険症状ヲ惹起シ、死ニ至ル事アリ、例之頸蓋骨ノ内面ニ生ジタル、骨腫ノ腦髓ヲ圧迫スルガ如シ。

(四) 全身ノ栄養障礙ヲ惹起スル疾病ハ、皆悪性ナリ、例之食道及胃狭窄ノ如キハ、其原因変化ノ如何ニ論ナク、食物ノ輸入ヲ減少絶セシムルヲ以テ、全身ノ栄養ヲ損害シ、遂ニ死ニ陥ラシム。

(五) 凶悪寄生性ニ因リテ起ル如ノ傳染病ノ多數ハ、悪性ニシテ「ペスト」コレラレ等ノ如キハ殊ニ然リトス、又一度体内ニ生ジタル結核ハ、全治スル事稀有ナリ、梅毒ノ如キハ永ク体内ニ留リ、「マラリア」ノ如キハ容易ニ再発スルノ性

アリ。

再発ノ傾向アル疾病ハ、決して善性ニ非ズ、何トナレバ疾病ノ再三反覆スレバ、是ガ為ニ遂ニ死ヲ致スモノナリ。

(六) 病変ヲ除去センガ為ニ、外科的手術ヲ行フモ是ガ為ニ、容易ニ種々ナル続発症ヲホス、アルヲ知ラザルベカラズ、即麻酔藥ハ勿論手術自己及手術後ノ臥褥等ハ、全身ニ不良ノ影響ヲ與ヘ、又腹壁切開手術ノ如キハ、其後腹壁ノ癒着「へルニアル」等ノ如キ障碍ヲ惹起スル事少カラズ。

(七) 同一ノ疾病ト雖モ、老人ニ発スル時ハ、壯年者ニ発スルヨリモ其症状經過ニ是性ナル事多シ、且年齢ノ如ハルト共ニ、全身動脈及心臓ノ変化ヲ生ジ、其後能不完全トナル結果ナリ、老人ニシテ肺炎ニ罹ル時ハ、其多クハ死亡スルヲ見テモ是ヲ知ルベシ、然レドモ悉ク然ルニ非ズ、或疾病ニ於テハ却ツテ壯年者ヲ死ニ致ス事多シ、例之糖尿病ノ如キハ三十才以下ノ人ニハ甚ダ危険ニシテ、致死スルヲ通例トスレド、老人ニ於テハ此ノ如クニ危険ナラズ。

(八) 現今ト雖モホダ根治療法ノ発見セラレザル疾病ハ、悪性アル事論ヲ俟タズ、結核病、肺病及悪性腫瘍等ノ如キモノ是ナリ。

(九) 疾病ノ性質ヲ判定スルニ当リテハ、該病ノ経過シタル後、治癒及再生機転ノ発現スルマ、否マヲ顧慮スルノ要アリ、病理解剖學上ノ治癒ト、症候學上ノ治癒トハ相一致セザル場合多ク、病理解剖學上ヨリハ、治癒ト認ムベキモノモ、症候學上ヨリスレバ、依然不治ト看做サザルベカラザル事稀ナラズ、例之胃ノ潰瘍ノ如キハ、癒痕ヲ結ビテ治癒スルモノナリト雖モ、是畢竟病理解剖學上ノ治癒ニシテ、其新在セル癒痕組織ハ、自ラ収縮シ、以テ胃狭窄症状ヲ発シ、食物ノ輸入ヲ減少杜絶スルニ至ルベシ、又膿ニ出血ヲ生ジテ、卒中症状ヲ発起シタルモ、幸ニ其生命ヲ保ツヲ得タル時ハ、其後「グリアル」組織ヲ新生シテ、所謂卒中性癒痕ヲ形成シ、以テ治癒ヲ告グ、然レドモ症候學上ヨリ見ル時ハ、決シテ治癒ニ非ズ、何トナレバ身体ノ知覚及運動機能ハ依然トシテ麻痺シ、全在痛ヲ通ジテ、恢復スル事無ケレバナリ、是出血ニヨリテ破壊変性シタル神経組織ニ乃至神経細胞ノ再生ヒヨル、事無キヲ以テナリ。

第二十章 病体ニ及ボス精神作用ノ影響

吾人ハ本然的責任ヲ自覺スル以上、學理實地ヲ研鑽考究シ、斯術ノ眞價ヲ失墮

セシメザルベク努力ヲ発励スルハ勿論、尙一層其医治的効果ヲ迅速、且甚大ナラシムル意義ニ於テ、精神作用ナル喫緊の重要問題ニ潛心齎心セザルベカラズ、夫レ然リ七身相関ノ原則ニ支配セラレ、人類殊ニ堅ヲ犯ス如トナリテ、煩悶懊惱シ、益々神経過敏トナレル病者ニ対スルノ時、誰カ此間ノ消鬼ニ現倒セザルモノアラシヤ。

病理學各論

第一章 呼吸器病

第一 急性鼻加答児 Akuter Nasenkatarrh (獨)

原因 本病ノ多数ハ感冒ニヨリテ発ス、故ニ本病ニ風邪ノ稱アリ。局前ノ原因モ又本病ヲ発ス、例ヘバ鼻粘膜ノ潰瘍、鼻腔ノ異物並ニ新生物ノ如シ、劇シキ塵埃若クハ藥物、例ヘバ吐根末、烏頭末、「クロール」瓦斯等ノ刺激ニヨリテ、本病ヲ発スル事アリ、其他枯草ノ花粉ノ鼻粘膜ヲ刺激シテ、加答児ヲ起サシムル事アリ(枯草熱、ホストック氏加答児)。
人ニヨリテハ少量ノ「ヨード」ヲ服用スルモ「ヨード」鼻加答児ヲ起スモノアリ、間接ノ刺激、例ヘバ胸腹部等ノ身体ノ一部分ノ寒冷ニ觸レタル場合ニモ、鼻加答児ヲ発ス、是レ反射性ニ鼻粘膜ノ充血及腫脹ヲ承スニヨル、其他隣接部ノ炎症ノ鼻腔ニ傳播スルニヨツテ承ル事アリ。

即口腔咽喉等ニ於ケルガ如キ是ナリ。

本病ハ又麻疹、流行性腮腺炎、百日咳等ノ傳染病ノ一徵候トシテ現ル、事アリ、稀ニハ精神運動ニヨリテ本病ヲ発スル事アリ、脈管運動性鼻加答兒之ナリ。

症状及解剖的变化 鼻加答兒ノ局所的症狀ヲ発スルニ先立テ、往々悪寒及軽度ノ発熱頭痛ヲ伴ヒ、次イデ鼻腔道ニ微熱ノ感ヲ生ジ、噴嚏ヲ發シ、鼻腔道ハ狭窄、或ハ閉塞シ、聲音ハ鼻音ニ変ジ（閉塞性鼻聲）患者ハ口ヲ開キテ呼吸ス、鼻汁ハ始メ透明ニシテ水ノ如ク（故ニ之ヲ俗ニ水バナト稱ス）塩味アリ、尚疾病ノ進ムニ隨ヒ其量ヲ増加シ、時トシテハ膿様ニ變ズ、「ドンドルス」氏ニヨレバ鼻汁ハ食塩ニ乏シクシテ、礫砂ニ富ミ、是ヲ顕微鏡下ニ檢スルニ、多クハ僅微ノ膿球ト層々鼻粘膜ノ齶毛上皮トヲ見ルト云フ、鼻汁ハ睡眠中ニハ其分泌止ミ、醒覺スレバ更ニ分泌ヲ始ムルモノトス、患者ハ前記ノ分泌物ヲ以ツテ淫濁セラル。

炎症ハ鼻粘膜ニ止マル事アレドモ、往々血腫ノ粘膜ニ波及スル事多シ、即下方咽喉頭、扁桃腺ニ蔓延シテ、咽喉炎、扁桃腺炎ヲ發シ、或ハ「ヨウスタクレ」氏管ヲ傳ツテ中耳ニ達シ、又前額竇ニ加答兒ヲ發シテ、鼻根上部若クハ眉間ニ疼痛

備考
清澤(凡無)
前額竇ニテ
(水バナ)ニハ
鉄筋會連合
ニ刺スベシト
(鍼灸則)

ヲ發スルガ如キナリ。

豫後 通常週日ニシテ恢復スルヲ常トス。

療法 先ヅ寒冷ヲ避ケ、原因ヲ除去スルニ努メサルベカラズ。

而シテ鍼灸療法トシテハ、誘導法トシテ、後頸部即棘状突起ノ両側及肩背部(天柱、風池、肩井、肩外、曲垣、大椎、附介、大杼)ニ刺鍼直刺五分乃至一寸、灸ヒ壯乃至十一壯シ、尚前頭部及顔面部(頭維、平神、巨膠)等ニ皮膚鍼ヲ施スベシ、上肢(三里、曲池)等ニ軍刺術ヲ施スモ可ナリ。

但シ発熱甚ダシキ場合ハ、鍼刺ノミニ止ムベシ、灸術ハ却ツテ熱候ヲ増加セシムル恐レアレバナリ。

第二 慢性鼻加答兒 *chronischer Nasenkatarrh* (獨)

原因 本病ハ急性症ヨリ、移行シテ来ル事アリ。

主トシテ腺病性體質ノ者ヲ襲ヒ、或ハ職業上絶ヘズ化学的、若シクハ理學的ノ刺激ヲ受クル者、例ヘバ紡績工、石工、磨工、砂糖及煙草製造人ノ如ク、塵埃多キ空氣、若クハ刺激性瓦斯ヲ吸入スルモノニ多シ。

又産草過眠有ニ於イテモ、往々本病ヲ発ス。

其他微毒ハ屢々本病ノ原因トナル。

解剖的变化 鼻鏡検査ニヨリ、是ヲ證明シ得ルモノニシテ、即粘膜ノ肥厚、或ハ削瘦ニヨリ三種ニ區別ス。

甲慢性肥厚性鼻炎 *chronischer hypertrophischer Nasenkatarrh* (獨)

鼻粘膜ハ灰色、若シクハ褐色ヲ呈シ、組織ノ肥厚増殖ヲ未シ、血管ノ拡張ヲ認ム。

乙單純性慢性鼻炎 *chronischer Simpler Nasenkatarrh* (獨)

臨床上視診ニヨリテハ、粘膜ノ腫脹ヲ云フモ、一定ノ藥物即「コカイン」ヲトレナリン」塗布ニヨリ、腫脹减退スルヲ以テ、此腫脹ハ單ニ血管ノ拡張充血ニヨルモノトサレ、別ニ充血性鼻炎ノ名アリ。

丙慢性瘦削性鼻炎 *chronischer atrophischer Nasenkatarrh* (獨)

本症ニ於テハ、鼻粘膜ハ菲薄ニシテ蒼白ナリ。而シテ鼻腔非常ニ廣闊トナルヲ以テ、能ク鼻道ヲ洞見シ得ベク、隨ツテ其空氣ノ流通甚宜シク、少量ノ分泌液ハ容易ニ乾燥シテ、乾茄トナル、往々

此乾茄ノ粘膜ニ固着シ、差イテ剝離スレバ、少許ノ出血ヲ起ス事アリ。症候 急性症ト等シク、鼻根部ニ疼痛ヲ発シ、鼻腔閉塞ニ惱マサル。

分泌液ハ或ハ粘液膿性ヲ呈シ、或ハ濃厚ナル膿様トナリ、或ハ稀薄ニシテ多量ニ排出セラル、又時トシテ其分泌液ハ厭フベキ悪臭ヲ放チ、傍人ヲシテ不快ノ感ヲイダカシムルノミナラス、患者自ラモ是ニ堪ヘズ、遂ニ飲食ヲ厭フニ至ル事アリ(嗅鼻即チ是ナリ)。

其他患者ハ鼻腔閉塞セラル、ヲ以ツテ、常ニ口ヲ開キテ呼吸ス。聲音ハ自然鼻声ニ変ジ、嗅覺機能ヲ失フニ至ル。

本病殊ニ肥厚性鼻炎ニ於イテハ、反射性ニ世ノ穢濁ノ疾患ヲ発スル事アリ、即鼻性反射性神経病、例ヘバ精神遲鈍症ヲ起シテ、思考力、記憶力減少シ、頭重、眩暈等ノ症状ヲ発シ、或ハ反射性気管枝喘息ヲ発スル事アリ。

後後及療法 本症ノ如キハ甚ク頑固ナル疾病ニシテ、殊ニ瘦削性鼻炎ノ如キハ鍼灸治療ノミヲ以テ、其治療ヲ計ルベカラザルモ、医療ト協力シテ施術スル時ハ、予期セザル効果ヲ修ムル事アリ。

カ一ノ原因ヲ除去スルニ努ムベキハ勿論ナルモ、鍼灸療法トシテハ、前項急性

症ニ於ケルガ如ク、後頸部、肩背部、上肢等ニ誘導的ニ刺鍼、施灸スベシ。尚
其全身状態ニ鑑ミ、強壯療法ノ目的ノ本ニ、脾推刺(胃俞、三臑俞、腎俞、大
腸俞、少腸俞)ニ一寸乃至一寸八分、灸ヒ杜乃至十一壯スベシ。(115)

第三 衄血 Nasenblutung (獨)

原因 外傷又ハ手術ノ後甚ダシキ衄血ヲ来ス事アリ。
又何等特別ノ原因ナクシテ、急ニ見ヲ来シ或ハ身体ノ激動等ニヨツテ来ル事アリ、以上ノ外衄血ノ原因トシテハ
(一)鼻疾患ニシテ、例ヘバ慢性鼻加答兒ノ際ニ生ズル痂皮ヲ除去セントスルニ当
リ、表面粘膜ヲ破壊シテ是ヲ起シ、(二)血液病即白血病、瘰癧病、紫斑病等ノ場
合ニ来リ、(三)慢性疾患、心臟病、動脈硬化症、萎縮腎等ノ場合、又(四)傳染病例
ヘバ腸チフス、痘瘡、猩紅熱、麻疹、肺炎ノ初期、又ハ敗血症疾患及梅毒ヘ絡
ニ「サナダ」(鼻)稗息スル右ハセズ衄血アル事ヲ思フベシ。
生殖腺能ト衄血トハ一定ノ關係ヲ有スルモノニシテ、月経前又ハ其代償トシテ
衄血ヲ見ル事アリ。

本病ハ一ノ症
候ナレドモ本
症ノ出現ニヨ
リ他ノ疾患
ノ存在ヲ知
リ得ルル
緊要ナルガ
故ニ茲ニ其
事ヲ論ズ

食塩ノ少ナキ食物ヲ長ク食シ、比較的体内ニ食塩ノ缺乏セル場合等ニ衄血ヲ起
シ易ク、且ツ止血シ難キ事アリ。

症状 出血ノ部位ハ多クノ場合ニ鼻中膈ノ前部ニシテ、骨部ガ軟骨部ニ移行ス
ル処ナリト云フ、而シテ多クハ偏側ノ鼻孔ヨリ流出シ、其量甚ダ不同ナリ、衄
血ハ多クハ一過性ノモノニシテ、危険ナルモノニ非ズ、而シテ衄血ノ後ニハ、
既存セル頭痛及昏瞶ヲ輕快セシムル事アリ、然レドモ甚ダシク衰弱セルモノ及
貧血症者ニアリテハ、却ツテ危険ヲ伴フ事アリ、又衄血ガ持続的ニ多量ニ来ル
時ハ為ニ高度ノ貧血ヲ来シ、顔面蒼白色トナリ、身体無力、眩暈、耳鳴ヲ来シ、
脈搏頻且少トナル事アリ。

診断 ハ血液ノ證明ニ非ズシテ、鼻孔其位置及原因ヲ知ルニアリ。
即鼻孔ヨリ流出スル血液ハ鼻腔ヨリ来ルカ、或ハ其近接部位ノ何レヨリ来ルモ
ノナルカヲ知ルヲ要ス、衄血ノ各々場合ニ於イテハ、後、咽喉壁ヲ検査スル事最
モ大切ナリ、何トナレバ往々血液ガ後鼻孔ヨリ後方ニ流下スル事アリテ、其際
鼻孔ヨリハ少シモ流出セズ、恰モ衄血歇止セルガ如キ觀ヲ呈スル事アルヲ以ツ
テナリ。

前考
咽血右ノ時ハ
右手ノ小指ハ
ノ生際爪ト
肉トニカ、ル
用ニ小灸ス
ベシ蓋々止
血ス

療法 患者ノ頭部ヲ後方ニ傾ケ、外鼻翼ヲ圧シ、又ハ單純ナル綿球ヲ充填スル
事ニヨリテ止血スルヲ得ベク、強キ出血ノ際ニハ患者ニ安靜ヲ命ジ、時ニ噴涕
ヲ避ケシメ、出血側ノ鼻孔ヲ下ニシテ平臥セシムベシ。
鍼灸療法トシテハ、後頸部並ニ肩背部即ハ天柱、凡池、肩中、肩
外、大椎、身柱、大抒等ニ於イテ、適宜取捨選擇シテ利鍼五分乃至一寸、灸
各五壯乃至七壯シ尚上肢(三里、曲池)下肢(三里)等ニモ施鍼、施灸スベシ。

第四 急性喉頭炎 Aruter Kehkopkataru (獨)

原因 感冒ハ最も頻繁ナル原因トナル。
其他鼻及咽頭ノ急性加答兒ノ際原發的、又ハ熱発的ニ来リ、又大氣道及気管ニ
於ケル粘膜炎加答兒ノ上行ニヨリテ発生スル事アリ。
過度ノ暴談、號叫、声楽等常ニ喉頭ヲ過勞スル時ハ本病ニ罹リ易ク、又喉頭粘
膜ニ直接ニ来ル刺戟、即塵埃、煤烟、有毒瓦斯、塩酸、硝酸等ノ吸入、其他喫煙
過度、飲酒等モ本病ノ原因トナル。
麻疹チフス、猩紅熱、丹毒等ノ併発症、又ハ流発症トシテ来ル。

鼻加答兒、咽頭加答兒ノ原因ニ一致シタル原因ニヨリテ来ル。
症状及解剖的変化 本病ノ初期ニ於イテハ喉頭部ニ搔痒感、又ハ異物ノ行スル
ガ如キ感アリ、頻ニ咳嗽刺戟ヲ発シ、後ニハ刺スガ如ク、灼クガ如ク疼痛感ヲ
有スル事アリ、此際長時間談話ヲ持続スレバ、疼痛ヲ増シ、外部ヨリ喉頭部ヲ
圧迫スレバ、疼痛ヲ発スル事アリ、但シ喉頭縮核ニ於ケルガ如ク必発ノ症候ニ
非ズ、程度ノ皆ハ声音ノ嘶啞スル迄全ク病感無キ事アリ、時ニハ全身倦怠、輕
度ノ頭痛又ハ僅少ノ発熱ヲ来ス事アリ、殊ニ幼年者ニ於イテ然リトス、大人ニ
シテ高熱ヲ発スル場合ニハ多ク傳染病、殊ニコインフルエンザニ罹リ本病ハ
是ニ併発セル事多シ。
咳嗽ハ屢々来ルモノニシテ、既ニ粗雑ナル嗅レタル音聲ニテ、喉頭咳嗽ナルヲ
知ル、而シテ始メハ多ク乾咳ニシテ、僅ニ透明硝子様ノ喀痰ヲ吐出スルノミナ
レドモ、後ニハ上皮細胞ヲ含メル類絲色膿様ノモノヲ吐出シ、時ニハ血色ノ喀
痰ヲ出ス事アリ。
本症ノ状ニテ緊要ナルハ、声音ノ喪失ニシテ、多クノ場合はノミニテ診斷スル
事ヲ得、是声帯ハ炎症ノ爲ニ肥厚シ、其表面粗雑トナリ、発聲ノ際其両側ガ

ミク持運シ得ザル爲ナリ、其度合スイニ異リ、單純ナル組織又ハ醜濁ヨリ全ク無クニ至ル階級アリ。

喉嚨蓋ヲ以ツテ破スレバ、加答兒ノ強弱ニヨリ種々ナル程度ノ粘膜ノ発赤腫脹ヲ察スル見ル、通常兩側同時ニ起ナル、モノナルモ、右シ一側ノミ慢ナル、場合ハ、積積又ハ微毒ノ疑ヒヲ有ス、但シ劇外トナリテ一側ノミ起ニ強ク允サルル事アリ、喉嚨粘膜ニハ尋々粘痰種々ハ種々ノ或着物ヲ見、殊ニ炎症程度ナル時ハ声帯ニ表面的癰爛性潰瘍ヲ生ズル事アリ、スハニ於イテハ本病ノ爲ニ危險ノ症候ヲ呈スル事無キモ、小兒ニアリテハ其喉頭ノ山徑ノ小ナル爲ニ種々ニヨリテ、喉頭狭窄病ヲ発ス（小兒急性喉頭炎）是ヲ慢性粘膜炎ト稱シ、昼間ハ唯軽度ノ声音嘶啞及咳嗽ヲ発スルニ止マズシテ、夜間ニ重症ノ微候無キモ、夜間ニ呼吸困難ヲ発シテ突然醒覺シ、吸気時ニ強音ヲ発シ、粘痰種々粘痰即響無キ大ノ吹エルガ如キ咳嗽アリテ、恰モ眞性粘膜炎ノ如シ、眞性粘膜炎ト異ル点ハ喉頭内ニ義膜ヲ発見セズシテ、声帯以下ノ粘膜ノ腫脹ヲ現ハセル事、一時乃至數時間後ニ、自ラ治癒スル事、再三反覆シテ発スル事等ナリ。

同時發スル事アリ、慢性ニ移行スル場合アルヲ以ツテ、常ニ完全ナル治癒ヲ期スベシ。

療法 予防法ヲ講ズルヲ第一トス、即チ塵埃、煤煙等アル空气中ニ滞在シ、又ハ作業スル事ヲ避ケ、高声及長時間ノ談話ヲ慎シムベシ、喫煙、飲酒及温キ飲料ヲ同ヒザルヲ佳リス、尚鍼灸療法トシテハ迷支神経ノ上下喉頭神経ニ反射的刺戟ヲ傳達スベク、且又筋療法ノ目的ノ本ニ喉頭部、肩胛部（天柱、風池、天髎、肩外、大抒、附介）ニ刺戟直刺五分乃至一寸五分、灸ヒ此乃至十一壯シ、又前頸部（天突）ニ灸十一壯乃至十五壯スルモ佳ナリ、鏡咳ニモ姜葱煎着ナリ。

第五 慢性喉頭加答兒 *Chroniche Kehlkopfkatarrh* (患)

原因 本症ハ急性症ヨリ続発スル事アリ、或ハ始メヨリ徐々ニ本病ヲ発スル事アリ、本病ハ多クハ職業的疾患ニシテ、演説者、教師、声楽家、士官等喉頭ヲ過勞スル者、又ハ強キ塵埃ヲ被ル職業ニ多シ。

過度ノ喫煙飲酒ニヨリ、又肺結核、梅毒、腎臟病及心臟病ノ際ニモ又是ヲ発ス

ル事アリ。

症候 自覚的症候ハ喉頭部ニ於ケル燥灼、搔痒、乾燥等ノ異常感アリ、他覚的ニハ声音啞喑ハ本病ニモ發シテ、其程度ハ種々ナル場合、又種々ナル時間ニ於テ大イニ異ルモノアリ。

發聲ノ場合ハ朝ハ全ク聲ヲ發スルモ、少シク發聲ヲ欲クレバ、忽チ啞喑ナル音声トアル、而シテ本病ハ常ニ嚔咳及咳嗽ヲ發シ、其咳嗽ハ喉レグル深ク且粗植ナル響音ヲ發ス、嚔咳ハ一般ニ少量ニシテ、粘痰様ノモノナレドモ、時ニハ血痰様ノ事アリ。

喉頭鏡検査ニヨレバ、粘膜炎未腫脹ヲ示シ、急性症ト類似ス、時トシテ區別シ難キ事アリ。然シ色又ハ濁赤色ノ外觀ニ呈スル事多シ。

本病ノ発赤腫脹ハ瀰漫性ノ事アリ、又各部分ニ限局ナル、事アリ、即チ声帯会厭部及披裂会厭、後頭後壁及仮声門等ヲ侵スモノトス、殊ニ仮声門ノ腫脹高及ナル時ハ爲ニ声帯ヲ被ヒ聲ヲ妨グル事アリ。

ウイルヒヨリ氏ハ慢性ノ判別ニヨリ、粘膜炎上層ノ増殖、並ニ其上層ノ再化ヲ来スモノヲ名ヅケテ喉頭硬皮症ト稱ヒシ、稀ニハ本病ニ於イテ声門下部ノ粘膜炎ニ甚

ダシキ炎症増殖ヲ来ス事アリ、所謂肥厚性声門下炎之ナリ、此際声音啞喑及喉頭狭窄ヲ示シ、増殖甚ダシキニ至レバ、呼吸困難トナリ窒息ヲ来ス事アリ。

豫後 直接生命ニ危険ヲ来ス事稀ナレドモ、極メテ頑固ナル疾病ニシテ、原因ヲ全ク除去スルニアラザレバ治癒願ル困難ナリ。

療法 原因ヲ除去スルニ努ムベキハ勿論ナルモ、談話発聲等ヲ避ケ、温室ニ静養シ、喉頭粘膜炎ヲ利乾ヒザル様ニ掛ケザルベカラズ。

鍼灸療法トシテハ前項急性症ニ於ケルガ如ク、反射的、且誘導的ノ目的ノ本ニ、後頸部、肩背部等へ施鍼、施灸シ、尙茲此療法ノ目的ニテ、背脊兩側及腰椎側(膽俞、脾俞、胃俞、三焦俞、腎俞、大腸俞)ニ施灸スル事凡此乃至十一世持續スル時ハ次シテ後列ニ帰セザルナリ。

第六 聲門水腫 Glottisödem (癰)

原因 本病ハ大人殊ニ男性ニ多ク、喉頭粘膜炎下組織及軟骨膜ニ於ケル炎症ニ続発スルモノニシテ、結核、癌腫、梅毒ノ際ニ發生シ、其他急性傳染病、即チ腸チフス、痘瘡、丹毒等ノ経過中ニ危険ナル合併症トシテ来ル事アリ、烈シキ器械

的又ハ化学的刺戟、即熱、蒸氣、刺戟性瓦斯等ノ吸入、喉頭ノ外傷、又ハ喉頭内ニ侵入セル異物等モ、時ニ本症ノ原因トナル。

本病ハ時ニヨルト隣接部ノ炎症、即急性咽喉炎、耳下腺炎、扁桃腺炎ニ於ケル副水腫トシテ發生ス、又稀ニハ七臟病、脚氣、慢性呼吸器病、癩瘡等ニ於ケル全身水腫ノ一部トシテ来ル事アリ、但シ急性及慢性腎臟炎ニアリテハ、他部ノ水腫無キ時ニ於イテ、急ニ声門水腫ヲ来ス事ハ屢々見ル処ナリ。

症候 本症ハ或ハ急ニ、或ハ除々ニ発ス、甲ハ炎症水腫ニシテ、乙ハ水腫性ナリ、其ノ主徴ハ喉頭ノ狭窄ニシテ、吸氣的呼吸困難及吸氣時ノ胸部陥没ヲ来シ、且吸氣時ニ高キ喉頭喘鳴ヲ発シ、空氣吸入不充分ノ結果、鼻翼ハ拡張シ、声音ハ全ク嘶嚙シ、患者ハ起坐呼吸ヲ嘗ニ至ル、呼吸困難増進スレバ、多クハ顔面蒼白、冷汗、皮膚厥冷シ遂ニ窒息死ヲ来ス。

予後 不良ナリ

療法 外科的手術ヲ以ツテ、気管切開術ヲ施スノ外他ニ施スベキ療法無キヲ以ツテ到底手術灸治ノ及バザル処ナリ、唯僅ニ対症療法ニ止マルベシ、輕ク症候的診断ノ結果、或ハ單純ナル他疾患ト誤リ、瘰癧ニ施術シテ、其医療時期ヲ過

ラザルベク茲ニ大略ヲ記セシ所以ナリ。

第七 喉頭筋麻痺 Kehlkopf- und Kehlkopfmuskellähmung (獨)

原因 筋肉性ト神經性ノ二種ニ區別ス、然レド臨床ニ此兩者ヲ區別スル事困難ナリ、筋肉性^①喉頭筋^②麻痺ハ、急性及慢性喉頭加答兒及雷余ノ喉頭疾患ニ続発スルモノニシテ、筋肉ノ円形細胞浸潤ヲ来シ、筋肉ガ充分収縮シ能ハザル為ニ起ルモノナリ、其他貧血及萎黃病ノ為ニ来ル事アリ、神經性^③喉頭筋^④麻痺ハ中枢性、末梢性、官能性ニ来ルモノトス。

(一) 中枢性^①麻痺ハ延髄ノ疾患ニテ、喉頭神經ノ侵害セラレ、時ニ来ルモノニシテ、延髄球^⑤ノ萎縮、多発性腦脊髓硬化症及脊髄癆等ニ発ス。(二) 末梢性^②麻痺ハ四肢神經ノ経路ノ障礙ニ稿スル事多シ、即喉嚨ニ於ケル炎症ノ腫瘍、又ハ骨膜疾患、頸部ニ於ケル外傷、甲状腺腫、食餌癌等ヨリ来ル。(三) 官能性^③麻痺ハ解剖的变化無クシテ発スルモノニシテ、ヒステリーノ際ニ最も屢々見ラ見ル、其他予官病、寄生蟲ノ為ニ本症ヲ發ス、是ヲ反射性^④麻痺ト云フ。

症候 喉頭鏡ニヨリ診定シ得ベシ。

(甲) 上喉頭神経の痺 喉頭上部会厭及其周囲粘膜、知覚神経ニシテ、且前環状甲狀筋ノ運動ヲ司ル故ニ、前環状甲狀筋ノ痺ニテハ、声帯緊張セザルヲ以テ、其形不正トナリ、高調ノ発声ヲ阻礙シ、且容易ニ疲労ス。患側ノ声帯ハ、健側ニ比シテ下方ニアリ。

(乙) 下喉頭神経即回帰神経ノ痺 下部喉頭粘膜ノ知覚ヲ司リ、且環状甲狀筋以外ノ全喉頭ノ運動神経ナリ。

(1) 後環状破裂筋ノ痺 ニアリテハ声帯ハ吸息時ニ当リ、互ニ隔離スル事能ハザルニヨリ、吸息作用ハ困難トナリテ、嚔声ヲ帯ブ、故ニ患者ハ吸息的呼吸困難ヲ訴フ、偏側ノ痺ニアリテハ、呼吸困難著シカラズ。

(2) 破裂間筋ノ痺 軍世ニ未ル事能ニシテ、常ニ声音嘶頓ヲ来ス、喉頭鏡ヲ以テ視スレバ発声ノ際声門ノ後端開放シ、三角形ノ破裂ヲ形成スルヲ見ル。

(3) 内甲狀破裂筋ノ痺 該筋ノ痺ハ声音嘶頓ノ主要ナル原因ヲナス、此ノ痺ハ一側又ハ両側ニ来リ、屢々破裂筋及環状甲狀筋ノ痺ト同時ニ来ル、両側ノ痺ニアリテハ声門ノ完全閉鎖ヲ来サズシテ、楕円形ノ間隙ヲ残シ、片側ノ痺ニアリテハ患側声帯ハ側方ニ向ヒ彎曲ス。

(4) 完全回帰神経ノ痺 患側ノ声帯ハ呼吸及発声ノ際、中央位置ニアリテ全く不同トナル、本症ニテハ呼吸及発声ニ障礙ヲ存セス、

両側回帰神経ノ痺ニアリテハ、声帯ハ所謂死体位置ヲ呈ス、呼吸困難無シト雖モ、咳嗽及音声ヲ発スル事能ハザルナリ。

徴後 原因ニヨリテ異リ、ヒステリーニ急性症ヨリ来ルモノハ、予後注々佳良ナリ、組織ノ変性ヨリ来ルモノハ固ヨリ不良ナリ。

療法 其原因ヲ確メ、輕症アル時ハ反射的作用トシテ頸部(天柱、凡池、天應ニ各直刺ハ介乃至一寸ニ三分、灸五壯乃至九壯シ、尚全頸椎ノ両側一指痛頸ノ部、肩背部ハ肩中、肩外、天膠、大行)ヨリ取捨撰擇シテ鍼直刺五分乃至一寸、灸五壯乃至九壯スベシ。

然レドモ既ニ重症ナル場合、或ハ其原因鍼灸医術ノ不適應症ナル場合ハ、速ニ医治ヲ致ヘ、以ツテ治療時期ヲ過ラザル様努メザルベカラズ。

第八 聲門痙攣 *Stimmritzenkrampf* (癲)

原因 本病ハ生後半年乃至三歳未満ノ小児ヲ侵シ、尙薄病、腺病質又ハ消化器

疾患ヲ有スルモノニ発シ、又小児ノ生齒期又ハ哺乳ヲ廃スル時ニ発スル事アリ、
本病ニ罹レル小児ハ多ク尙傳染病ノ徵候ヲ有ス。
(130)

寒肩、精神興奮(驚愕、喜悅、啼泣等)ハ本病ノ誘因トナル事アリ。
症状 本病ハ多ク門等前兆ナクシテ突然発作シ、高キ有聲性ノ吸氣喘鳴ヲ以テ
始マル、而シテ後呼吸ハ全ク歇止スルニ至ル、此際患児不安トナリ顔面蒼白色
ヲ示シ、甚ダシキ鬱血ヲ呈シ、眼球ヲ回轉シ、呼吸ヲ試ミントスルニ之ヲ行フ
ヲ得ズ、重症ニアリテハ一時人事不省ニ陥ル事アリ、此際瞳孔縮小シ、皮膚ハ
蒼白色ヲ呈シ、口唇及手指ハ青色ニ變ズ、其他頭部ニ冷汗ヲ発シ、手足ニ痙攣
ヲ発スル事モ少ナカラズ。

発作ノ時流ハ數秒間ナルヲ多シトス、而シテ発作止メバ一二ノ雜音ヲ伴ヘル深
呼吸ヲナセル後、程ナク全ク常態ニ復ス。
発作ハ僅ナル間歇ヲ以ツテ反復スル事アリ、或ハ數周ノ後ニ至リテ再び発現ス
ルアリ、又ハ唯一回ノ発作ニテ止ル事アリ。
稀ニ発作中ニ死スルモノアリ、ソハ窒息、瀕ニアラズシテ、中心性七臟テ痺ニ
ヨルモノナリ。

予後 疾シテ輕視スベカラズ。

療法 発作時患児ヲ抱キテ顔面ニ冷水ヲ澆ギ、鍼灸療法トシテハ後頸部(天柱
風池)ニ細鍼ヲ以テ三分乃至五分直刺シ、小灸同ジク三壯乃至五壯シ、尙上肢
(三里、曲池、合谷)下肢(三里)等ニ刺鍼直刺四五分、灸五壯スベシ、尚醫
家ニ於ケル不予泥ヲ胸部ニ貼用スルノ理由ト等シク、背部、胸部ニ細鍼ヲ以テ
接觸的皮膚鍼ヲ施スモ可ナリ、其施術方法宜シキヲ得バ、一時其発作ヲ緩解ス
ベシ。

而シテ平素ハ強壯療法ノ目的ノ本ニ腰部及背部ニ皮膚鍼ヲ施スベシ。

第九 急性氣管枝炎 (Akute Bronchial-Katarrh) (編)

原因 感冒ハ本病原因中最モ頻繁ナルモノトス(感冒性氣管枝炎カ答兒)、刺戟瓦
斯(亞硫酸瓦斯、塩酸)等ノ吸入其他喫煙過度モ本病ノ原因タリ得ベシ、又傳染
性喀痰ノ通過、例ヘバ腐敗性氣管枝炎、肺炎、肺結核等ノ場合ニ發見シ、急性
傳染病(麻疹、百日咳、コインフルエンザ、猩紅熱等)ニ從テ發ス。

尚隣接器管ノ炎症ノ上行、或ハ下行シテ氣管枝ニ波及スル事多シ、即鼻腔、咽
(131)

頸、喉頭、肺臓等ノ炎症ノ如シ。

症候 咳嗽、喀痰及聽診的処見ヲ以テ主徴トス。

咳嗽ハ時ニハ強烈又ハ輕微ナル場合アリ、気管分岐部附近ニ炎症アル時ハ強キヲ伴フス、流咳ノ副症候トシテ胸前痛、胸骨裏面痛、嘔声、食慾不進ヲ伴フ事アリ、喀痰ハ最初粘稠子練ニシテ漸次膿性ニ傾キ、所謂生痰ヨリ熟痰ニ移リ、一時痰量ヲ増シ最後ニ減量シテ濃縮ス。

聽診的所見ニ於イテハ、分泌物ノ性状及存在部ニ應ジ乾性、濕性、水泡音ノ各種ノ型ヲ展ク。

粘稠液大気管枝ニアレバ頻軒音、中気管枝ニアレバ留聲呼吸音(乾性気管枝加答兒)、又分泌物液状ナレバ気管枝ノ大小ニ應ジテ濕性囉音、即水泡音ノ大中小各單獨ニ、又種々混合シテ存ス。

打診上ニハ概ネ得ル処無キヲ普通トス、熱候ハ無熱ノ場合存スレドモ通例輕度乃至中等度ノ発熱ヲ伴ヒ、時トシテ高度ヲ示ス事アリ。

若シ本病ノ発熱持続又鼻騰スレバ、併発症又ハ続発症、殊ニ加答兒性肺炎、肺炎ス、肺結核等ニツイテ注意スベシ。

①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿

①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿ 通常大気管枝加答兒ノ漸次細小気管ニ下行スルニヨリテ本症ヲ発スルモノナレドモ、稀ニハ初メヨリモ細気管枝加答兒ヲ発スル事アリ(空

主トシテ小兒去人及衰弱セル者ニ於イテ発シ、其症状中最モ現著ナルハ呼吸困難ナリ、大気管枝加答兒ニ於イテハ此徵候無シ、而シテ其呼吸数非常ニ増加シ、患兒ニ於イテハ哺乳スル事能ハザルニ至ル、斯クノ如ク本症ニ於イテハ、細小

気管枝ニ狭窄アリテ空気肺臓ニ侵入シ難キヲ以テ、胸部ニ吸氣的陥没ヲ起シ、殊ニ小兒ハ其胸廓柔軟ナルヲ以テ、肋軟骨、肋骨、胸骨軟状突起、心窩等陥没

ス、其他鼻翼呼吸ヲ現ハシ、副呼吸筋ノ働作スルヲ見ル、病勢進ムニ從ヒ皮膚

ハ蒼白色ヲ呈シ、遂ニ炭酸中毒症ヲ起スニ至ルベシ、理學的所見トシテ、本病

ヲ起シタル部位ニハ、聽診上微小ノ水泡音ヲ多數ニ聽クヲ特有トス、粘膜炎

眼スル結果、細管ノ内腔ハ容易ニ狹細トナリ、又ハ消失ス、又容易ク閉塞セラレ、為ニ呼吸音ハ微弱トナリ、又ハ消失ス、純粹ノ毛細気管枝加答兒ニアリテハ、打診上別ニ異常ヲ認メズ、喀痰ノ量ハ普通多量ナラズ、性質ハ粘痰又ハ粘痰膿性ナル事多シ。

咳嗽ハ種々ナルモ、時ニハ乾咳候ニ類シテ、祛痰困難ノ形ヲ呈ス。
体温ハ三十八九度ノ間ヲ昇降シ、多クハ弛張性ニシテ朝ニ下リ、夕ニ上ル、若
シ三十九度以上ノ熱、數日間稽留スル時ハ、肺炎^①（所謂気管枝肺炎）ヲ合併シ
タルモノト認ムベシ、脉搏ハ大イニ増加シ、病勢危篤ニ赴ク時ハ其脈細小軟弱
ニシテ、殆ド指頭ニ觸レ難キニ至ル事アリ。

治療 概ネ良ナレドモ、毛細気管枝加答児ニアリテハ屢々不良ナル事アリ、然
レドモ適當ノ時期ニ適當ノ治療ヲ施セバ多ク全瘳ス。
療法 予防法トシテハ身体虚弱ニシテ、感冒ニ罹リ易キ者ハ冷水摩擦ヲ行ヒテ
皮膚ヲ強壯ナラシメ、塵埃多キ或ハ寒冷ナル空気を避ケ、衣類ハ温ニシテ輕キ
モノヲ用フベシ。

鍼灸療法トシテハ誘導法ノ目的ノ下ニ後頸部（完骨、天柱、風池）ニ鍼五分乃
至一寸五分、灸ヒビ乃至凡壯シ、又肩胛部、背部（肩中、肩外、大杼、風門、
肺俞、厥陰俞、附分、膏肓）等ヨリ取捨選擇シ鍼直刺五分乃至七分、灸ヒ壯乃
至十一壯スベシ、尚前頸部（天突）ニ施灸十一壯スベシ、鐘咳祛痰ニ多クニ効
アリ、其回復期ニ至レバ交感神経ヲ鼓舞シ、以テ消化吸収同化機能ヲ盛ンナラ

シムベク、腰部ニ施鍼、灸灸スベシ、小児ニハ皮膚鍼大イニ佳ナリ。
毛細気管枝加答児ニアリテモ、熱候ノ如何ニヨリ施術シテ可ナルモ、往々肺炎
ニ移行スルヲ以テ、宜シク其時期ヲ誤ルベカラス。

第十 慢性気管枝加答児 Chronischer Bronchialkatarrh (編)

原因 急性気管枝加答児ニ於ケル原因ト略々同一ナリ、即久時ニ至ル塵埃、刺
戟性瓦斯ノ吸入「ヨードカリウム」重砒酸ノ中毒、其他職業的疾患ノ形ヲナシ、
石工、製粉工業、化学的刺戟、瓦斯工業等ニ従事スル者、飛塵ノ多キ室内ニ作
業スルモノ（呉服店員、紙商等）ハ本病ノ侵襲ヲ蒙リ易シ、尚慢性呼吸器病（鼻
疾、咽喉、喉頭等ノ慢性疾患、百日咳ノ如ク永続咳嗽病等）心臟病、腎臓病等ニ
際シテハ、本病ヲ併発シ易シ、又本病ハ屢々急性症ヨリ転ジ来ルモノナリ。
症候 本病ハ大中気管枝ニ発スルモノニシテ、其主徴ハ咳嗽喀痰及呼吸困難ナ
リ、咳嗽ノ状態ハ甚ダ種々ニシテ、或ハ輕易ナル事アリ、或ハ劇甚ニシテ寢者
ヲ困却セシムル事アリ、咳嗽ハ通常朝夕ニ強ク、氣候ノ変換時及寒冷ノ気節ニ
ハ増劇スル事アリ（冬期咳嗽）、喀痰ノ量及性質モ区々ニ様ナラズ、或ハ僅少ナ

ル事アリ、或ハ多量ナル事アリ。

喀痰ハ粘膿状、漿液状、膿状、或ハ血液状等一様ナラザレドモ、其中粘液膿状最モ多シ。

本病ノ指々重症ナルモノニアリテハ、常ニ呼吸困難ヲ伴フ。理学的診査ヲ行フニ、打診上特別ノ発見無シ、濁音ヲ呈スルハ合併症ノ為ナリ、軟性音ヲ呈スルハ、肺気腫ナル場合多シ。

聽診上ニモ定型無ク、種々ノ乾性囉音、又ハ濕性囉音ヲ聽クヲ常トス、発熱モ固有ナラズ、発熱ノ事モ多ク、又軽度ノ発熱ヲ見ル事モアリ。本病ハ喀痰ノ性状及聽診的発見ニヨリ、更ニ左ノ四症ニ區別ス。

A. 乾性気管枝加答兒 乾咳症キモ分泌初僅少ニシテ、粘稠透明、清干様粘痰ナリ、聽診上乾性囉音ヲ聽クノミ。

B. 單純性気管枝漏 患者頗ル多量ノ粘液膿様ノ痰ヲ咯出ス、喀痰ノ全ク膿ヨリ成レル場合アリ、特ニ是ヲ氣管枝膿漏ト稱ス。

理学的診査ニヨリテハ得ル処少シサレド、肺ノ下部ニ於イテハ通常饒多ノ水泡音ヲ聽ク。

① 漿液性気管枝漏 (粘液加答兒) 甚ダ稀薄ノ痰患ニシテ、稀薄透明無色ニシテ、泡沫ニ富メル多量ノ漿液痰ヲ咯出ス、喀痰スルニハ劇甚ナ咳嗽ヲ要シ、時々喘息ノ如キ呼吸困難ヲ発作シ、痰ヲ咯出スレバ其発作消散ス(一名濕性喘息ノ名アリ)、聽診上濕性水泡音ヲ聽ク。

D. 腐敗性気管枝加答兒 本症ハ気管枝内喀痰ノ腐敗菌ノ為ニ腐敗シテ、臭ヲ放ツニ至ルモノヲ言フ、即喀痰ノ性状ヲ以テ本病ノ特有ナル徴トス、喀痰ノ量多量ニシテ患者ノ呼吸ニ噴氣ヲ伴ヒ、傍人ヲシテ不快ノ感ヲ抱カシムシノミナラズ、患者自身是ヲ為ニ食事ヲ忌ムニ至ル、喀痰ヲ放置スレバ自ラ三層ニ分ル。

最上層ハ泡沫ヨリ成リ、オニ層ハ毛様絨毛ノ粘液様ノ漿液ヨリ成リ、最下層ハ濃厚ナル濃液層ナリ。

予後 頗ル頑固ナル疾患ニシテ、其経過緩慢ナリ、其病因ヲ除カサレバ治療困難ナリ、殊ニ高齢者ニ在テハ往々生命ヲ危険ナラシム。

療法 本病ガ職業、住宅、習癖等ニ起因スルモノハ其下原因ヲ改善スルヲ必要トシ、氣候的影響ヲ受ク事甚ダシキ患者ハ、氣候適和ノ地ニ送ルヲ可トス、

前頁直ハ腐敗性気管枝炎ニ類ス

鍼灸療法トシテハ前項急性症ニ於イテ述ベタルモノヲ適宜準用スベシ、慢性症ト雖モ其施術方法宜シキヲ得バ大イニ効アリ、但シ腐敗性気管枝炎及衰弱甚ダシキ患者ニ対シテハ、速ニ医治ヲ任スベキナリ。

第十一 気管枝喘息 Asthima bronchiale (癩)

原因 本病ノ本態ハ未ダ尚不明ナレドモ、恐ラクハ呼吸中枢ノ病変ニ因スルモノナラン、而シテ其原因ヲ三種ニ區別スルヲ得ベシ。

即中枢性、末梢性反射性是ナリ。

A 中枢性 延髓ニ於ケル出血、軟化腫瘍、鉛、水銀、中毒、尿毒症等ノ為ニ気管枝括約筋ニ分佈スル迷走神経ヲ剝脱スルニヨリ起ル(神経性気管枝喘息即是ナリ)。

B 末梢性 気管枝粘膜ノ急性腫脹ニヨリ起ル(所謂加答兒性気管枝喘息是アリ)此説ノ論議トスル処ハ次ノ如シ。

即感冒ニヨリテ喘息ヲ発スル場合ニハ、先ヅ鼻粘膜ニ腫脹ヲ来シ、此腫脹ハ漸次下方ニ及ビ気管枝粘膜ニ於イテモ、是ト同様ノ変化ヲ起シ、是ガ為

ニ喘息発作ヲ現スト稱ス。

C 反射性 諸般ノ鼻疾患、慢性喉頭炎、扁桃腺肥大、便秘、腸寄生蟲、子宮

泣置皮膚疥癩患ニ於イテ来ル。

本病ハ神経性男子ニ於イテ多ク、四十才以上ニ発スル者多シ。

職業上喘息ニ罹リ易キモノハ、発声器ヲ過度ニ使用スル者、例ヘバ説教者及講談師、其他藝術家、教師ナリ、頸部ニ於ケル悪性腫瘍及腫脹セル淋巴腺ノ為ニ迷走神経剝脱セラレ、以テ本病ヲ起来スル事アリ。

症候 本病ノ主徴ハ特有ナル喘息発作ニシテ、稀ニ前駆症ヲ現ス事アリ、即全身倦怠、後頭前頭ノ圧感、喉頭若シクハ胃部ニ於ケル異常ノ感、欠伸、精神ノ発揚、若シクハ鬱憂等ナリ、サレドモクノ場合此前駆症無シ、通常発作ハ忽然トシテ現ル、モノニシテ、殊ニ夜間ニ熟眠セル患者ノ頓ニ胸内苦悶呼吸困難ノ感ヲ以テ醒覺シ、胸廓狹隘ノ感、若クハ絞榨ノ感アリ、殊ニ呼吸ノ困難甚ダシキヲ以テ遊坐呼吸ヲ營ム。

患者ノ顔面紫藍色ヲ呈シ、眼球突出シテ充血シ、苦悶ノ為ニ冷汗ヲ流ス、斯クノ如ク呼吸困難、殊ニ呼吸困難ハ喘息ノ特有ナルモノニシテ、呼吸ハ吸氣ヨリ

モ長ク、二倍三倍乃至四倍ニ至ル、一呼吸ノ時間延長スルヲ以テ、呼吸ノ數ハ却ツテ減少スベシ。

視診[◎]スルニ胸廓ノ運動甚ダ微弱ニシテ、殊ニ下部ニ於イテ著シ、横膈膜ハ持続的ニ低位ニアレドモ、其運動ヲ認メ得ベシ。

胸部ヲ打診スルニ、低調ナル鼓音ヲ呈ス、聽診上呼吸音ハ微弱ニシテ笛声、或ハ射声ヲ發ク、而シテ是等ノ発作ハ一ニ時間ナル事アリ、又數日ノ長キニ亘ル事アリ、其発作終期ニ至レバ、少量ノ粘液痰ヲ喀出ス。

予後 本病ノ発作ハ一見重篤ナルガ如キモ、其予後ハ良ナリ。而シテ本病ノ治否ハ主トシテ、原因ノ如何ニ関ス、少年及壯年ノ喘息ハ治レ易キモ、老人ニ於イテハ治シ難シ。

療法 本症屢々遭遇スル疾患ナリ、発作時ニ於イテハ其鏡蓋ヲ計レバク後頸部(天柱、凡池、兎骨及頸椎ノ兩傍一指幅許ノ部)刺鍼直刺五分乃至一寸五分、灸五壯乃至七壯シ、肩胛間部(大杆、凡門、肺俞)棘上筋部(肩中、肩外、肩背)ニ適宜刺鍼施灸スベシ、尚前頸部(天突)ニ灸十五壯位施スモ可ナリ、神経性症ノ如キハ養和顯著ナリ。

又本病ハ発作後多少胃部膨滿、膈腹筋ノ緊張ヲ胎スモ、アリ、此際腹部(三臑俞、腎俞、大腸俞、少腸俞)ノ渣穴ヨリ、適宜取捨揉摩シ疾病ノ輕重ニ依リテ對症療法ヲ施スベシ。

間歇時ニハ常ニ原因的療法ニ努メ、適當ナル空氣中ニ棲息セシメ、食事モ過食ヲ避ケ、便通ヲ規則正シクスベシ、野外運動モ又可ナリ。

第十二 肺氣腫 *Emphysem* (癩)

原因及解剖的变化 本病ハ肺臟彈力ノ減弱、若クハ亡失ニヨリテ生ルモノニシテ、此關係ニ於ケル諸般ノ原因ハ皆本病ヲ生スモノトス。

即チ老年ニ於ケル彈力減弱、或職業ニ於ケル勞力作用(演說、重荷、登山)其他肺ノ炎症、毒瓦斯吸入及劇シキ咳嗽刺戟ヲ伴フ、慢性氣管枝炎並ニ喘息等内正亢進ヲ生スベキ原因ノ永続ニヨル事多シ。

或ハス脊椎ノ外傷炎症及習慣等ニヨル脊椎彎曲症ノ為ニ、胸腔容積ノ擴大ニ由來スル事アリ。

其解剖的变化ニヨリ實質性肺氣腫及代償性肺氣腫ヲ區別ス。

代償性肺気腫 = アリテハ、肺胞道及肺胞ノ永久性 = 拡張シ、肺臓ノ一部分 = 限
寄スト雖モ、實質性肺気腫 = アリテハ、肺胞及漏斗ノ拡張スルノミナラズ、肺
胞隔壁ハ消失シ、肺實質 = 於イテ彈力纖維及肺胞毛細管ハ頑癢シ、且両肺臟ヲ
之汎性 = 侵ス（實質性汎性肺気腫）

気腫 = 陥リタル肺臓組織ハ、多ク蒼白色、或ハ淡紅色ヲ呈シ、色素及血液 = 之
シク、是 = 指圧ヲ加フル = 捻髪音甚僅微ナルカ、或ハ全く消失ス。
症状 本病ノ理學的徴ハ、洋樽状胸廓、微弱ナル胸廓運動、觸診上胸廓鞏固、
低調ナル打診的鼓音及紙原音減弱セル肺胞音ナリ。
患者ハ静止時 = ハ呼吸異常ヲ呈セザレトモ、身体ノ運動（歩行、昇階、重荷等）
= アリテハ容易ニ呼吸促進ヲ来ス、高度ノ肺気腫患者 = アリテハ、常ニ著シキ
呼吸困難ヲ来ス場合アリ、其他呼吸困難ガ発作性 = 来ル時ハ、喘息様症状ヲ呈
シ、強固有、喀痰ヲ目セザル = ヨリ是ト區別セラル、場合アリ、咳嗽及喀痰ハ
氣管枝炎ノ度ニ定ジテ發生シ、且ソレ = 從ヒ特有ナル性質ヲ示ス、心臓ハ肺ノ
為 = 被覆セララル、ヲ以テ、其検査 = 困難ヲ感ズ、時 = 心尖搏動ノ全ク消失スル
事アリ、一般ニ心臓濁音取ハ稍々右方 = 拡張シ、後 = ハ又左方ニモ僅ニ拡張ス

呼吸、肺気腫
代償性肺気腫
實質性肺気腫
汎性肺気腫
紙原音減弱
胸廓運動
胸廓鞏固
打診的鼓音
紙原音減弱
呼吸困難
喘息様症状
心尖搏動
心臓濁音

ルモトス。

臨診上 = ハ七音幽微トナリ、肺動脈カニ音ハ小循環ニ於ケル鬱血ノ為 = 愈盛ト
ナルヲ常トス。

然シキ咳嗽ヲ来シ、患者ヲ苦悶セシムル事アリ、又咳嗽ガ発作的 = 来ル事アリ、
喀痰モ氣管枝拡張ヲ有スレバ甚ダ多量ニシテ純膿様、或ハ腐敗性トナル事アリ、
患者ノ体位ハ一種固有ニシテ、胸廓ヲ前方ニ突出シ、頸部ヲ後方ニ偏倚セシム、
是補助呼吸ヲ可及的旺盛ニ作用セシメンガ為ナリ。

總説 本病ノ治療ハ殆ド望ムベカラズ、從ツテ後後可良ナリト言フヲ得ズ、然
レドモ直接生命 = 危険ヲ醸スモノニアラス。

療法 肺気腫 = 向ワテノ治療ハ多ク奏効スルモノニ非ズ、故 = 本病ノ治療法ト
シテハ、先ヅ同時ニ存在スル氣管枝炎ノ治療ヲ行フヲ要ス（前記慢性氣管枝炎加
答兒ノ項参照）若シ氣管枝炎著シク輕快シ、又ハ一時的治療ヲ来ス時ハ、患者
ノ状態ハ大イニ佳良トナルモノナリ。

其他栄養療法トシテ、背椎下部及腰椎側（肝命、膽命、脾命、胃命、三焦命、
腎命、大腸命） = 刺鍼ニ分乃至一寸、灸ヒは乃至十一柱シ、兼ネテ氣管枝炎ニ

置ラザル様注意シ、氣候過暖ナル地ニ移住シ、食餌ノ栄養ヲ怠ラザル様注意スベシ、呼吸器ヲ過度ニ使用スベカラザルハ言ヲマタズ。

第十三 肺臓水腫 Lungenödem (獨)

原因 急性肺水腫ハ中毒ニヨリテ発スル事アリ、屢々肺病、心臓病及其他ノ疾患ノ場合ニ発シ、且多クノ慢性病及傳染病ノ末期ニ於ケル死戰期ニ発ス(死戰性肺水腫)而シテ慢性肺水腫ハ慢性ノ心臓疾患及腎臓疾患ノ経過中ニ発スルモノトス。

今其原因ヲ列举スレバ

- 一、急性中毒 例ヘバ「ヨード」劑ノ通用「エーテル」迷瘴、稀ニ「クロロフォルム」迷瘴ニ於イテ未リ、又「クロロル」硝酸酸化炭素ノ吸入モ本病ヲ招ク。
- 二、肺ノ疾患 即肺結核、「ククルツ」性肺炎等。
- 三、肋膜炎 即渗出性肋膜炎ノ経過中、或ハ肋膜渗出液ヲ穿漏セシメタル後ニ発スル事アリ。
- 四、血管ノ疾患 肺或ハ血管枝ノ血管ノ侵サレタル場合。

五腎臓病 殊ニ萎縮腎

症候 一般ニ其水腫ノ程度ニヨリ種々異ルモ、呼吸困難ハ多クノ場合ニ現ル、モ、ニシテ、實際臨床ニ於イテ肺ノ間質組織ニ液体ノ浸潤セン状態ニハ確的ニ診斷スル事困難ナレドモ、唯此呼吸困難ノミニヨリテ知ル、華アリ、然レテラ肺氣腫ニ液体ノ侵入セル場合ニハ、呼吸困難ニ加フルニ水泡音ヲ聴取スベシ、急性肺水腫ニ於イテハ此呼吸困難ハ急ニ起リ、肺ハ膨脹スル為ニ肺臓境界ハ下行シ、是ヲ打診スルニ初メハ鼓音ヲ呈スルモ、次チニ濁音ニ移行ス、是ヲ聴診スレバ濕性水泡音ヲ聴ク、水腫ガ増加スルニ從ヒ水泡音ニ移行ス。

甚ダシキ時ニハ氣管喘鳴ヲ聴ク事アリ、自覺的ニハ胸内苦悶ヲ呈ス、咳嗽発作ハ初期ニ於イテ激シク、時ニ全ク欬如スル事アレドモ、一般ニ多量ノ無色ノ粘痰乃至稀薄ノ痰ヲ小泡沫ト共ニ喀出ス。時ニ青色ナル事アリ、高度ノ肺血管ノ充血ノ為ニ血線ヲ混ズル事アリ、患者ハ蒼身症ニ陥リ、副呼吸筋ノ努力顯著トナリ、肋間ハ吸氣的陷没ヲ呈ス。

予後 不良、初期ニ当リ原因ヲ除去シ得レバ軽快ヲ来スト雖モ、範圍ノ広大ナルモノニアリテハ致死的転帰ヲ取ルモノナリ。

療法 先ヅ肺臓水腫ヲ診断シタル時ハ、七身共ニ安静ヲオートスベシ、其初期
= 当リ医家ニ於ケル芥子泥、発泡膏ヲ胸部ニ貼用スル理由ト均シク、所謂誘導
法トシテ、背部(胸椎棘突起ノ兩傍)即ハ大肝、凡門、肺俞、厥陰俞、心俞、
膈俞、肝俞、附介、魄戶、膏肓)等ヨリ取捨選擇シ、鍼三分乃至五分刺シ、
灸五炷乃至九炷スベシ、尚前胸部(乳線部)或ハ側胸部ニ温灸ヲ施スモ可ナリ、
予期レザル効果ヲ奏スル事屢々アリ。
然レドモ病既ニ重篤ニ陥リタル場合ハ、速ニ医療ヲ進メザルベカラズ、徒ラニ
在爾日ヲ延シ、斯新ノ眞價ヲ毀損スルガ如キ事アルベカラズ。

第十四 加答兒性肺炎 Katarhalische Pneumonie (痘)

一名気管枝肺炎或ハ小葉性肺炎 Bronchop Nennouie (痘)

原因及解剖的变化 原発性ハ稀ニシテ、殆ド常ニ流発性ニモ細気管枝炎ニ乘リ、
気管枝肺炎ノ名アリ、即凡テノ急性疾患殊ニ「インフルエンザ」麻疹、咳嗽、
痘瘡、猩紅熱、チフス等ノ傳染病ニ乘リ、又多クノ慢性症ニ乘ル、殊ニ小兒ニ
於イテハ麻疹、百日咳、実味納里、後ニ乘リ、貧血性、痼病性栄養不良、向導

病性ナル音是ニ侵サレ易シ、強キ咳嗽ヲ発スル事無ク、又背位ヲ取リテ臥床ス
ルヲ以テ介池物鬱積シ、又是ヲ吸入シ、且組織抵抗力減弱セルニヨリ、微菌累
殖ヲ容易ナラシム。

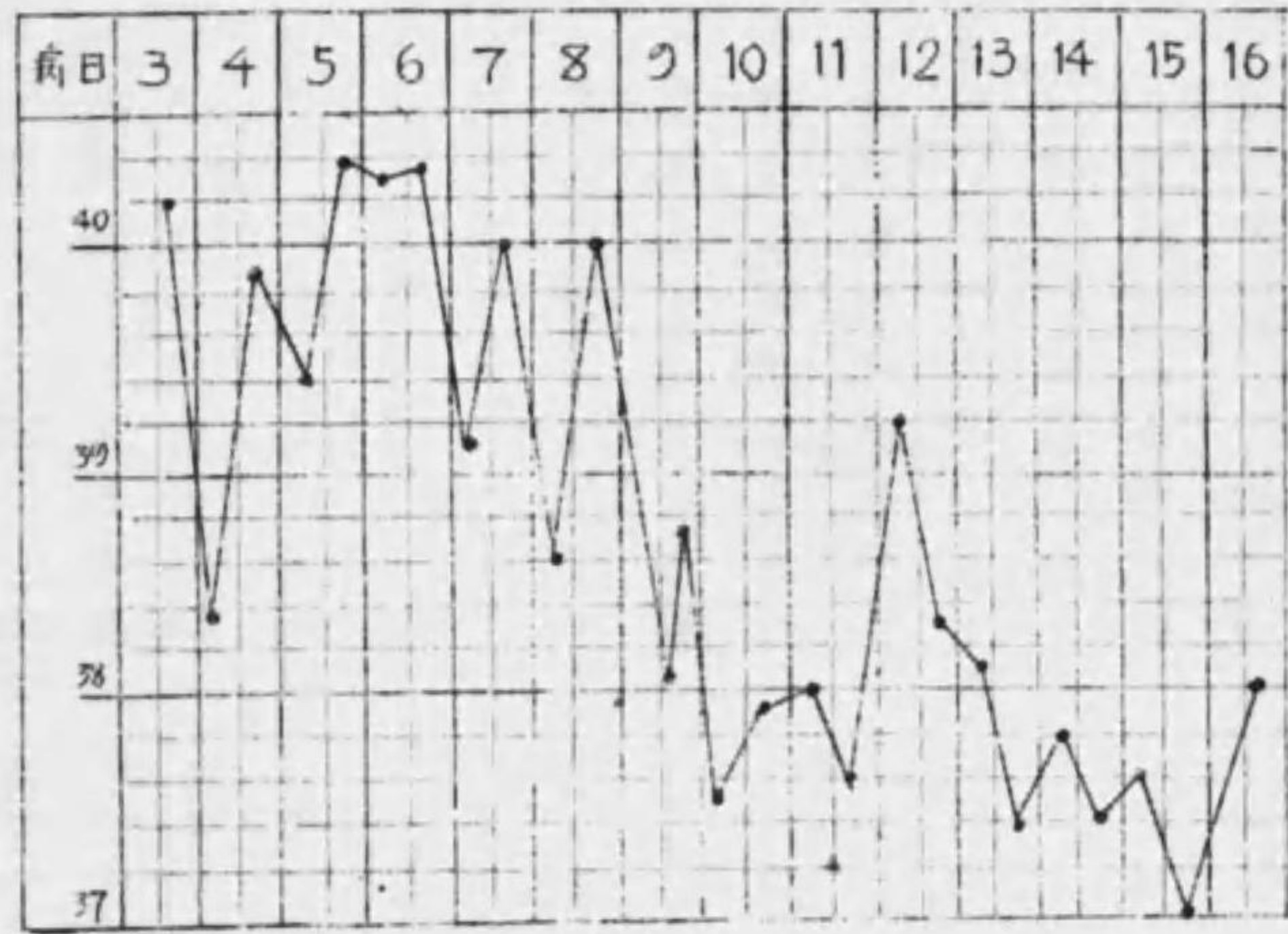
異物性肺炎(吸入性肺炎)誤嚥肺炎(種々ナル原因ニヨル)等亦是ニ属ス。病
竈ハ多ク小葉性ニ散在ス、故ニ屢々他覚的所見極メテ少キカ、又ハ致如ス、小
病竈互ニ癒合スレバ脊柱ニ治ヒ膿状ノ病竈ヲナシ、又ハ大葉性トモナリ得ベシ。
本病ノ発病素ハ諸種ノ分裂菌ニシテ、殊ニ頻繁ナルハフレンケル氏肺炎重球
菌、連鎖状球菌ニシテ、其他葡萄状球菌等モ又本病ノ原因トナル。

症候 疾病初期ハ不明ナル事多ク、通常原発性疾患ノ症候ニ違ギテ起ル、故ニ
其初期ニ於イテハモ細気管枝炎トノ區別困難ナリ。

診斷上肝要ナルハ熱ノ関係ナリ、即平症ハ纖維素性肺炎ニ及レテ其熱不整ニシ
テ強キ発熱アリ(或ハ稍稽留性ナル事アリ)、分利セズシテ大抵徐々ニ散減ス、
脉搏ハ甚ダレク増加シ、一介間四下乃至百六ナラ算シ、呼吸数モ又増加ス、是
熱突ト呼吸障碍ヲ起ストノ為ナリ。

呼吸ハ短クシテ衝クガ如シ、呼吸ハ呻吟ノ状ヲ呈シ言語短促ニシテ継続ス、患

急性加答性肺性炎 = 罹ル
 四歳ノ少メノ体温表
 (アウフヒト氏)



音ノ容貌ハ煩苦ノ状ヲ現ハシ、往々蒼身症ヲ呈スル事アリ。
 咳嗽ハ疼痛性苦悶性ナリ、喀痰ニハ固固ノ事無シ、粘痰膿痰ニシテ時ニ血液混在アリ、併シ鉄錆色ヲ呈スル事無シ。
 理学的所見ハ病竈ノ位置及大いサニヨツテ差アリ、若シ病竈ニシテ深部ニアレバ、唯乾性及濕性雑音ヲ聽クノミナリ、羅音ニ有響性アル時ハ浸潤ノ行スル音ト考ヘ得、又病竈雖即大ニシテ表在性ナル時ハ、輕濁音、気管枝呼吸音又肺膜炎性摩擦音ヲ聽ク事アリ。
 本病ハ其経過ニ從ヒテ急性ト至急性トニ區別ス。

性トニ區別ス。
 合併症 合併症ハ肋膜炎、気胸結核、腎臓炎、心臓炎等ナリ。
 鑑別診断

一 病竈大トナレバ急慢性肺炎ト同シ。
 ニ 毛細血管炎 是ト本病トノ區別ハ容易ナラズ、二十四時間乃至四十八時間以上ニ亘リテ体温三十九度乃至四十一度以上ニ昇リ、而シテ他ニ発熱ノ原因ヲ認メザル時ハ本病ト認ルヲ適當トス。

予後 頗ル重篤ナリ、老人小児ニアリテハ屢々生命ヲ危険ナラシム。ス經久性ノ者ハ肺結核ヲ後発スルガ故ニ予後重篤ナリトス。

療法 先ツ空気流通ノ佳良ナル室内ニ臥褥セシムルヲ要ス。而シテ鍼灸療法トシテハ前項肺感水腫ニ於ケルガ如ク、誘導法ノ目的ノ本ニ胸部及背部(肩胛間部)ニ持灸的温灸ヲ施スベシ。

芥子泥貼用ニモ優ルベシ、然レドモ症状ノ進行程度如何ニヨリテ決シテ鍼灸療法ノミニ任セズ、医療ト相待チ以テ斯術者トシテラノ本分ヲ過ラザル様努メザルベカラス。

第十五 纖維素性肺炎 (Eidvrose Pneumonie) (無)

一名クルツプ性肺炎 (Krupose Pneumonie) (有)

原因 本病ハ頗ル頻繁ナル傳染病ニシテ、一種ノ病原菌即フレノケル氏肺炎重球菌ニヨリテ発現ス。

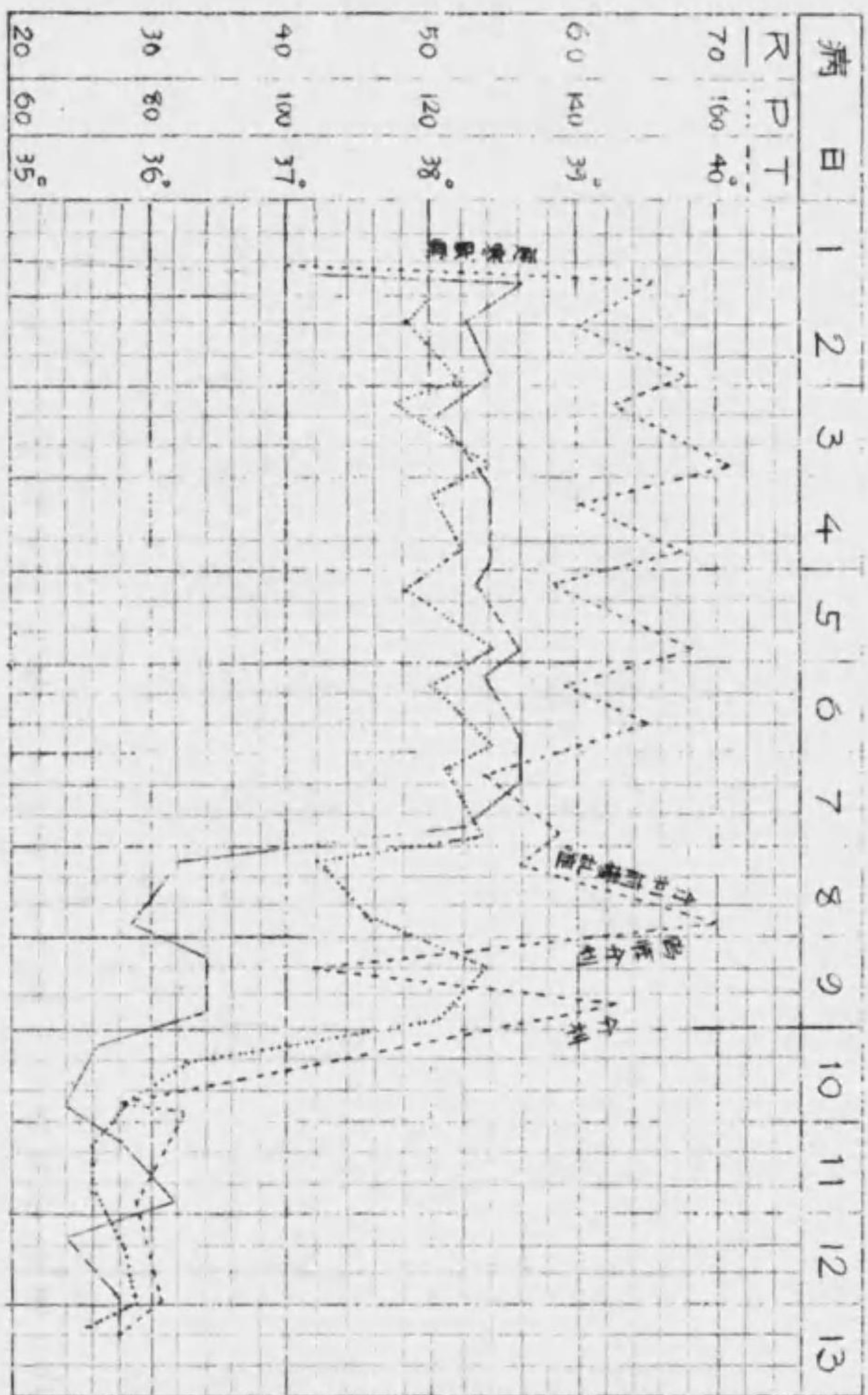
寒胃ハ本病發生ヲ促進スル一要素ニシテ、其他労働社会ハ本病ニ罹ルノ傾向ヲ有ス、外傷及前肥セル急性傳染病モ亦同々本病ヲ誘発ス。

本病ハ多ク壯年ノ男子ニ於イテ発シ、殊ニ強壯ナル者若クハ衰弱者老人及酒客ニ於イテ頻繁ナリトス。

本病ハ急性傳染病ノ如キ性質ヲ有シ、而シテ一度病ニ罹ル時ハ是ヲ反覆スルノ傾向ヲ獲得スルモノナリ。

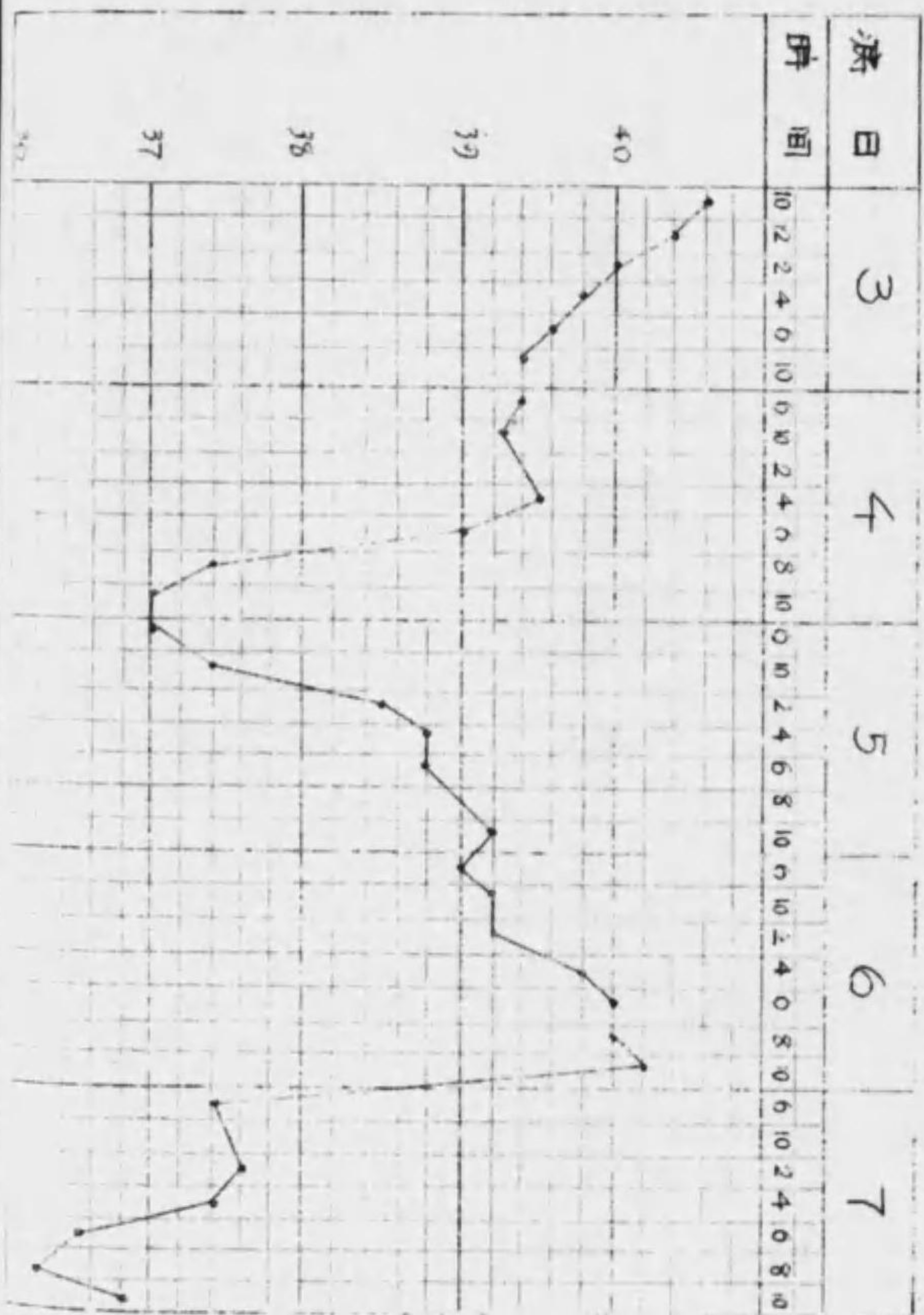
症候 原発性ニシテ、多ク突然発病シ、寒熱脈像アリ、稀ニ前駆症状トシテ全身違和ヲ訴フ。脈像ニ次キ高度ノ稽留性熱ヲ示シ、罹患劇ノ呼吸時刺痛及咳嗽ヲ示シ、呼吸ハ浅表ニシテ漸次ニ促進ス、其他頭痛食氣亡失ヲ示シ、舌ハ白色或ハ灰白色ノ苔ヲ被ムリ、脈搏ハ頻數トナリ、甚ダシク緊張ス、咯痰ハ初期ニ

肺炎及呼吸器病ノ於肺生熱線表



ラシニ長温平ノ子野ノオトニシリ種ニ炎肺性熱鐵
ノモシセ利カノ全ニ日レカシ現ヲ利介世辰ニ日

(氏トヒレフヲ)



アリテス硝子珠ニシテ粘稠ナレドモ後ニハ血液ヲ混ジ、其血液能ク喀痰ト混和
シ喀痰ハ鉄錆色ヲ呈ス。

本病症候ハ時期ニヨリテ異ナリ、凡ソ次ノ三期ニ分ツ。

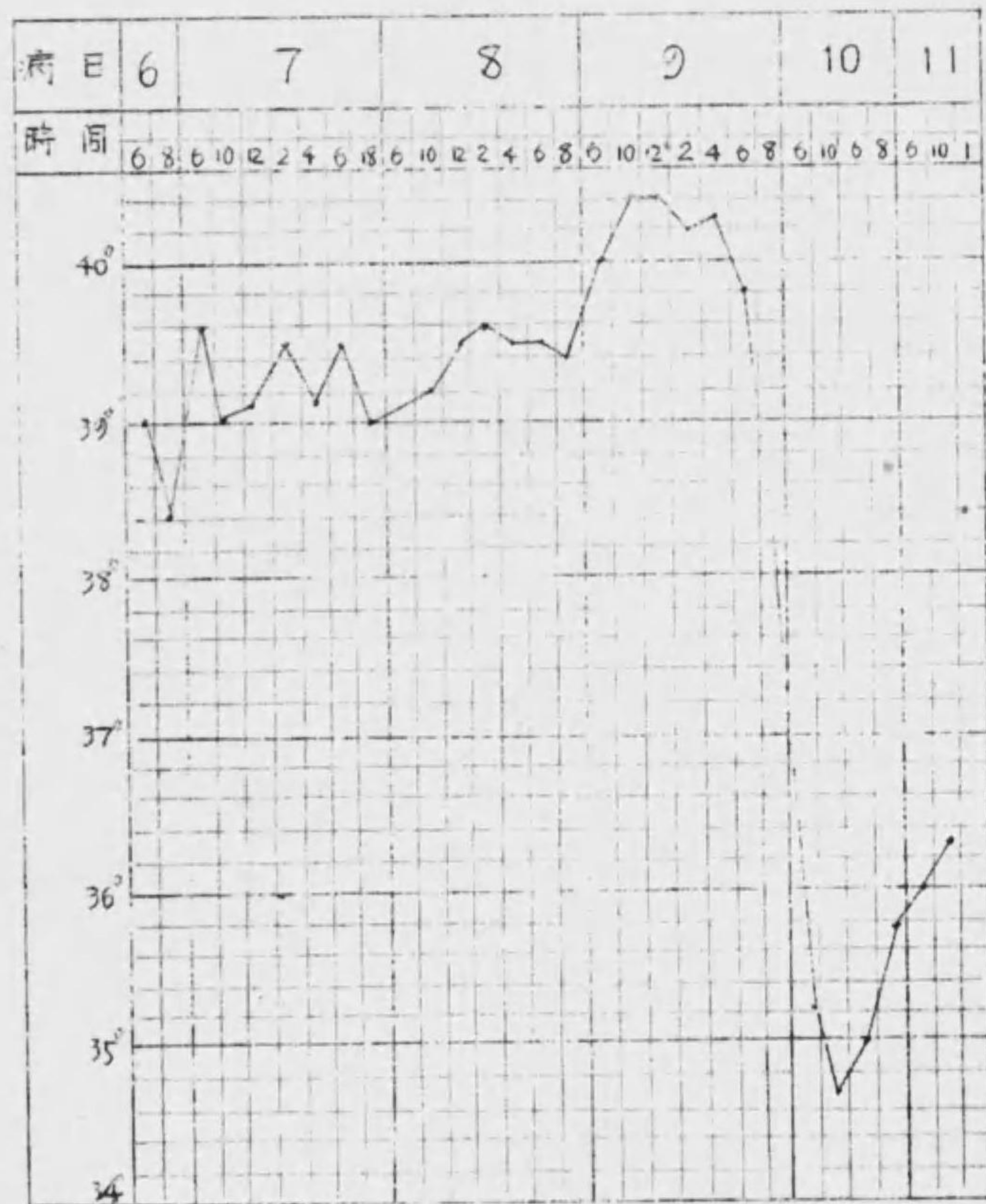
第一期(充血期)患劇呼吸障碍、疼痛、打診音鼓音、聴診上捻髪音ヲ認メ、声
音震盪強盛トナル。

第二期(肝変期)濁音アリ、其度ハ種々此部ノ打診感抗感ハ肋膜炎ノ如ク強カ
ラズ、深部ニ病竈アル時ハ比較的濁音ヲ呈シ、上葉ハ鼓音ヲ呈ス、又気管枝呼
吸音、気管枝声有響性囉音ヲ呈ス、屢々気管枝声ガ最初ニ現ハレ、殊ニ側方及
腋高ニ於イテ聽取セラル、囉語、如キ微音モヨク振取シ得ベシ、咳嗽ハ苦痛多
ク、且咯出甚ク困難ナリ、是喀痰ガ粘稠少量ニシテ固着性強キ粘液アルニヨル、
オ三期(軟解期)オ一期ト殆ト同ジク、打診音ハ清朗乃至鼓音、呼吸音ハ尚粗
雑、鋭利軟復性捻髪音有響性濕性雜音アリ、声音震盪弱ト同ジカ、又ハ延盪喀
痰ハ多量アリ、熱型ハ殆メ多ク稽留シ、凡ソカ五乃至オ七病日ニ於イテ急ニ発
汗ノ本ニ分利ス。

分利ニハ延長セルモノニハ二十四時間ヲ要スル事アリ、又假性分利ト稱シ早期

以温度ノ熱ニ時刻分リ縦ニ炎肺性素維織
表温本ノ予男ノ歳四十四ルアリ下ニ下

(代トヒレフウア)



ニ分利ヲ起シ、体温再ビ上昇シテ其後其ノ分利ヲ来マ事アリ、又分利ノ直前ニ
往々高熱ヲ発シ、譫語ヲ発スル事アリ、分利前擾乱症ト名ク。其他口辺ノ副行
疹ハ診断上重要ナリ。尿ニハ熱性蛋白尿アリ。
小児肺炎ニアリテハ屢々寒熱悪シ、ハ才以下ノ小児ハ多ク咯痰ヲ咳下スルガ故
ニ咯痰ノ性状ヲ看過スル事アリ。
酒客ニ於テハ多ク酒客譫語ヲ発シ、通例何等ノ自觉症状無ク検診シテ始メテ
肺炎ヲ発見スベシ。
無カ性肺炎ハ却テ高カラザル熱持続スル事長ク、良癒ヒル患者、殊ニ老人、酒客等
ニ来ル。

鑑別診断 加答兒性肺炎トノ鑑別

○加答兒性肺炎

1. 多ク純発性ニシテ漸次發生ス
2. 發生部 両肺ヲ侵ス
3. 濁音部 脊柱ノ両側ニ沿ヒ肺基底ヨリ肺炎ニ向ヒテ走ル(線状肺炎)

○纖維素性肺炎

1. 原發性ニシテ卒然悪寒戰慄ヲ以テ起
2. 偏肺 殊ニ右肺ヲ侵ス
3. 濁音一葉ニ滿ル

濁音顯著ナラズ唯弱打法ニヨリ診
明シ得ベシ

4. 聽診上唯鏡多ノ水泡音ヲ聽ク

5. 熱型 弛張熱ニシテ殊ニ日痛ニ完

熱シ終ニ散滅ス

6. 痰ノ性質 粘液

4. オ一期及オ三期ニ檢髮音・オ二期ニ
気管枝音及有響性水泡音ヲ聽ク

5. 稽留熱ニシテ分刺ス

6. 錆色痰

療法 医療ニ於イテハ平臥安静ヲ命ジ、定型性症ニアリテハ詰種ノ症候ニ対シ、
所謂对症的療法ヲ施ス、即胸痛甚ダシキ時ハ洋創膏ノ一片ヲ貼展シ、其他水腫
ヲ用ヒ、祛痰劑ヲ與ヘ、熱候甚ダシキ時ハ冷電法ヲ施シ、或ハ解熱劑ヲ與フル等
等、然レドモ鍼灸療法ノ適度症ニアラザルヲ以テ到迄快癒ヲ望ムベキモノニマ
ラズ、唯是ニ置置シタル際其症狀ヲ以テ本病タル事ヲ知り、以テ疑忌症ナルト自
他ノ予防ヲナスノ必要アルヲ以テ、其要ヲ摘録セシ所以ナリ。

第十六 肺結核 Lungentuberkulose (癩)

(肺癆) (Lungenselwindsucht) (癩)

原因 本病ハ頗ル頻繁ナル疾病ニシテ、殊ニ近時我國ニ於ケル本病ノ蔓延ハ實
ニ著シキ者ナリ、其病原菌ハ爾余ノ結核ニ等シク、コッホ氏結核桿菌ナリ。

本病ノ原因ハ種々アリテ其主要ナルモノヲ挙グレバ左ノ如シ

一 遺傳的傾向 古ヨリ結核ハ遺傳スルモノト看做サレタリ。

本病ガ多クノ家族中ニ蔓延ヲナス所以ノモノハ、結核菌ノ遺傳的傳染ニアラ

ズシテ、斯ル家族ノ同胞ガ本病原因ヲ有シ、且幼時ヨリ肺癆患者ノ周縁ニ生

活スルニヨルナラン、其原因ハ所謂癆瘵質ヲ有スルモノニシテ、此體質ハ遺

傳的ニ發現ス。

二 空氣傳染 肺結核患者ノ咳嗽噴嚏ハ勿論、其談話ノ際ニモ結核菌ヲ含メル喀

痰ハ細小ノ泡沫状トナリテ、空氣中ニ飛散シ、是ニ接近スル者ニ吸收セラル、

三 生殖器結核ヲ有スル婦人ハ文痔ノ際健康男子ニ是ヲ感染セシム。

四 皮膚、喉頭、腸管、泌尿生殖器ノ原発性結核ニ於ケル結核菌ガ淋巴管、若ク

ハ血管ヲ通ジテ肺臟ニ輸送セラレ。

結核ノ發生ニ關係アル誘因

一 体格 体格羸弱、胸廓扁平且細長、肋間陷没、皮膚菲薄、皮下脂肪組織僅微、
(157)

頸部限局性潮紅、長頸背部ノ織毛等（所謂癆瘵質）ノ有ハ本病ニ罹リ易シ。
ニ、年齢ハ結核ニ罹ル原因ニ關係アリ、殊ニ肺結核ハ十八才乃至三十才ノ有ニ
発スル事最も多シ。

三性 本病ハ男子ニ多シ。

四、外因ノ關係 即新鮮ナル空氣ノ缺乏、日光ノ缺乏、栄養ノ不良、運動ノ不足
等モ本病ノ誘因トナル事明カナリ。

五、肺及肋膜ノ疾患 ノ本病ニ轉ズル事アリ。

解剖的変化 本病ハ主トシテ其病的変状ヲ肺門部ニ早発スルヲ多シトス、是殊
ニ小兒ニ於イテ其初微ヲ呈シ、漸次淋巴道ヲ經テ肺ノ他部分ニ蔓延ス、即其多
數ハ肺炎ニ始マル、是恐ラクハ肺炎ノ運動他部ニ比スレバ遙ニ微弱ニシテ、容
易ニ結核菌ノ占居シ得ル所以ナラシ。

肺ニ結核菌ヲ存在セル場合ニハ炎症ヲ起シ、細胞ノ繁殖及推積セルヲ見ル、是
即結核性新生物ナリ、組織細胞及上皮細胞ハ菌ノ作用ニヨリテ増殖シ、上皮様
細胞及巨大細胞ヲ生ジ、次ニ周圍ノ血管ヨリシテ數多ノ白血球集積シ来リテ此
新生シタル細胞ノ周圍ニ沉着スベシ。

此新生及遊走セル各細胞ノ間ニハ微細ナル網アリ。

此結核性新生物ハ中央部ヨリシテ乾酪変性ヲ始メ漸次外方ニ進行ス、此病機ノ
結果ハ、所謂粟粒結核ニシテ、血管ヲ有セザル粟粒大ノ円形小結節ヲ現ス、本
病ニ結核ノ稍アルハ此小結節アルヲ以テナリ。

隣接シタル小結節ノ密接融合スルニヨリテ結核性新生物ハ、益々蔓延シ、而シ
テ漸次結核性結節ヲ生ジ、遂ニ蔓延性結核浸潤ヲ形成ス。

結核ノ特徴ハ其新生組織ノ初メニ膠様灰白色ヲ呈シ、後ニ乾酪變性ヲ発スルニ
アリ、此新生組織ハ遂ニ崩壊シテ、其大部分ハ喀痰ト共ニ咯出セラレテ其部ニ
空洞ヲ形成ス（結核性空洞是ナリ）。

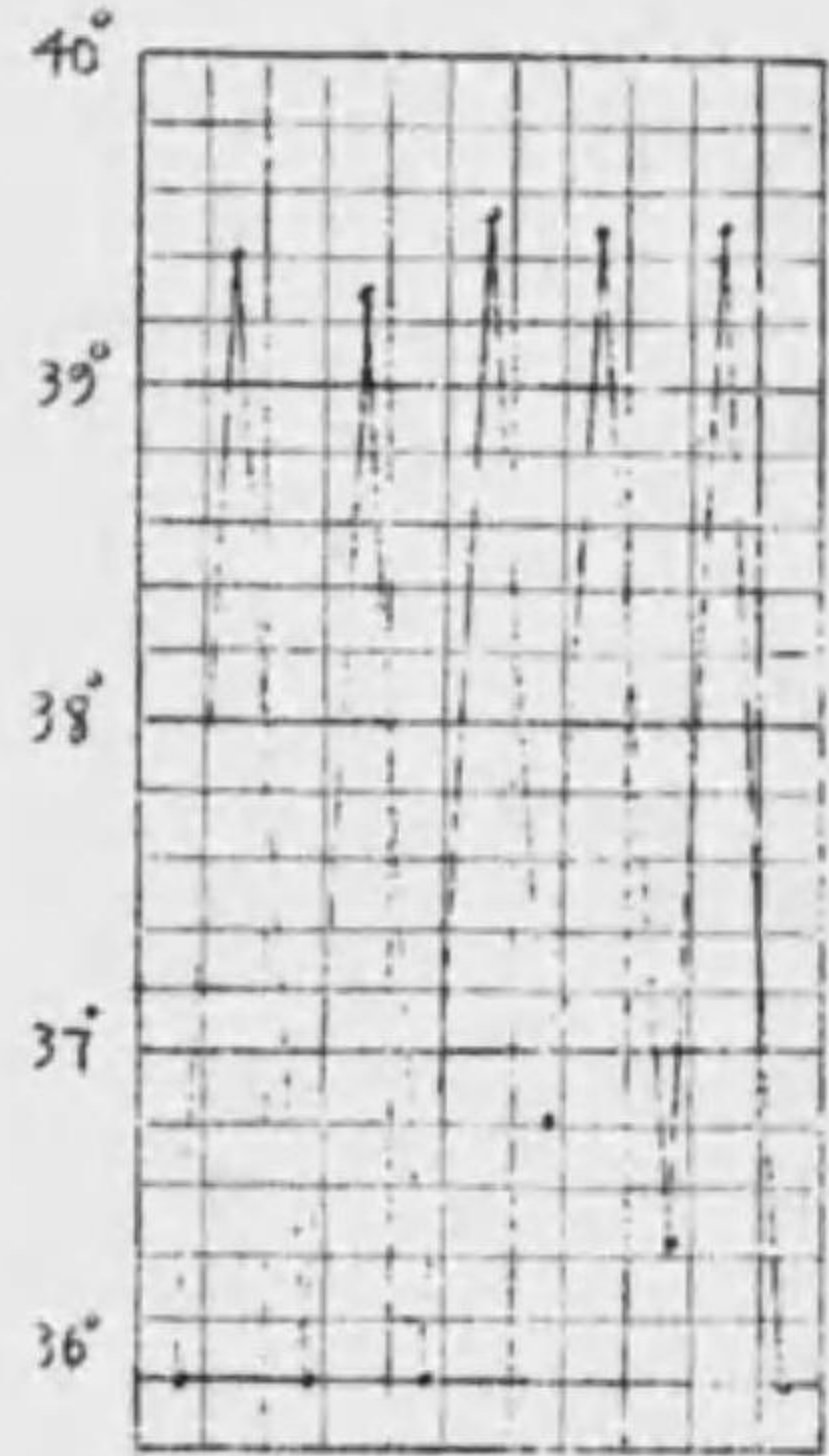
結核性病變ハ觸接傳播ニヨリテ、其周圍ニ蔓延スルノミナラズ、血管、淋巴管ニ
ヨリテモ他部ニ轉移シテ、新ニ病變ヲ発シ、遂ニ広ク蔓延スルニ至ルモノトス。
症候及診断 本病ノ初期ハ多ク潛進性ニシテ、若シキ理學的症候無キモ漸次顔
貌蒼白（往々萎黃病ト誤認スル事アリ）疲勞シ易ク、体重ノ減輕、発汗シ易ク、
夜間既ニ盗汗アリ、又軽度ノ発熱アリ、即夕刻僅ニ三十七度五分乃至八度（発
消耗）トナル。

熱耗消豆



殊ニ呼吸後又歩行ノ際ニ然
 リ、其他呼吸促迫及屢々胃
 腸障礙アリ、又暫ク短キ乾
 性咳嗽、肩胛骨間疼痛等ノ
 諸症候ヲ来スト雖モ、又突
 然咯血ヲ以テ突病ノ端緒ヲ
 開ク事アリ、稀ニハ又熱性
 全身症ヲ起シ輕症腸チブス
 ノ初期ニ類スル事アリ、ベ
 ルツ氏ハ是ヲ結核性反性チ
 フスト稱セリ、体温ハ疾布
 症候ノ顯著ナルモノニアリ
 テハ、朝夕正露若クハソレ
 以下ニ降リ、夕時ニ至レバ
 三十九度乃至四十度ニ昇騰

熱耗消ルア於ニ痰結肺



ス、日嘔(消性熱ト稱ス)其他稽留性ノ熱候ヲ呈スル事アリ。
 咯痰ノ量ハ患者ニヨリテ大イナル差違アリ、肺ニ空洞ヲ生ジタル場合ニハ多シ、
 咯痰ハ膿性若シクハ粘液膿性ニシテ空氣ニ乏シク、水ヲ充テタル唾壺ニ咯出ス
 ルニ、沈降シテ所謂貨鉄状痰ヲ呈スルヲ見ル。
 咯痰中ニ血液ヲ混スル事アリ、輕微ノ咯血ハ顧慮スルニ及バザレドモ、時トシ
 テハ大咯血ノ先驅タル事アリ、咯血ニニ種アリ(甲)ヲ初期咯血(先発性咯血)ト
 イヒ、肺病ノ初期ニ發シ、屢々高肺感ニ於イテ病妻ヲ呈セザル時期ニ来リ。(乙)
 ヲ空洞咯血ト云ヒ、空洞中ニ存在セ

ル肺動脈枝ニ生ジタル細小動脈瘤ノ
 破裂ニヨリテ發ス。
 咳嗽ニ又殆ト本病ノ主徴トナス事ヲ
 得ベシ、時トシテ咳嗽甚稀ナルカ、ス
 ハ鉄如スル事無キニアラザルモ、通
 常初期ニ於イテハ輕キ乾咳ナルモ病
 ノ進ムニ從ヒテ咳嗽頻發ス、殊ニ喉

頭及気管、侵サレタル場合ニ然リトス、咳嗽ハ夜間ニ多ク略痰ノ発生夥多ナル時ハ早朝ニ於テ甚シ。

觸診 手指ヲ左右胸部ノ同一部位ニ貼シテ、呼吸運動ヲ檢シ、左右不同ナル時ハ容易ニ是ヲ知ルヲ得ベシ。

打診 患部ハ空気が含有スル事少キヲ以テ打診音短ナリ、浸潤部増大スル時ハ濁音ヲ放チ、多数ノ小病竈ノ間在シタル組織ヲ压迫シテツレヲ弛緩セシメタル時ハ、鼓音ヲ発ス、其他肺ニ空洞ヲ生ジタル時ハ鼓音若クハ往々破壘音ヲ発ス。

聽診 理學的診法中最必要ナリ、呼吸音ハ微弱若クハ不整トナリ、往々断続性呼吸音ヲ発スル事アリ、呼吸ハ延長シ且銳利トナル。

組織浸潤ヲ未ス時ハ、気管枝音ヲ聽取シ、病後尙進ミテ空洞ヲ形成スルニ至レバ気管枝音及蹙子呼吸音、気管枝声ヲ発スルニ至ルベシ。

羅音ハ始メ唯深呼吸及咳嗽時ニノミ、是ヲ聽取スルモ、後ニ至レバ呼吸毎ニ是ヲ聽取スルニ至ル、而シテ羅音ハ初メハ小ナルモ、後ニハ大トナリ、且百響性トナル、以上ノ症状ハ素ヨリ病期ノ早晚ニヨリ大ニ差違アルモノナリ。

去来ヨリ本病ヲ左ノ三期ニ區別ス、即

實定齒床
斯クノ如ク
確然タルモ
ニ非ズ

A 初期肺病 多クハ病徵ヲ肺尖殊ニ其右側ニ現ス(肺尖加答兒)。

B 確定期肺病 病徵一直シテ結核性浸潤ヲ示シ、既ニ他病ト誤ル事無シ(肺尖浸潤)。

C 完成期肺病 浸潤部崩壞シテ空洞ヲ形ス。

予後 患者ノ体力、年齢、貧富、賢愚等ニモ大ニ關係アリ。

然レドモ通常其初期ニ於テ適當ノ療法ヲナシ、充分補養法ヲ守レバ結核性病竈ハ結締織ヲ以テ固執セラレ、或ハ石灰化シ、或ハ癩痕ヲ形成シテ治癒スル事アリ、然レドモ多クハ其初期ニ於テ孺生法ヲ守ラザルヲ以テ、遂ニ病勢進行シ早晚致死的転歸ヲ取ルガ故ニ予後不良ナリ。

療法 既ニ結核菌ノ進入門ヲ確定セル今日是ニ對スル予防法モ又明カナリ、病ヲ予防スルハ病ヲ治療スルニ勝ル、吾人ハ患者ノ疾病ヲ治療スルノミナラズ、

是ヲ未病ニ防グベク努メザルベカラズ。

患者ニハ其羸瘦ヲ防止スベク、完全ニシテ且適當ナル食品並ニ消化ニ適應セル分量ニヨリテ適度ノ栄養ヲ圖リ、特ニ本邦人ニアツテハ肉食ヲ極ミ、出血シ易キ人又ハ血管運動神經衰弱者及貧血並ニ神經症状強キ人ニハ、肉類並ニ動物性

食餌ノ過量ヲ慎ミ、植物性食ヲ以テ是ヲ栄養ス又滋養ニ屬ミタル食物ノ必要ナルガ如ク、新鮮ナル空氣モ又大イニ必要ナリ、即氣候ヲ換ビ通風ヲ防禦シ、新鮮ナル空氣中ニ生活セシメ、疲勞セザル程度ノ運動ヲ命スベシ、運動ハ前額ノ汗バミ且七情九進ヲ起サハルヲ度トス。

鍼灸療法トシテ、其初期ニ於テ病竈部ニ血行ヲ旺盛シ、且又鍼灸ニ因スル口イコチトービヲ柔サシムベク、肩部及背部(大杼、凡門、肺俞、厥陰俞、心俞、肝俞、附分、魄户、膏肓、神堂、天突等)ヨリ七穴乃至九穴取捨選擇シ、鍼内斜刺五ヒ分輕刺シ、灸ヒ壯乃至十一壯スベシ。

尚消化吸収作用ヲ盛ナラシムベク、下位背椎及腰側(脾俞、胃俞、三焦俞、腎俞)ニ於テ適宜場所ヲ選擇シ、刺鍼一寸乃至一寸五分、灸九壯乃至十一壯スベシ、其他古ヨリ癆咳ノ秘穴トシテ傳ヘラレタル四幸患門ノ穴ニ實驗ト大イニ効アリ、鎮咳及祛痰ノ目的ニテ前頸部(天突)ニ灸十一壯スルモ可ナリ、但シ一日ニ灸七壯乃至九壯以上施灸スベカラズ、刺鍼ニ於テモ又然リ、痛ニ患者ノ容態ヲ考察シ、患者ヲシテ徒ラニ疲勞ロシメ、或ハ病勢悪化セシムルガ如キ事アルベカラズ。

第十七 肋膜炎 Pleuritis, Pleuresia, Brustfellentzündung (胸)

原因 肋膜炎ノ寒胃ニヨリテ発スルハ疑ヒラ容レズ(寒胃性肋膜炎)、兵士及水夫ノ本病ニ罹ル者多キハ其寒胃ニ罹ル者多キ為ナリ、外傷即衝突、打撲、墜落等ノ為ニ肋膜炎ヲ発スル事アリ(外傷性肋膜炎)、又結核、急性傳染病(殊ニ麻疹、猩紅熱、ラゲフテリ、痘瘡、腸チフス、加答兒性肺炎、纖維素性肺炎、骨カリエス、心囊炎、腎臓炎、急性關節痛ナ斯質等)ニ続発ス、又肋膜自己ノ疾病例ヘバ肋膜腫瘍等ヨリシテ炎症ヲ発スル事アリ、其病原菌ハ原發性ノ者ニ在テハ主トシテ代膿性連鎖状球菌及葡萄状球菌、他フレンケン氏肺炎、球菌結核桿菌ノ作用ニ由リ現ル、單決シテ稀ナラズ、本病ハ老弱男女トモニ侵サルレド、殊ニ二十才乃至五十才ニ最モ多シ、而シテ男子ハマ子ヨリモ之ニ罹ル事多シ、是男子ノ方本病發生ノ機會ニ遭遇スル事多クバナリ。

解剖的変化 本病ハ其炎症産物ノ性質ニ從ヒテ乾性、濕性ノ二種ニ區別ス。(甲)ハ纖維素ノ沈着ヲ未スモノニシテ、是ヲ乾性肋膜炎ト云ヒ。(乙)ハ滲出液ヲ生ズルモノニシテ、是ヲ滲出性肋膜炎ト云フ。

而シテ後者ハ其液ノ性質ニヨリ、更ニ是ヲ左ノ如ク區別ス。

1. 漿液性肋膜炎 seröse Pleuritis (癩)

2. 膿性肋膜炎 eitrige Pleuritis (癩)

3. 出血性肋膜炎 hämorrhagische Pleuritis (癩)

4. 腐敗性肋膜炎 jauchige Pleuritis (癩)

此各種ノ肋膜炎ハ初期ニアリテハ何レモ同一ノ状態ヲ呈シ、肋膜ハ充血腫脹シ、其光澤ヲ失ヒテ濁濁シ、纖維素ヲ滲出シテ肋膜ノ表面ニ菲薄ノ膜ヲ生ズ、此期ヲ即乾性肋膜炎、或ハ纖維素性肋膜炎トモ稱ス。

而シテ患部ノ広狭ニヨリテ局限性乾性肋膜炎ト蔓延性乾性肋膜炎トニ區別ス。乾性肋膜炎ノ更ニ増進スル時ハ肋膜腔内ニ滲出物ヲ生ジテ滲出性肋膜炎トナル、滲液性肋膜炎ノ滲出液ハ稀薄ニシテ、黄色若クハ帶綠黄色ヲ呈シ、多少纖維素ヲ含有ス、膿性肋膜炎ノ液ハ膿汁ノ如ク不透明ニシテ、綠色若クハ帶綠黄色ヲ呈シ、出血性肋膜炎ニ於イテハ或ハ鮮紅色、或ハ帶褐色ヲ呈シ、其陳旧ナルモノハ帶褐色ヲ呈ス、又腐敗性肋膜炎ニアリテハ其滲出液灰白色、若クハ泥褐色ニシテ、刺戟性臭味ヲ放ツ、而シテ此滲出物ノ増加スレバ隣接器官ノ圧

症候 本病ハ屢々生活中全然症候ヲ呈セザル事アリハ潜在性肋膜炎(或ハ急性ノ經過ヲ取りテ更寒発熱スル事アリ、或ハ亞急性慢性ノ經過ヲ取ル事アリ、而シテ其局所ノ症候ハ必ズシモ全身ノ症候ニ準ゼザルモノナリ。

①乾性肋膜炎 本症ノ主徴ハ疼痛並ニ肋膜炎性摩擦音ナリ。患者健側ニ臥スラ常トス、是患側ニ臥スレバ胸部圧迫ヲ受ケテ疼痛ヲ發スル爲アラント云フ、患側ノ呼吸運動ハ健側ヨリモ微弱ナリ、是際呼吸ヲ行ヘバ疼痛ヲ来スニヨル、而シテ患者或ヘク患側ノ胸部ヲ叩盪セザラシメントスルヲ以テ、胸部変形シテ脊柱ハ其凸面ヲ健側ニ向ケテ側彎ヲナシ、之ガ爲ニ患側ノ肩胛下降シ、肋間腔ノ狹隘トナル事アリ、打診音ハ短トナリ、聽診上患側ニ於イテ呼吸音微弱トナリ、且斷続スル事アリ、肋膜炎性摩擦音ハ本病ノ主徴ナリ。

其性甚ク種々ニシテ判然タル斷続ヲ現シ、且表在性ナリ、或ハ摩擦音ノ取カ

②摩擦音
摩擦音ハ耳
ニ近シテ手
指ノ爪ヲ以テ
摩シテ其音ヲ
ニヨフテ其スル
種々ニ分ル

ニシテ發聲音ニ類スル事アリ、或ハ微細ノ乾性嚙音ニ似タル事アリ、或ハ粗糙ニシテ新シキ革ヲ撓ムル如キ音ヲ發スル事アリ（新革呻吟音）、而シテ深吸氣ノ場合若クハ肋間ヲ圧スル場合ニハ増劇ス往々咳嗽ヲ發ス。
 胸痛ハ本病ニ於イテオーニ現ル、主徴ニシテ、患部ニ存在ス、深呼吸、若クハ發劇ノ運動ヲナス場合ニハ刺痛ヲ發ス。
 熱発、脈搏頻數、疲労及食慾減退等ノ一般症候ハ通常顯着ナラズ、本症ノ後遺症ハ癒着ナリ。

(乙) 濕性肋膜炎 患者ハ患側ニ横臥シ、呼吸困難強キ場合ニハ跪坐呼吸ヲ喜ム、患側ノ胸廓ハ膨大シ、心尖搏動ハ健側ニ圧排セラレ、声音震蕩ハ微弱トナリ若クハ消失ス、手掌ヲ胸廓ノ左右同一ノ部ニ貼シテ檢スル時ハ、患側ノ呼吸運動ノ微弱トナリ、若クハ消失セルヲ認ムヘシ、疼痛ノ部位及其度ニ鑑診ニヨリテ是ヲ知ル事ヲ得ベシ。
 打診ハ本病診斷上甚必要ナリ、即滲出物ノ部位ニ於イテハ濁音ヲ呈シ、前上方ハ往々低調ナル鼓音ヲ帶ブ（スコイダ音）。
 又滲出物ノ量多キ時ハ、或ニ濁性鼓音ヲ呈シ、口腔ノ開閉ニヨリ高低相変換ス

此種初期候及
 適宜ノ時期ニ
 於テキリニヨ
 リ其滲出物ヲ
 稀薄トナル時
 ハ外方若クハ
 前腹壁ニ他ノ
 内腹内ニ或シ
 即チ膿汁ハ皮
 膚ヲ破リテ外
 方ニ流出トシ
 疔性瘰癧（臥
 ハ肺膿ニ寄連
 シテ自然口腔
 内ニ吐出セラ
 ル、事アリ

（ウ）アム氏（気管音）是打診ニヨリテ起レル振動ノ圧縮セラレタル肺内ノ大気管枝ノ空氣ニ傳播スルニヨリテ發スルモノナリ、發診ニ滲出物ノ区域内ニ於イテハ、呼吸音微弱トナリ若クハ消失シ深部ニ幽微ナル気管枝音ヲ証明ス。
 摩擦音ハ粗糙トナレル内外兩肋膜面ノ相摩擦スルニヨリテ發スルモノナルヲ以テ、滲出液ノ為ニ兩葉ノ相離隔セル部分ニ於イテハ此音ヲ發スル事無シ、故ニ是ヲ聽取シ得ルハ肋膜炎ノ初期ニシテ、未夕液ノ滲出セザル場合並ニ収期ナリトス。
 咳嗽ハ併發セル気管枝加答兒ノ為ニ發シ、或ハ肋膜ノ剝離ニヨリテ發スルモノトス、体温通常寒ヲ以テ始リ、次デ稽留性若クハ弛張性ノ熱ヲ發ス、其熱型ハ別ニ固有ノモノニアラズ、膿性滲出液ノ場合、熱ハ弛張性ノ者ト比スレバ疊々弛張性ニシテ、時トシテ消耗性ナル事アリ。
 右側肋膜炎ノ場合ニハ往々肝臟圧下セラレ、且同時ニ腫大スル事アリ、左側肋膜炎ノ場合ニハ下行ニ圧下セラレ、是ヲ觸知シ得ル事アリ、而シテ尿量ハ減少シテ濃厚トナル。

予後 原因炎症ノ性質ニ從ヒテ差違アリ、是者強壯ニシテ非結核性ナルモ、ハ
予後良ナレドモ、多ク結核性ナルガ故ニ其予後不良ナリ。(170)

療法 臥床セシメ、余リ早ク起牀セシムベカキズ、容易ニ再ビ増悪スル恐レアリ、
而シテ鍼灸療法トシテハ患者ノ状態時期等ヲ考察シ、医家ニ於ケル温巻法、芥
子泥、強壯泡膏ノ服用ト同一目的ニテ、背部是則(凡門、肺俞、厥陰俞、心俞、
膈俞、肝俞、附分、魄戶、膏肓、神堂、譚謔)等ノ諸穴ヨリヒ穴乃至九穴環痺
シ、施鍼五七分輕刺シ、灸ヒ壯乃至九壯スベシ。
尚利尿作用ヲ促進スベク、腰部(腎俞、大腸俞、小腸俞)及腹部(白條線中、
水分及白條線ノ外方水道)等ニ灸九壯乃至十一壯スベシ。結核性ニ非ザレバ如
果ヲ得ベシ。
然レドモ化膿性肋膜炎ノ如キハ素ヨリ外科手術ニマタザルベカラズ。

第二章 消化器病

第一 加答兒性口内炎 Mucdotarrh (類)

(單純性口内炎)

原因 (甲)種々ナル刺激ニヨリテ発ス。(一)器械的刺戟例ヘバ銳利ナル齒牙、齒牙
ノ發生等。(二)温熱的刺戟例ヘバ温熱ノ食物、若クハ瓦斯ニ因スル火傷。(三)化
学的刺戟即甘汞ノ如キ汞劑(汞毒性口内炎)、酸「アルカリ」等ノ腐蝕劑並ニ飲
酒、喫煙等ノ刺戟。(乙)傳染病即麻疹、痘瘡、猩紅熱、徽毒等ノ場合。(丙)附近臟
器炎症ノ蔓延シテ発スル事アリ、咽喉鼻腔等ノ炎症ノ場合、其他乳児ニアリテ
ハ乳汁ノ分解ニヨリテ本病ヲ発ス。
症候 口腔粘膜ハ潮紅腫脹シ、又灼熱乾燥等ヲ発ス、又表在性ノ潰瘍ヲ発シ、
時トシテハ齒齦炎ヲ発スル事アリ。
舌ハ灰白色若クハ類褐色ノ苔ヲ被リ、舌縁ニ齒牙ノ圧痕ヲ呈シ。患部ハ粘液ヲ
以テ被ハレ、時々唾液ノ分泌亢進ス(流涎)。尚患者口腔ニ疼痛ヲ感ジ、食物ヲ
(171)

攝取スル葷肉蕪ナル事アリ、食味不良ニシテ屢々口唄ヲ放ツ。
経過 原因ノ性質ト症状トニヨリ急性及慢性ニ別ス。
急性症ハ痲疹數日ニシテ治癒スルモ、慢性症ハ殊ニ酒客及喫煙家ニ多ク、原因
ヲ除去セザレバ治癒困難ナリ。

療法 一度煮沸シタル水ニテ口内ヲ清潔ニスベシ、又急性症ノ場合ニハ氷片ヲ
含マシムルヲ可トス、而シテ急性ト慢性トノ論無ク原因ヲ除去スルニ努メザル
ベカラズ。

鍼灸療法トシテハ誘導法トシテ後頸部(天柱、凡池、完骨)肩背部(肩中、肩
外、大椎、大杼、凡門)等ニ刺鍼直刺五分乃至八分輕利シ、灸凡壯乃至十一壯
スベシ、尚上肢(三里、天沢)下肢(三里)等ニモ適宜刺鍼施灸スベシ。
小児ノ施灸處ハ一穴乃至三穴ヲ以テ適度トス。

第二 鴛口瘡 Mundschwürme (癩)

原因 鴛口瘡菌ニヨリテ發生ス、鴛口瘡菌ハ菌絲及芽胞ヨリ成リ、空气中ニ存
在ス、其口腔内ニ進入スルハ或ハ空氣ノ媒介ニヨリ、或ハ此菌ノ附着セル物体

刺ヘバ哺乳器等ニヨル、本病ハ初生児ニ於テ最モ多シ、然テ口内ノ不潔、哺乳
器ノ不潔、或ハ乳汁ノ酸敗等ニ其因ス。

成年者ニアリテハ糖尿病、肺結核、腸チフス、癌腫等ノ如キ慢性疾病ニ罹レル
者ニ多シ、病ノ發生ハ夏季ニ多シ。

症候及解剖的变化 舌頸及軟口蓋ノ粘膜面ニ僅ニ隆起セル類白色ノ斑ヲ生ジ、
其斑ハ暫時ニシテ相融合ス、斑ハ是ヲ剝離マル事ヲ得ベシ。口腔粘膜ハ加齢兒
性ヲ現シ、甚ダ知覺過敏トナリ、為ニ哺乳兒ハ乳房ヲ嘔ム事ヲ得ズ、大人ハ食
物攝取ニ當リ、灼熱疼痛ヲ訴フ、若シ是ヲ看過スル時ハ斑ハ咽頭、食道及喉頭ニ
蔓延ス、唾液ノ分泌旺盛シ、其反応ハ常ニ酸性ニシテ「ラヂアリン」ハ致如ス、
尚初生児ハ本病経過中下痢ヲ発スル事アリ。

干飯 佳良ナレドモ、哺乳ヲナシ得ズシテ餓死スル事アリ。
療法 医療ニヨリ原因の療法ヲ施シ、口内ノ清潔哺乳器ノ清潔ニ注意スベシ、
鍼灸療法トシテハ前項口腔加齢兒ニ於ケルガ如ク、誘導法ノ目的ノ本ニ施療ス
ベシ。

尚小児鴛口瘡ニ對シテハ余ハ紅冬ヲ以テ百兆百中ノ効ヲサソフ、アリ、今左
(173)

ニ紅灸術法ヲ記シ寫字者ノ参考ニ資セン。

◎紅灸術法

宇和川 義庸 述

オ一額ノ顙会部(俗ニヲドリコト稱ス)此灸ヲ五分四角位モヲ判り落シ、
一面ニ紅ヲ塗ルベシ。

オニ手ノ黒名指ハ齒ニベニサシ指ト摘スルハ、生ハ際ニ白キ三日月形ノ部
アリ、此部ヲ紅ヲ以テ塗ルベシ、若シ白キ必見エザル時ハ爪一面塗ル
ベシ、白キ三日月形ノアル者ニセズ一面ヲ塗ルベカラズ。

オ三齶口瘡ニハ唇ト舌ノ上モ輕ク塗ルベシ。

右ノ法ヲ誤ラザル時ハ必ず特效アリ。

第三 生齒困難 Dentitio difficilis (癩)

原因 乳齒ノ発生ハ生後オヒ月ヨリオ九月ノ間ニ始リ、最初ニ下顎ノ正中ノ切
齒ヲ生ジ、數週ノ後ニ上顎ノ正中ノ切齒ヲ生ズ、次ニハ上顎ノ外側ノ切齒、オ
二年ノ初メニハ下顎ノ外側ノ切齒ヲ生ジ、是ト殆ド同時ニ四齒ノオ一小白齒ヲ
生ジ、オ二年ノ後半期ニ於イテ上下四齒ノ大齒、終ニハ四齒ノオニ小白齒ヲ生

ズ、オ六才乃至オ七才ニ至レバ以上ノ乳齒ハ漸次脱落シ、之ニ換リテ永久齒ヲ
生ズルモノトス。

此齒牙発生時ニ當リ小兒ハ何ノ異状ヲモ呈セザル事屢々アリト雖モ、本口腔、
胃腸或ハ氣管枝等ノ加害現症状ヲ呈シ、加フルニ精神不安トナリ、発熱、急痙
発作等ヲ来ス事アリ、此總ベテノ症候ヲ總括シテ生齒困難ト稱ス。

療法 口内ヲ清潔ニシ、若シ小兒ノ手指又ハ玩弄物等ヲ口内ニ入ル事ヲ好ム時
ハ、其清潔法ニモ注意スベシ。

医家ニ於イテハ齒齦切開ヲ施ス事アルモ、鍼灸療法トシテハ对症療法ヲ施スニ
過ギザルベシ(对症療法ハ各其條下ヲ参照スベシ)

第四 急性咽喉炎 Akuter Rachenkatarrh (癩)

原因 感冒急性傳染病例ヘバ麻疹、猩紅熱、痘瘡、インフルエンザ、百日咳等
其他犬度、亜砒酸、水銀、「アトロピン」等ノ中毒、熱性飲食物、飲酒、喫煙、
判戦瓦斯等モ本病ノ原因トナル、又長時ノ談論放歌等ヨリ発シ、或ハ鼻腔、鼻
咽喉、喉頭等ノ炎症蔓延シテ発スル事アリ。

症候 多クハ寒戰慄ヲ以テ発熱ス(但シ熱候ヲ呈セザルモノアリ)。全身違和
頭痛、頭重等ノ外、初期ニハ咽頭ノ異常乾燥感、疼痛殊ニ嚥下痛アリ。而シテ聲
咳ヲ発ス、分泌物ハ漸次増加シ多クハ粘痰性ナリ。又下顎隅部、淋巴腺腫大シ庄
痛ヲ有ス。

他覚的ニハ咽頭粘膜一収ニ発赤腫脹ス、時トシテ病変口狭部ニ於イテ顯著ナル
事アリ。然ル時ハ口蓋弓及懸壺垂浮腫状ニ腫大シ、口蓋扁桃腺モ又多クハ多少
腫大ス。声音ハ壑声ニ變ジ鼻呼吸ヲ困難ナラシム。

予後 原因ヲ除去セバ数日ニシテ治癒スルヲ常トス。

療法 一、飲酒、喫煙、長談等後テ本病ノ原因トナルモノハ、一切是ヲ禁ジ、
頸部ニ巻法ヲ施シ、或ハ蒸氣吸入及含漱ヲ命ジ

鍼灸療法トシテハ訪真法ノ目的ノ本ニ、後頸部(天柱、凡池、完骨)肩背部(肩
中、肩外、天髎、大杼等)ニ刺鍼五分乃至一寸、灸ヒ壯乃至九壯スベシ。

尚上肢(三里、合谷)下肢(三里)ニ刺鍼七分乃至一寸ニ三分、稍々強刺スベ
シ。手ノ(勞宮)足ノ(湧泉)ニ灸九壯スルモ可ナリ。
其他頭痛、頭重等ニ対シテハ、直宜对症療法ヲ施スベシ。

第五 慢性咽頭炎 Chronischer Rachenkatarrh. (咽)

原因 多ク急性咽頭加答兒ヨリ移行ス、又鼻疾患ノ者口腔呼吸ヲ嘗ムニヨリ発
スル事アリ、其他喫煙、飲酒家、塵埃乾燥過熱ナル空氣及刺激性瓦斯吸入刺激性
性及過熱ノ食物並ニ職業的聲音過勞(教師、僧侶、軍人等)及胃腸疾患ニヨリテ
発ス。

症候及解剖的变化 咽頭後壁ノ粘膜多少発赤シ、拡張セル血管ヲ有シ、又屢々
不正粒状ノ顆粒ヲ散任ス、顆粒性咽頭炎是ナリ。

懸壺垂ハ通常浮腫状ヲ呈シ、又往々延伸シ、舌根若クハ会厭軟骨ニ接觸スル事
アリ、又後口蓋弓ノ後方ニ當リ紅色ノ索状隆起アリ、紋疔運動ニ際シ著明ニ現
出スル事アリ、是ヲ側索咽頭炎ト稱ス。

又咽頭粘膜ハ蒼白色ヲ呈シ、菲薄トナル事アリ、瘦削性咽頭炎ト名ク。
患者ノ疾苦ハ往々顯著ナラズ、咽頭部ニ於ケル乾燥癢刺若クハ灼熱ノ感ヲ訴ヘ、
聲咳ヲ頻発ス、而シテ通常無熱ニテ経過ス、喀痰ハ多ク粘痰様ニシテ、同々咽
頭血管破綻ノ為血液ヲ混ズル事アリ。又扁桃腺着シク腫大シ、両側相接觸シ為

＝声音ハ衰ジテ鼻声トナリ、鼻呼吸ヲ困難ナラシム。
予後 本病ハ直接生命ニ危險ヲ醸ササルモ、頗ル治療困難ニシテ殊ニ原因ヲ除
去セザルニアリテハ終生本病ノ消散ヲ見ル事能ハサルナリ。
又鼻腔咽頭気管等ノ慢性加答児ヲ喚起シ、反射性ニ気管枝喘息、癩癩ヲ併発セ
シムル事アリ。
療法 原因ヲ察察シ、兼テ毎日数回合致セシメ、鍼灸療法トシテハ急性症ト
等シク治療スベシ。

第六 扁桃腺炎 Mandelentzündung (獨)

原因 急性症ハ春秋ニ幸ノ冷温ノ候ニ感胃ニヨリ発スルヲ最も多シトス。慢性
症ハ急性症ノ反覆スルニヨリテ起リ、又先天性ニ來ル事稀ナラズ。
症候 急性症ハ悪寒疼痛ヲ以テ始マリ、高度ノ熱候ヲ呈スル事アリ、舌ハ厚キ
苔ヲ被リ、咽頭部乾燥及掻痒ノ感ヲ起シ、扁桃腺ハ肥大赤腫ス、為ニ咀嚼及嚥
下ニ困難ヲ來シ、甚ダシキニ至ラバ呼吸困難ス。又鼻声ヲ放テ甚ダシキ時ニハ
言語ヲ発スル事能ハサルニ至ル。

本病ハ又名咽頭狹窄ノ名アリ

慢性症ハ多クハ患者ノ疾苦顯著ナラザルモ、時トシテハ之ガ為ニ咽頭加答児ヲ
誘発シ、咽頭部ニ乾燥刺激ノ感ヲ來ス、扁桃腺肥大ノ為呼吸困難及嚥下困難ヲ
醸シ、患者ハ口ヲ開キテ呼吸ス。

其他気管枝喘息、頭痛、頸重等ノ反射的発作ヲ併発スル事稀ナラス。

予後 急性症ハ輕キハ數日ニシテ治療スルモ、往々化膿スル事アリ。

慢性症ニアリテハ頑固ナル疾病ニシテ治療甚ダ困難ナリ。

療法 前項咽頭炎ニ於ケルガ如ク、一日數回ニ涉リ合嗽セシム。

鍼灸療法トシテハ消炎ヲ図ルベク、誘導法トシテ後頸部(凡池、完骨、天癰、
天柱)及前頸部及側頸部(人迎、天突)ニ適宜施鍼灸スベシ。尚又肩背部上
下肢等ニモ治療スベシ。

小兒ニアリテハ湧泉ニ左右ヒ仕宛灸スベシ特效アリ。又肩部(肩外俞ヲ中心
ニ)持鏡的温灸ヲ施スモ可ナリ。

往々化膿スル恐アルヲ以テ、充分消毒ニ注意シ既ニ化膿セルモノニアリテハ、
匡ニ外科手術ニヨリ扁桃腺切除法ヲ進ムベシ。

慢性症ト雖モ氣永ニ施療持流スル時ハ、病大イニ輕快スルモノナリ。

第七 食道加答兒 Speiseröhrenentzündung (癩)

原因 諸種ノ刺激(器械的、化学的、温熱的刺激)ヲ與フル食品、又ハ物質ヲ嚥下マルカ、或ハ咽喉及胃加答兒ノ蔓延、若クハ傳染病即瘰癧、麻疹、猩紅熱、梅毒ニ併発ス。

其他慢性症ハ呼吸器及循環器病ニヨリテ発ス(梅毒血性加答兒)。

解剖的变化 炎症ノ急慢ニヨリテ粘膜ハ腫起潮紅シ、或ハ暗赤色ヲ呈ス。

症候 輕重ノ有ニアリテハ、臨床ニ何等ノ症候ヲ呈セザル事アリ。或ハ嚥下ノ際ニ胸骨部ノ内部ニ於テ疼痛ヲ訴ヘ(嚥下疼痛)持ニ粗大ナル食物過熱、若クハ刺激性食物ノ嚥下時ニハ疼痛著シク、為ニ嚥下困難ヲ呈ス事アリ(炎症嚥下困難)。

予後 原因ニヨリ異ルト雖モ、概ネ良ナリ、數日ニシテ治癒スルヲ常トス。唯急性傳染病ヨリ来レル者ハ致死的転帰ヲ取ル事アリ。

療法 果汁又ハ粥状食品ヲ與ヘ、香味、酒精、飲料ヲ嚴禁シ、氷片又ハ冷牛奶

肩背ノ刺激ハ深利マベカ
ラス注々
肩背ヲ起シ
テ穿刺スル
事アリ

ヲ與ヘ、鍼灸療法トシテハ誘導法トシテ、後頸部(天柱、凡池、完骨)棘上窩
肩背部(肩中、肩外、肩井、大抒、肩門、肘分)ヨリ適宜取穴シテ、利鍼五分
乃至七分、灸七壯乃至十一壯シ、更ニ上肢(三里、曲池)下肢(三里)等ニ施
鍼灸スベシ。

第八 食道狭窄 Verengerungen der Speiseröhre (癩)

原因 本病ハ其原因ヲ良性及恶性ニ區別ス。

(甲) 良性狭窄ハ食道ノ慢性潰瘍、薬品ノ腐蝕、異物(例ヘバ義齒、又ハ硬固、物質)ノ誤嚥及食道外ヨリノ圧迫(例ヘバ甲状腺腫、又ハ大動脈瘤、縱隔腫等)瘰癧性狭窄ハ神経性患者ニ来ル。

(乙) 恶性狭窄ハ食道癌腫ニ之ヲ見ル、癌腫ハ環状ニ発生スルガ故ニ、食道内径ヲ狭少ナラシメ、甚ダシキハ全ク是ヲ閉塞ス。而シテ本病原因中癌腫ハ最頻繁ナルモノトス。

解剖的变化 食道ノ狭窄ハ最も多く、食道ノ下三カノ一ニ現ル、是ニ次デ層々發スルハ氣管ノ分岐部ナリ、狭窄部ノ上方ハ多少拡張シ、其筋肉肥厚シ、粘膜